兵庫県文化財調査報告書　第89冊

神戸市

鷹取町遺跡

平成3年3月

兵庫県教育委員会

神　戸　市

鷹　取　町　遺　跡

平　成　3　年　3　月

兵　庫　県　教　育　委　員　会

例　言

1．本書は、兵庫県教育委員会が近畿郵政局の委託を受けて、確認調査を昭和62年８月25日～９月２日、全面調査を昭和62年10月１日～11月14日（第１次）昭和63年２月１日～２月10日（第２次）にかけて実施した鷹取町（たかとりちょう）遺跡（神戸市須磨区鷹取町２丁目所在）の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆は、藤田　淳・平田博幸・多賀茂治・大平　茂が行い、分担は目次と各章・節の本文末に（　）で示した。

3．本書の編集は、執筆者全員の協議のもとに、主として大平が行い、伴　悦子が補佐した。

4．遺構実測は、調査参加者全員が行い、遺構写真は調査員が撮影した。遺物実測、遺構トレース・遺物トレースは伴が行った。遺物写真は（株）サンスタジオに委託した。

5．本書に使用した方位は磁北であり、レベルは海抜標高である。

6．遺物の記載番号は、本文・挿図・図版と同一番号にしている。

7．土器実測図のうち、弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器は断面黒塗り、中世土器は断面網目で表現した。

8．本報告にかかる出土遺物及び写真関係等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所と兵庫県教育委員会魚住分館にて保管している。

9．発掘調査にあたり、須磨郵便局、神戸市教育委員会、南須磨公民館及び地元鷹取町の方々にご協力を頂いた。記して深く感謝するものである。

本 文 目 次

第1章　はじめに …… 1

第1節　調査に至る経過 …… (大平　茂) … 1

第2節　調査概要とその組織体制 …… 2

1．確認調査 …… (大平) … 2

2．全面調査 …… (大平) … 2

3．整理調査 …… (大平) … 6

第2章　遺跡をとりまく環境 …… 7

第1節　遺跡の立地 …… (藤田　淳) … 7

第2節　歴史的環境 …… (藤田) … 7

第3章　調査の記録 …… 10

第1節　遺跡の基本堆積土層 …… (藤田) … 10

第2節　検出遺構と出土遺物 …… 13

1．古墳時代前期　南区　土器棺・土壙・pit 群とその遺物 …… (半田博幸) … 14

2．古墳時代中期　南区　掘立柱建物址・pit 群とその遺物 …… (平田) … 19

南区　遺構に伴わない遺物 …… (平田) … 22

北西区　水田址と上層（洪水砂）の遺物 …… (大平) … 26

3．古墳時代後期　南区　土壙とその遺物 …… (平田) … 28

北東区　竪穴住居址とその遺物 …… (大平) … 29

北東区　土壙とその遺物 …… (大平) … 41

旧河道とその遺物 …… (大平) … 43

北東区　遺構に伴わない遺物 …… (大平) … 45

北東区　製塩土器 …… (多賀茂治) … 48

4．鎌倉時代　南区　掘立柱建物址・溝とその遺物 …… (平田) … 50

南区　土壙とその遺物 …… (半田) … 52

北東区　確認調査中世面の遺物 …… (平田) … 53

第4章　まとめ …… 55

鷹取町遺跡の性格とその位置づけ …… (大平) … 55

挿 図 目 次

第１図　試掘壙３土層断面 …… 1
第２図　調査地位置図 …… 3
第３図　確認トレンチ及びグリッド設定図 …… 4
第４図　会下山二本松古墳石室 …… 8
第５図　鷹取町周辺の遺跡 …… 9
第６図　パネルダイアグラム …… 11･12
第７図　古墳時代前期遺構配置図 …… 13
第８図　南区　土器棺１出土状況図 …… 14
第９図　南区　土器棺１・２ …… 15
第10図　南区　土器棺２出土状況図 …… 16
第11図　南区　土壙１遺物出土状況図 …… 17
第12図　南区　土壙１出土遺物 …… 18
第13図　南区　pit群内出土遺物（１） …… 19
第14図　古墳時代中期遺構配置図 …… 20
第15図　南区　掘立柱建物址１・２・pit群 …… 21
第16図　南区　pit群内出土遺物（２） …… 22
第17図　南区　古墳時代前期・中期包含層出土遺物（１） …… 23
第18図　南区　古墳時代前期・中期包含層出土遺物（２） …… 25
第19図　北西区　水田址上層出土遺物 …… 26
第20図　南区　遺構調査風景 …… 27
第21図　古墳時代後期遺構配置図 …… 28
第22図　南区　土壙２出土遺物 …… 29
第23図　北東区　竪穴住居址１ …… 30
第24図　北東区　竪穴住居址１出土遺物 …… 31
第25図　北東区　竪穴住居址２ …… 32
第26図　北東区　竪穴住居址２出土遺物（１） …… 33
第27図　北東区　竪穴住居址２出土遺物（２） …… 34
第28図　北東区　竪穴住居址２出土遺物（３） …… 35
第29図　北東区　竪穴住居址３ …… 36
第30図　北東区　竪穴住居址３出土遺物 …… 37
第31図　北東区　竪穴住居址４ …… 38

第32図　北東区　竪穴住居址４竈 …… 39
第33図　北東区　竪穴住居址４出土遺物（１） …… 39
第34図　北東区　竪穴住居址４出土遺物（２） …… 40
第35図　北東区　土壙３ …… 40
第36図　北東区　土壙３出土遺物 …… 41
第37図　北東区　土壙４・５ …… 41
第38図　北東区　土壙６ …… 42
第39図　北東区　土壙７ …… 42
第40図　北東区　土壙８ …… 42
第41図　旧河道（古・新）出土遺物（１） …… 44
第42図　旧河道（新）出土遺物（２） …… 46
第43図　北東区　古墳時代後期包含層出土遺物（１） …… 47
第44図　北東区　古墳時代後期包含層出土遺物（２） …… 48
第45図　北東区　古墳時代後期包含層出土製塩土器 …… 49
第46図　中世遺構配置図 …… 50
第47図　南区　掘立柱建物址３・溝３・土壙９・土壙10 …… 51
第48図　南区　掘立柱建物址３・溝３・土壙９出土遺物 …… 52
第49図　北東区　確認調査中世面出土遺物 …… 53
第50図　現地説明会風景 …… 54

表　目　次

第１表　鷹取町周辺の遺跡地名表 …… 9
第２表　古墳時代竪穴住居址一覧表 …… 49

図 版 目 次

図版表紙　　北東区　竪穴住居址２出土土器

図版１　上　調査地区遠景　（南から）

　　下　調査地区全景　（南から）

図版２　上　南区　土器棺１　（西から）

　　中　南区　土器棺２　（東から）

　　下　南区　土壙１土器出土状況　（南から）

図版３　上　北西区　水田址　（西から）

　　下　確認トレンチ10　水田大畦畔断面　（西から）

図版４　上　北東区　竪穴住居址群全景　（西から）

　　下　北東区　竪穴住居址１　（北から）

図版５　上　北東区　竪穴住居址２　（北から）

　　下　北東区　竪穴住居址２遺物出土状況　（東から）

図版６　上　北東区　竪穴住居址４　（南から）

　　下　北東区　竪穴住居址４竈　（南から）

図版７　上　北東区　旧河道断面　（西から）

　　下　南区　掘立柱建物址３　（北から）

図版８　土器棺１・２、土壙１、古墳時代前期・中期包含層出土遺物

図版９　古墳時代前期・中期包含層、水田址上層出土遺物

図版10　水田址上層、竪穴住居址１出土遺物

図版11　竪穴住居址２出土遺物

図版12　竪穴住居址２・３出土遺物

図版13　竪穴住居址４、土壙３、旧河道（古）出土遺物

図版14　旧河道（新）出土遺物

図版15　旧河道（新）、古墳時代後期包含層出土遺物

図版16　古墳時代後期包含層、中世面出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

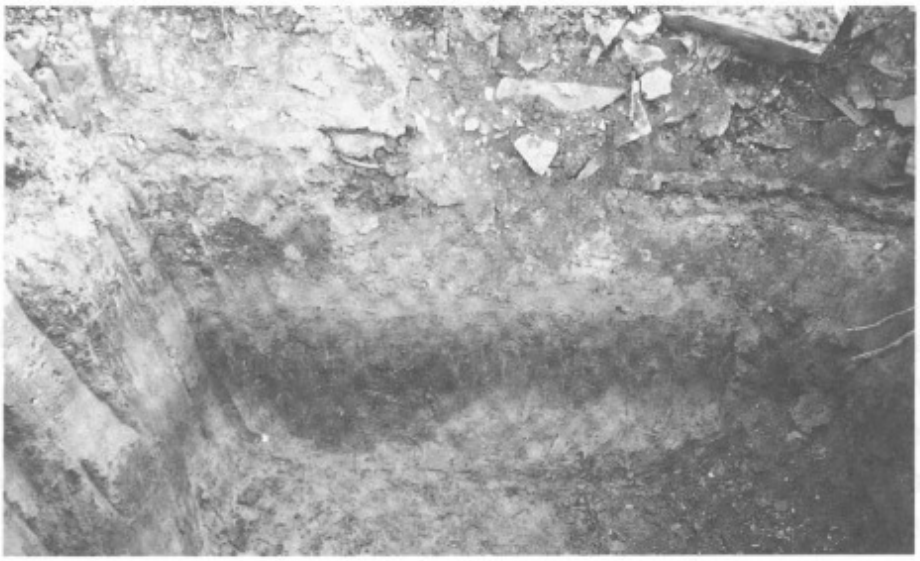
昭和57年10月、近畿郵政局須磨郵便局（須磨区太田町所在）の移転新築計画が立案され、その事前調査と設計事務が始まった。

そして、昭和59年12月になり、神戸市須磨区鷹取町２丁目１－１の用地買収から着手されることとなった。

一方、鷹取町遺跡の所在する神戸市須磨区鷹取町の市街地周辺は、これまで埋蔵文化財は存在しないと考えられた空白地域である。

しかし、存在しないのではなく、早くから市街地化が進められたため見つかることがなかったのだということが、近年の神戸市教育委員会による市街地再開発に伴う発掘調査で明らかになってきた。神楽遺跡・松野遺跡・戎町遺跡等がそれである。

そこで、兵庫県教育委員会と近畿郵政局は協議に入り、昭和62年８月７日に遺跡の有無を確認するための、立ち会い調査（試掘壙３ヶ所）を実施したのである。その結果、古墳時代前期の土壙をはじめ２ヶ所で遺物包含層を検出した。この成果にもとづき、事業区域内の埋蔵文化財の取扱いについて、教育委員会は再度郵政局と協議を重ねた。そして、計画地内にかかる全面調査の必要範囲と、それにかかる期間・経費を算出するための確認調査の必要性があるという結論に至ったのである。　　（大平　茂）



第１図　試掘壙３土層断面

第２節　調査概要とその組織体制

１．確認調査

確認調査は、昭和62年８月末に実施した。調査の目的は、建物建設事業用地内の遺構の有無および性格、さらにその範囲と年代を確認することにある。

試掘壙（３ｍ×５ｍ）は用地範囲に合わせ、縦横に13ヶ所を設定した（第３図）。北の１トレンチから開始したが、調査の進行状況（包含層・遺構の検出等）により一部トレンチを拡幅している。その結果、No.４トレンチで古墳時代の河道を検出した。また、河の南（No.５・６）には古墳時代前期・中期の遺構面及び包含層を確認し、北（No.２・３・７）では古墳時代後期の住居址と考えられる落ち込みを発見している。さらにその下層西側一帯に古墳時代（中期末以前）の水田面が拡がることも明らかになった。

発掘調査の組織体制

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課長	北村　幸久
		参事	森崎　理一
		課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長	大村　敬通
		主査	池田　正男
	調査担当	主任	大平　茂
		技術職員	藤田　淳

調査実施期日

（自）昭和62年８月25日 ～ （至）昭和62年９月２日

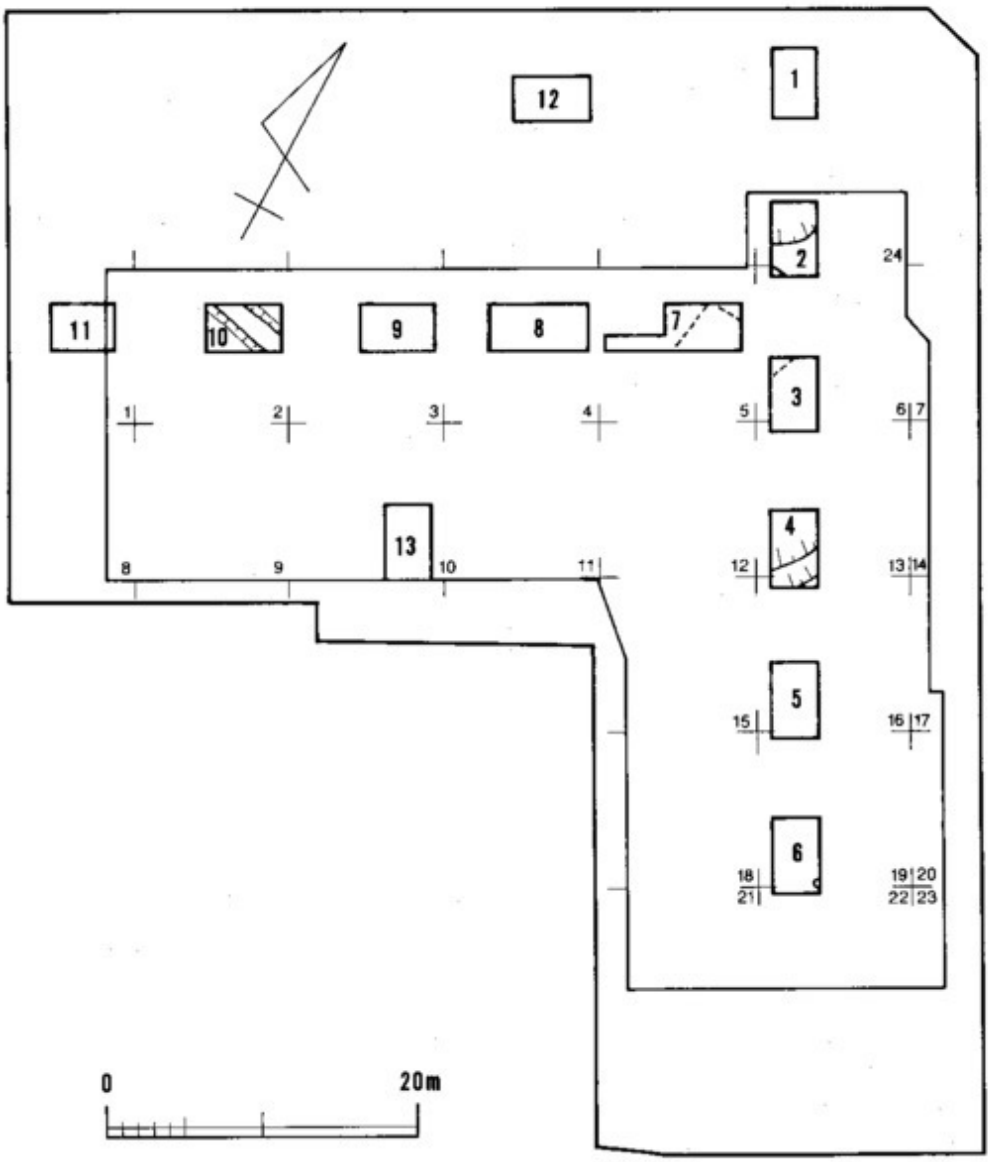
２．全面調査

前記した確認調査の結果を受けて、同年10月から建物建設用地にあたる部分の全面調査に入った。調査区は、中央部をほぼ北から南へ流れる旧河道よって北区と南区に分断され、この河道を境として遺構の時期は若干異なっている。

調査実施の目的は、この部分の遺構の拡がり（範囲）及び性格、さらに正確な年代を確認することにある。特に、南区の古墳時代前・中期の遺構、北西区の水田、北東区の古墳時代後期住居址の内容実態を把握することが重要な視点である。

調査方法は、建物建設用地の北東隅を基準にして10ｍグリッドを設定した。地区の名称は第

第２図　調査地位置図



第３図　確認トレンチ及びグリッド設定図

３図の通りであるが、大きく南区・北西区・北東区の三つに分けている。なお、全面調査は郵政局の都合により第１次と第２次の２時期に分割して実施した。

南区の調査

調査は用地内に掘削土を仮置きする場所が確保出来ないため、南区の盛土整地層と旧耕作土層の機械掘削とその搬出から入り、古墳時代中期包含層上面の人力掘削・精査を始めた。そこで、当初予想しなかった雨落溝を伴う掘立柱建物址を検出した。時期は、雨落溝出土の土器とこの溝を切る形で発見した土壙の土器から考えて13世紀代のものと推定出来る。次いで、古墳

時代包含層の掘削に入る。遺構がこの中期面では非常に確認しがたく、さらに下層へと掘り下げて検出することにした。そして古墳時代前・中期と考える土壙・土器棺・柱穴を発掘していった。所属時期については、埋土・遺物等から決定している。

北東区の調査

旧河道の北東部には、南区で検出したような古墳時代前期の遺構は認められなかった。まず盛土整地層と旧耕作土層の機械掘削を行い、古墳時代後期の河道（新段階）の人力掘削を完了した。次いで、同時期の竪穴住居址と土壙等を調査した。これらは、いずれも河道北の自然堤防上の微高地に立地する。また、河道北端の落ち込み際では製塩土器等を持つ包含層も確認した。そして11月７日に、これまでの成果を中心に現地説明会を実施している。

この後、一時中断して旧河道（古段階）の再掘削に入る（第２次調査）。

北西区の調査

旧河道（古段階）の再掘削とあわせ、竪穴住居址の西下層に拡がる洪水砂に覆われた水田面の精査を行った。この地区は、これ一面のみの調査である。これをもって現地の調査は完了している。

発掘調査の組織体制

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課長	北村　幸久
		参事	森崎　理一
		課長補佐兼埋蔵文化財調査係長	大村　敬通
		主査	池田　正男
	調査担当	主任	大平　茂
		技術職員	市橋　重喜（二次のみ）
		技術職員	平田　博幸（一次のみ）
		調査補助員	田中　騰、斎木　巌、今村　直子
		現場事務員	村上　貴子

発掘作業委託　（株）染の川組

調査実施期日

（自）昭和62年10月１日 ～ （至）昭和62年11月14日（第１次）

（自）昭和63年２月１日 ～ （至）昭和63年２月10日（第２次）

3．整理調査

近畿郵政局から委託を受けた兵庫県教育委員会は、平成２年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所において整理作業を実施した。整理作業の内容は、１．水洗　２．ネーミング　３．接合・復元　４．実測・拓本　５．写真撮影　６．トレース　７．原稿執筆　８．レイアウト　９．印刷　10．報告書刊行である。

出土遺物は、整理用コンテナ20箱であり、各遺構から発見した古墳時代土師器・須恵器がその大半を占める。他には若干の石製品と鉄製品がある。

なお、出土遺物の一部は、昭和62年12月に神戸市立南須磨公民館において特別展示をした。さらに、63年４月末から５月にかけて須磨区民センターにも貸出展示を行っている。

整理調査の組織体制

調査主体　兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

調査体制	事務担当	所長	内田　隆義
		副所長	村上　紘揚
		副所長	才木　　繁
		整理普及課長	松下　　勝
		主査	岡崎　正雄
		技術職員	岸本　一宏
	調査担当	主査	大平　　茂
		技術職員	市橋　重喜
		技術職員	平田　博幸
		技術職員	藤田　　淳
		嘱託職員	伴　悦子、二階堂　康
		同上	和田寿佐子、中田　明美

なお、本報告書作成中の平成２年５月３日技術職員の市橋重喜が急逝し、担当者一同大変な衝撃を受けた。33歳の若さであり、当県の文化財行政にとっては必要欠くべからざる存在であっただけに、その損失は計り知れないものがある。ここに記し、深く哀悼の意を表します。

（大平）

第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　遺跡の立地

鷹取町遺跡は六甲山系の南に東西に細長く形成された西摂平野の西端付近に位置する。遺跡は妙法寺川河口部の左岸にあり、現海岸線まで直線距離で約１km、標高約４mを測る。遺跡の周辺は市街地化が進んでおり、また、海岸沿いの須磨港周辺も埋め立てが進んでいることから、旧地形をほとんど留めていない。

なお、遺跡の所在する鷹取町は遺跡の北方にある高取山に由来するものである。（藤田　淳）

第２節　歴史的環境

鷹取町遺跡が所在する神戸市須磨区は万葉集にも詠まれ、古くから知られたところである。

近年、市営地下鉄建設・市街地再開発などの事業に伴い、これまで、市街地の中に埋もれ、断片的にしか知られていなかった遺跡が、数多く発掘調査によって明らかにされるようになってきた。ここでは、発掘調査によって遺構が検出された遺跡を中心に、鷹取町遺跡周辺の遺跡を概観していきたい。

旧石器・縄文時代

旧石器・縄文時代の遺跡は少なく、縄文中期まででは、会下山遺跡（ナイフ形石器）、境川遺跡（押型文土器）、名倉遺跡（中期）などで断片的な資料が採集されているにすぎない。縄文時代後晩期になると、五番町遺跡、楠・荒田町遺跡、長田神社境内遺跡などで、土壙などの遺構が認められたり、ややまとまって土器が出土している。

弥生時代

前期の遺跡では、多数の貯蔵穴が検出された楠・荒田町遺跡、不定形小区画水田が検出された戎町遺跡などがあるが、住居址が検出された遺跡はまだ知られていない。中期では、戎町遺跡で竪穴住居址を含む遺構が検出されているが、具体的な内容の判る遺跡は少ない。後期では、長田神社境内遺跡で竪穴住居址・掘立柱建物などが検出されている。竪穴住居址には、六角形のものや、ベッド状遺構をもつものが認められる。

古墳時代

前期の古墳では、妙法寺川から湊川流域間の丘陵頂部に築造された、得能山古墳・会下山二本松古墳・夢野丸山古墳が著名である。これらはいずれも埋葬施設に竪穴式石室を採用し、中国鏡をはじめとする多数の服葬品が存在するという点で共通している。また、墳形についても、後世の改変が著しいもののすべて前方後円墳であったという考えもある。中期の古墳では、市

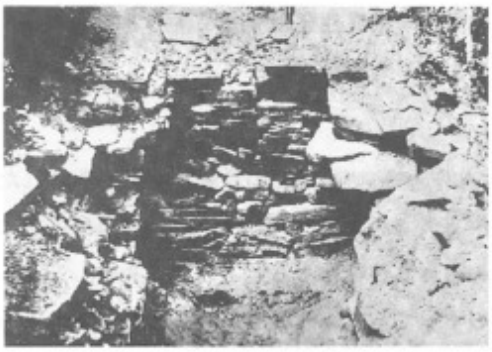
街地化の波にのまれその姿をみることはできないが、旧苅藻川河口付近に存在した念仏山古墳は全長 180ｍの前方後円墳であったと推定されている。後期の古墳も、旧苅藻川河口付近や中流の池田町や大塚町、六甲山南麓の潮見台や祇園町などに群集墳が形成されていたらしいが、現存するものは数少ない。

集落遺跡は近年、調査例が増加している。中期の遺跡では、三番町遺跡で竪穴住居址と大溝が検出されている。神楽遺跡では掘立柱建物と竪穴住居址、土壙、溝などが検出されており、特筆すべき遺物としては「韓式系土器」がある。また、後期の掘立柱建物と井戸状遺構もあり、井戸状遺構からは滑石製の勾玉、有孔円盤、臼玉が出土しており、祭祀に関連する遺構であると考えられている。後期の遺跡では、松野遺跡で柵列に囲まれた中に総柱の掘立柱建物群と竪穴住居址が検出されている。湊川遺跡では、掘立柱建物と竪穴住居址が検出されており、掘立柱建物から竪穴住居址への移行が出土土器から推定されている。竪穴住居址には竈を有するものが認められる。古墳時代後期の集落は、先述の旧苅藻川河口付近や中流に位置する後期古墳と近接した位置にあり、両者の間には何らかの関係があったものと推定される。

また、窯跡では、長田区林山町の林山古窯跡が知られるのみである。炭や窯壁と考えられる粘土塊とともに、６世紀後半と推定される須恵器が採集されている。

奈良時代以降

奈良時代においては、当地域は摂津国雄伴郡に属し、平安時代には八部郡と改められている。神楽遺跡では奈良時代から平安時代の正方形の大型掘方をもつ掘立柱建物が検出され、緑釉陶器、墨書土器なども出土していることから、八部郡衙との関連が想定されている。また、室内遺跡（房王寺遺跡）からは、奈良時代から平安時代の瓦が出土しており、八部郡衙の付属寺院とも推定されているが、明確な遺構は検出されていない。平安時代末には、当地域に福原京が計画され、大輪田泊が整備されているが、これに関連すると考えられる遺構は長らく不明であった。楠・荒田町遺跡で検出された掘立柱建物と濠は、福原京あるいは平家一門の邸宅との関連が注目されるものである。（藤田）



「兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第５輯より転載」

第４図　会下山二本松古墳石室

第５図　鷹取町周辺の遺跡

第１表　鷹取町周辺の遺跡地名表

1	鷹取町遺跡	須磨区鷹取町２丁目	古墳時代	17	長田神社境内遺跡	長田区長田町	弥生時代
2	境川遺跡	須磨区西須磨	旧石器～縄文時代	18	長田南遺跡	長田区五番町	弥生時代
3	鉢伏山遺跡	須磨区西須磨	旧石器～弥生時代	19	五番町遺跡	長田区五番町・菅原町	縄文時代
4	潮見台古墳群	須磨区潮見台町	古墳時代	20	三番町遺跡	長田区三番町	弥生時代
5	得能山古墳	須磨区大手町	古墳時代	21	室内遺跡	長田区前原町	白凰～平安時代
6	戒町遺跡	須磨区戒町	弥生時代	22	名倉町遺跡	長田区名倉町	縄文時代
7	松野遺跡	須磨区寺田町他	弥生～古墳時代	23	林山古窯址	長田区林山町	古墳時代
8	神楽遺跡	長田区神楽町	弥生～平安時代	24	会下山二本松古墳	長田区会下山町	古墳時代
9	念仏山古墳	長田区苅藻通	古墳時代	25	会下山遺跡	長田区会下山町	旧石器・弥生時代
10	古墳	長田区苅藻通	古墳時代	26	熊野遺跡	兵庫区熊野町	弥生時代
11	古墳	長田区駒栄町	古墳時代	27	河原遺跡	兵庫区熊野町	弥生時代
12	古墳	長田区駒栄町	古墳時代	28	夢野丸山古墳	兵庫区北山町	古墳時代
13	池田古墳群	長田区大谷町	古墳時代	29	東山遺跡	兵庫区北山町	弥生時代
14	池田古墳群	長田区大谷町	古墳時代	30	古墳	兵庫区上祇園町	古墳時代
15	池田古墳群	長田区池田上町	古墳時代	31	楠・荒田町遺跡	兵庫区荒田町他	弥生～鎌倉時代
16	池田古墳群	長田区池田経町	古墳時代				

第３章　調査の記録

第１節　遺跡の基本堆積土層

確認調査および全面調査において断面観察によって、土層の堆積状況をみたところ、現地表下約 1.5m ～3.8mには灰色あるいは黒色の砂質シルトの層が厚く堆積しており、遺跡周辺が湿地状であったか、あるいは緩やかな流れの中にあり、徐々に堆積が進んでいったことがうかがわれる。現海岸線から直線距離で１kmほどしか離れていないにもかかわらず、海成と考えられる砂層の堆積は、掘削が及んだ深度では認められなかった。

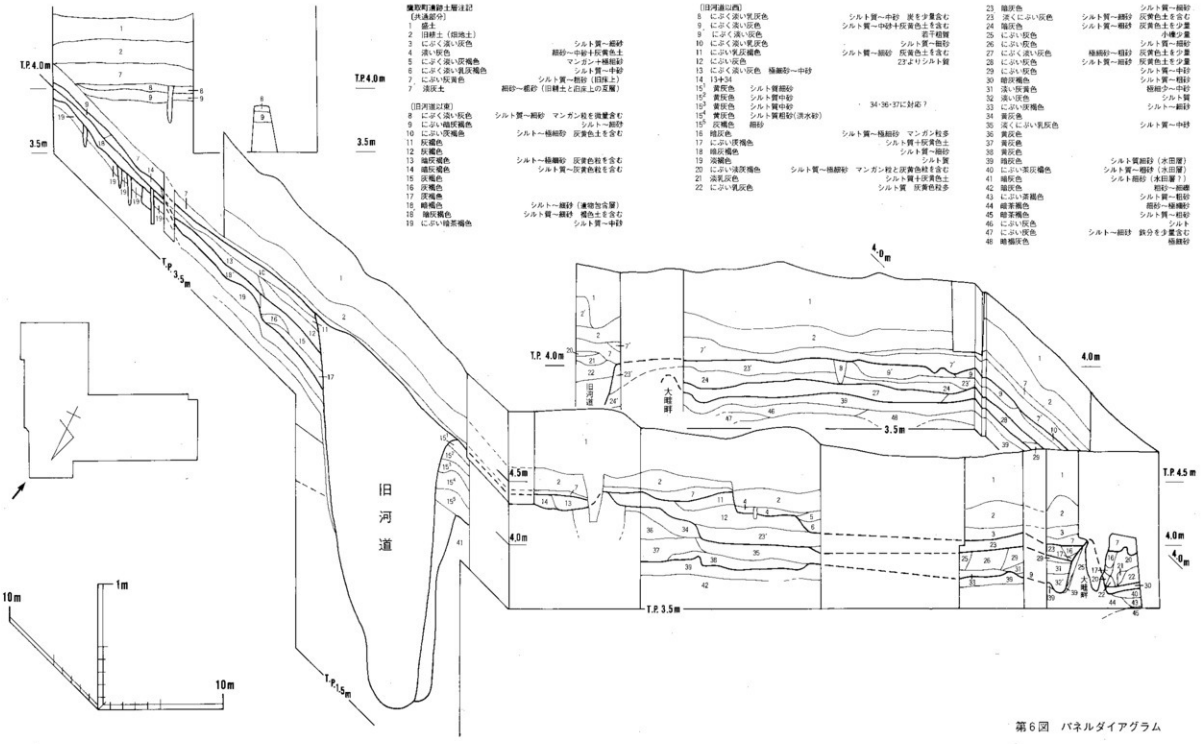
第６図のパネルダイアグラムは、このシルト層の堆積がほぼ終了した段階以降の土層堆積状況を示す。調査区のほぼ中央部には旧河道が南流している。旧河道にはほぼ同じ位置に二時期のものがあり、古段階の旧河道は、北壁の41層から切り込んでいる。また、新段階の旧河道は７層（旧床土）直下から切り込んでいる。この間の堆積の状況は、旧河道を挟んだ東と西では様相が異なっている。

まず、旧河道の東側では、旧河道に向かって、各々の層が次第に深度を増してゆく傾向が認められ、旧河道に近づくほど、層の数も多くなっている。旧河道が埋没する７層以下は12層以上に分層されるが、この中で、遺構面と認定できるのは、７層直下（８～10・14層上面）・18層上面・19層上面の３つの面である。旧床土である７層の直下では中世の掘立柱建物が検出されている。18層は暗褐色のシルト～細砂の層で、古墳時代前・中期の土器を含む包含層である。断面観察ではこの層の上面から掘り込まれた遺構状のものが存在することが確認されるが、埋土の識別が困難であったため、平面的な調査には至らなかった。18層直下の19層は、にぶい暗茶褐色のシルト～中砂の層であるが、この上面では古墳時代前期の遺構が検出された。

次に、旧河道の西側では、調査区北壁の断面で、明瞭な自然堤防状の微高地を認めることができる。この微高地を構成する層（15－１～15－５・34・36・37層）は、旧河道から遠ざかるほどシルトの含有量が多くなっており、これらの層が旧河道から供給されたものであることを物語っている。また、微高地は調査区の南壁側では高まりが不明瞭なものとなっている。微高地上は、古墳時代後期の生活面となっており、竪穴住居址などの遺構が検出されている。

微高地下では、調査区西半部全域に分布する39・40層の上面で、古墳時代中期末以前と推定される水田面が検出されている。調査区北壁ではこの水田に伴う大畦畔の隆起が明瞭に観察できる。また、古段階の旧河道は39層と対応すると想定される41層の上面から切り込んでおり、水田の大畦畔の方向とも整合しないことから、この水田よりも新しい段階のものと推定される。

以上のように、鷹取町遺跡では、旧河道を挟んだ東西で古墳時代～中世の遺構面を調査することができた。（藤田）

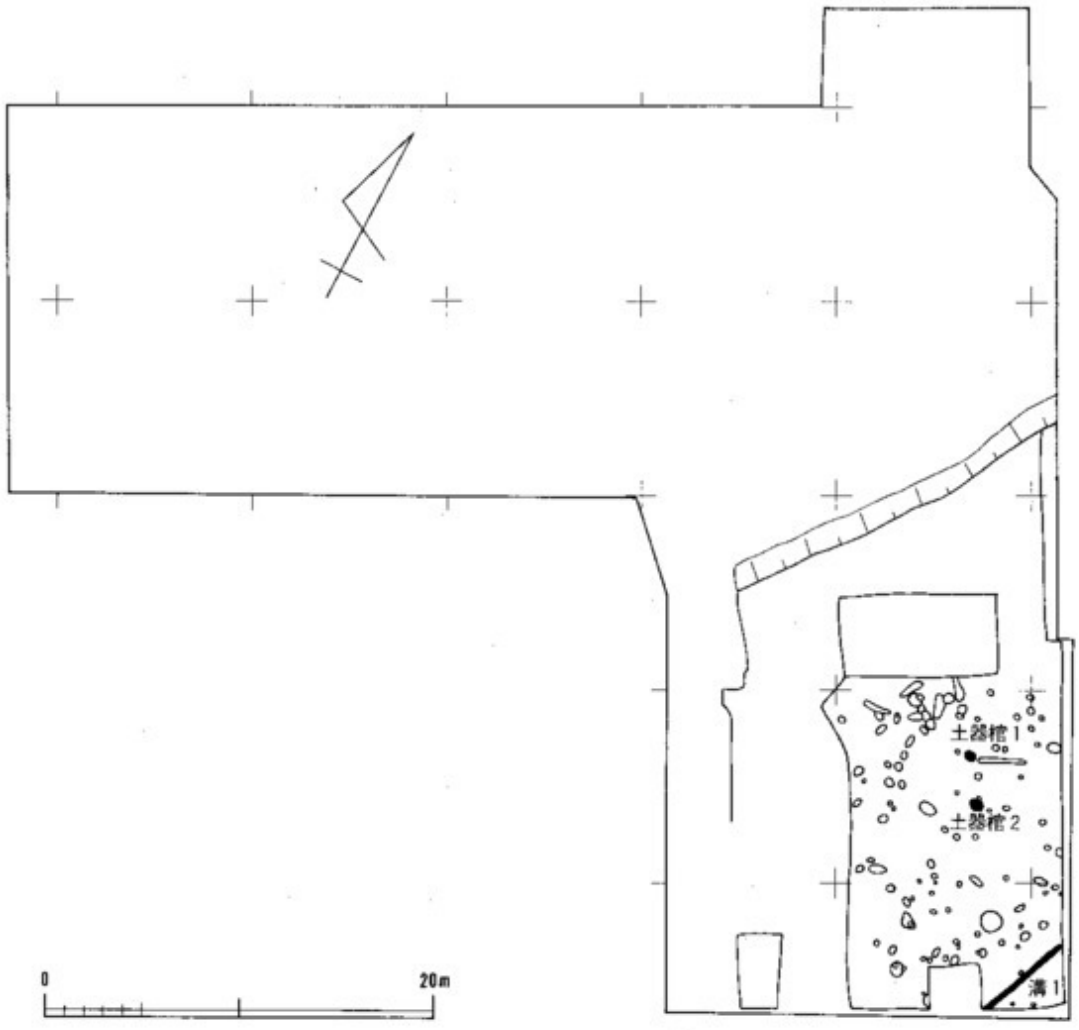


第6図　パネルダイアグラム

第２節　検出遺構と出土遺物

１．古墳時代前期（第７図）

この時期の遺構は、旧河道より南東側の南調査区のみに存在し、それより北西側には一切見られない。多くの pit を検出したが、掘立柱建物址等になるものはなく、その性格は不明である。これらの pit 群と共に、土師器の壺を内部に包含する土壙が２基と、土器片を大量に含む土壙が１基見られる。また、ほぼ南北方向を示す溝１もこの時代に属するものかと思われる。遺構内および包含層内出土の土器には須恵器がまったく含まれていないため、これらの遺構は５世紀後半以前に属するものと考える。

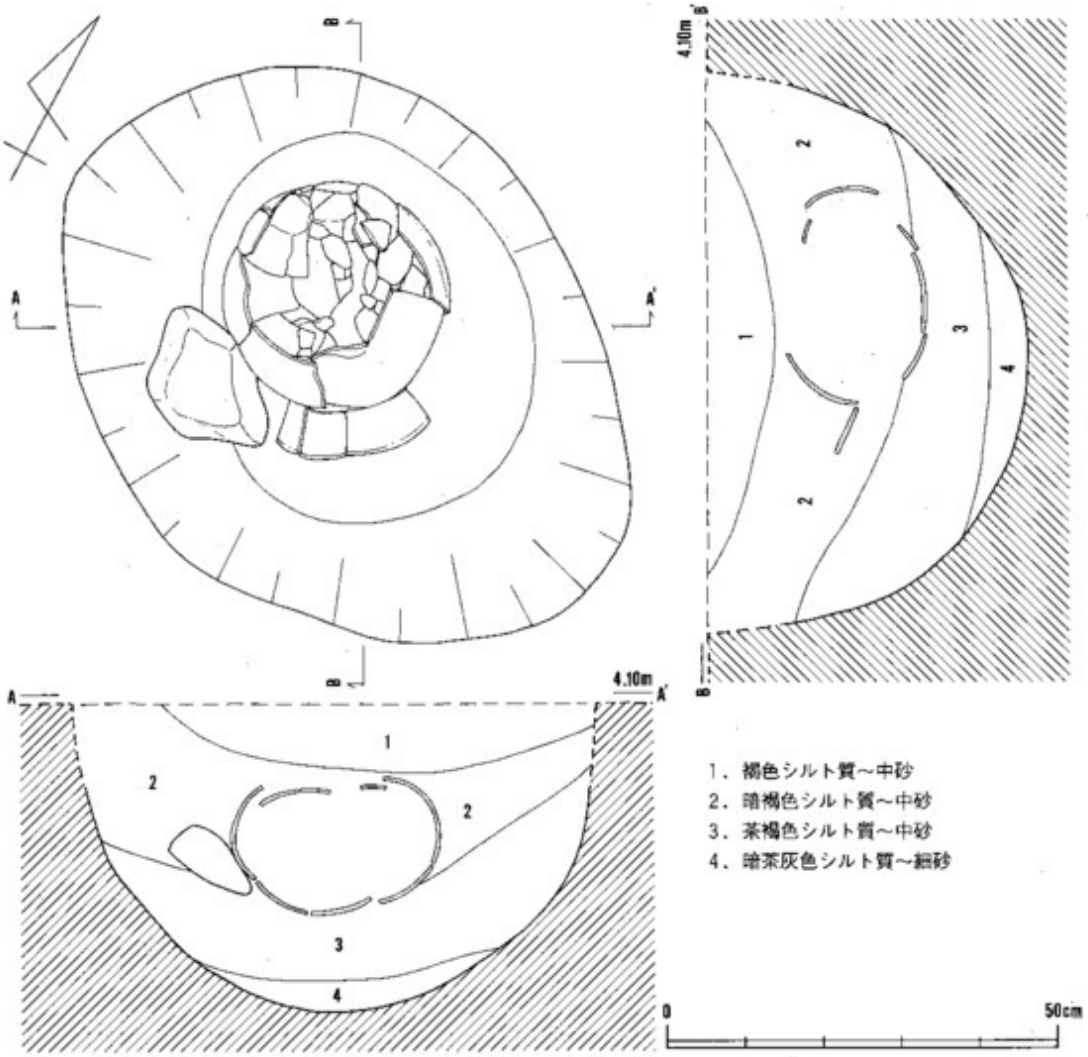


第７図　古墳時代前期遺構配置図

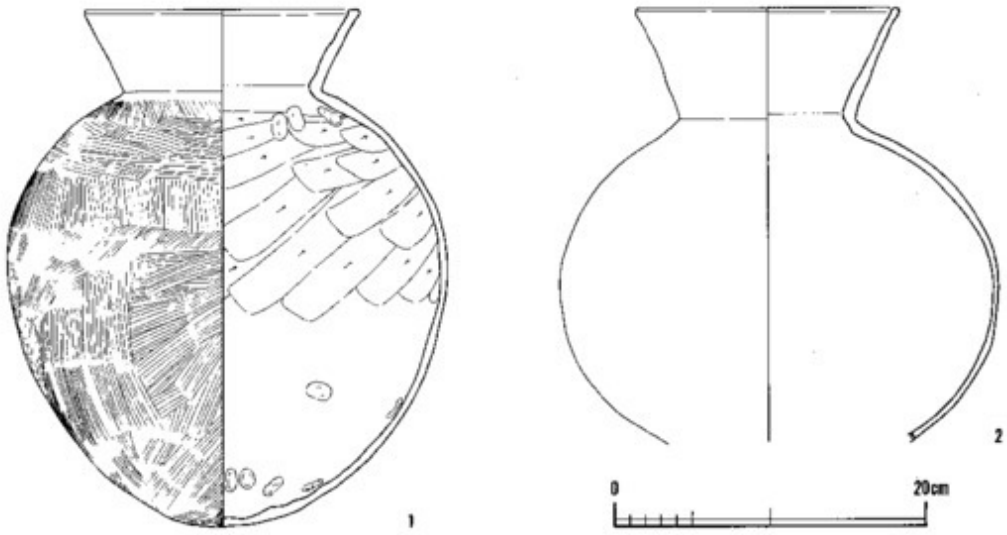
◎南区　　土器棺・土壙・pit 群とその遺物

A．土器棺１（第８図・図版二上）

南調査区のほぼ中央に位置する。復元長径約80cm、短径約60cmを測る。長径を東西方向に取り、平面形楕円形を呈する。復元深度約40cmで、断面は緩やかな「U」字形をなす。壙内には土師器壺が１個体、口縁部を南東方向に向け、土壙の長軸とはずれる方向で横たえられている。壺は壙底から約20cmほど浮いており、埋土３・４を入れた後ほぼ水平に据付けている。口縁部の西側には、蓋石かと思われるような偏平な河原石が１つ見られる。



第８図　南区　土器棺１出土状況図



第９図　南区　土器棺１・２

土器棺１の土師器（第９図左・図版八上左）

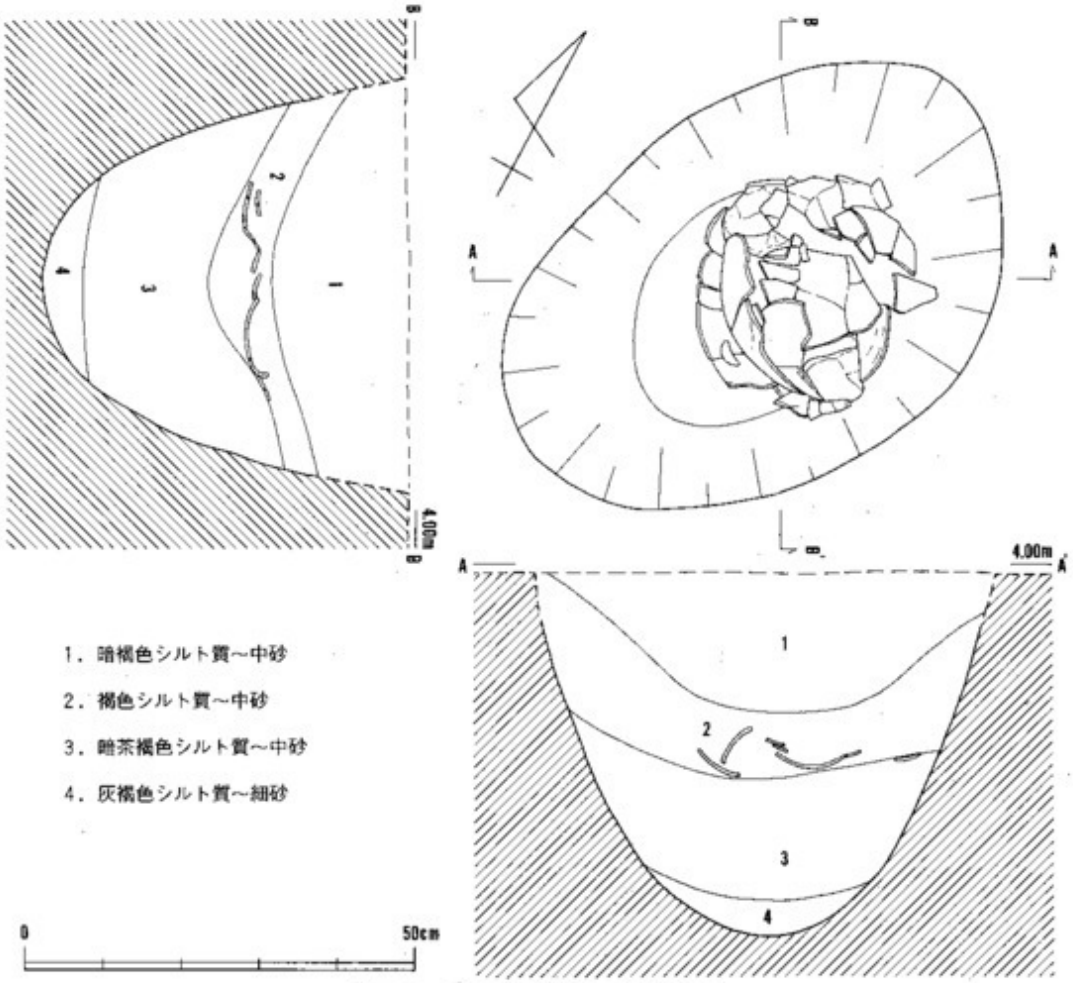
口径18.4cm、器高33.5cmを測る壺である。口縁部は直線的で「く」の字に屈曲し、口縁端部が内側に若干肥厚する。体部は球形であり、底部は倒卵形に近い形を呈する。外面上半には縦方向の後横方向の刷毛目を施し、下半から底部にかけては縦方向の刷毛目が基本的となる。内面は上半を斜め横方向にヘラケズリし、下半は指頭圧の後ナデる。口縁部は内外面ともヨコナデする。ほぼ完形であるが、胴部等には穿孔の痕跡は見られない。

B．土器棺２（第10図・図版二中）

土器棺１の南東約2.5mにある。復元長径約70cm、短径約50cm、深度約50cmを測る。底部は深い「U」字形を呈する。長径を南北方向に取り、平面形は楕円形を示す。壙内には壙底から約20cm浮いた状態で、土師器壺がほぼ水平に横たえられている。埋土３・４を入れた後壺を据え、埋土１・２で充塡したものと思われる。口縁部を欠損するが、土器自体はおそらく土器棺１同様南東方向を向いていたものと思われる。壺の方位が土壙の長軸とずれている状態も、土器棺１の場合と状況が似ている。

土器棺２の土師器（第９図右・図版八上右）

やや長めの口縁部は直線的で、「く」の字形に開き、端部の内側に肥厚の痕跡がみられる。体部は若干偏平な球形を呈する。底部は欠損するものか、打ち欠いたものかの判断はできない。口縁部の内外面はヨコナデし、体部外面はナデ調整する。体部内面は剝離が著しく、調整は不明である。壙内の壺の上半は後世の攪乱により欠損するにもかかわらず、下半は比較的良く遺存している。土器棺１の場合同様胴部等への穿孔はみられないが、壺棺と考えられる。



第10図　南区　土器棺２出土状況図

C．土壙１（第11図・図版二下）

土器棺２の南東約６ｍの位置にあり、土器棺１・２の延長線上に位置する状態にある。平面形は、径約１ｍの不定円形を呈している。土壙の東側と南側は二段掘り状になっており、底部は径約40cmの平底である。多くの土器は壙底に埋土３・４を入れた後に投入されており、それも二段掘りの内側（壙底の深くなる範囲）に集中している。土器の多くは破片であり、その間に炭化物の薄い層が確認できる。基本的に土器は埋土２内に含まれており、そのレベルがちょうど二段掘りの段の高さに当たっている。

土壙１内出土の土器

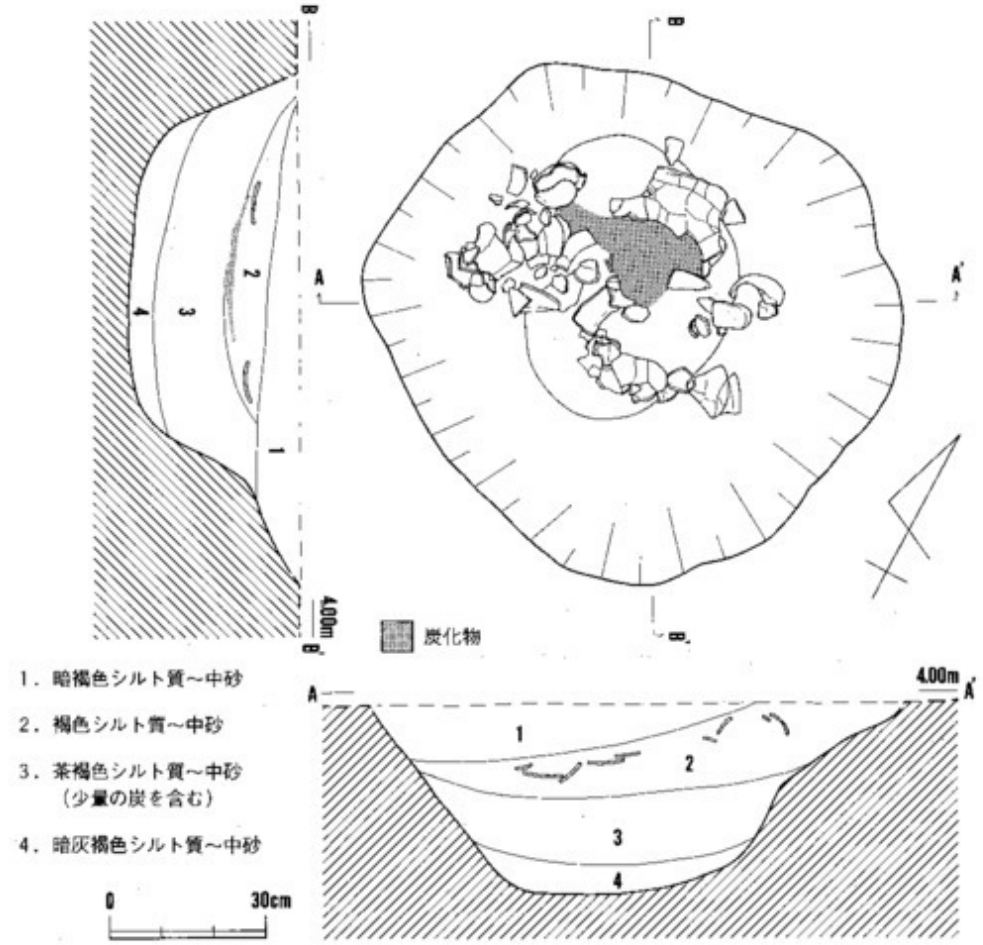
壙内より出土する土器には、丸底壺（３．４）・鉢（５～７）・器台（８）・壺（９．11）・甕（11～17）等庄内期から布留期に属する土器が出土している。

土師器（第12図・図版八中左）

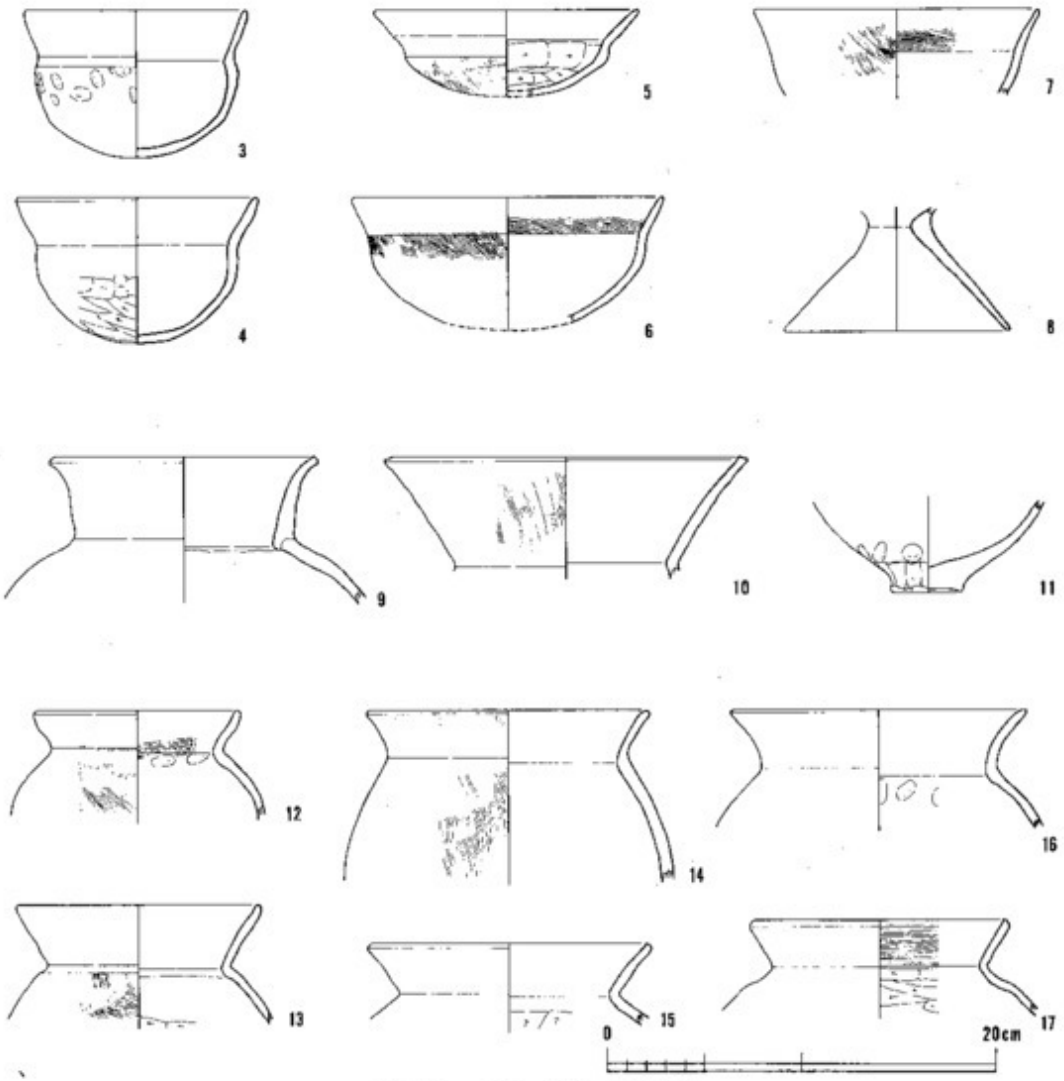
丸底壺（3．4）とも頸部径が大きく、口縁部はわずかに外反して開く。胴部はほとんど張らず、丸底となる。（3）は体外面の一部に指頭圧の痕跡があり、底部内面は不定方向にナデる。口径約11.2㎝、器高7.5㎝を測る。（4）は、底部を不定方向に、体部との境を横方向にヘラケズリする。内面はすべてヨコナデする。口径約12.1㎝、器高7.5㎝を測る。

鉢（5）は口径約13.4㎝、器高4.4㎝とほとんど体部がない。底部は偏平な丸底で、短く立ち上がった後口縁部が大きく外反して開く。底部外面は不定方向に刷毛目調整し、内面は横方向にヘラケズリする。（6）は口径が約15.8㎝と大きい。口縁部は短く、わずかに外反する。（7）は口径が14.4㎝で、底部を欠損する。頸部の窪みは極わずかであり、体部との境が識別し難い。口縁部の外反も少ない。体部外面は斜め縦方向に刷毛目調整し、口縁部内面を板ナデする。

器台（8）は上半を欠損し、脚部だけであるが直線的に大きく開き、脚部径約11.4㎝をみる。内外面とも剝離が著しく、調整は不明である。現高約6.4㎝を測る。



第11図　南区　土壙1遺物出土状況図



第12図　南区　土壙１出土遺物

壺（９）は口縁部がわずかに開いて立ち上がった後、端部が大きく外弯する。口径約13.2㎝、現高約7.5㎝を測る。体部外面は剥離のため調整不明であり、内面はナデる。(10) はかなり長い口縁部であり、直線的に大きく外反する。口径約17.8㎝、頸部以下を欠損する。

甕 (11) は高台状の底部であり、高台部外面は縦方向にヨコナデし、その上部は指頭圧する。(12) は口径が約10.2㎝、(13) は約12.4㎝と小型である。(12) は口縁部が極わずかに内弯しながら短く開き、(13) は直線的に長く開く。(12) は体部外面を縦方向に刷毛目調整し、口縁部内面を板ナデする。(13) も体部外面を縦方向に刷毛目調整し、内面は下半を横方向にヘラケズリする。(14.15) は大型となる。両方とも口径は約14㎝で、口縁部が「く」の字形に屈曲

第13図　南区　pit 群内出土遺物（１）

し、直線的に開く。(14) は体部外面を縦方向に刷毛目調整し、(15) は体部内面を横方向にヘラケズリする。(16) は口縁部がわずかに外弯しながら開き、頸部内面に指頭圧痕を残す。口径は約14.7㎝である。(17) は頸部に口縁部を屈曲させる際のヨコナデによる小さな段を持つ。口径約12.7㎝の口縁部は直線的に短く開く。

D．pit群

pit 群は、南調査区でもその南側に集中して見られる。古墳時代中期の pit 群と同一面で確認しており、さらに埋土もすべてが褐色であるため、pit を各時期毎に識別することは非常に困難である。径15～20㎝と比較的小型のものが多い。これらのpitによって、この時期に属すると考えられる掘立柱建物址等を復元することは出来なかった。

pit内出土の土器（第13図）

土師器

小型丸底壺の底部（18.19）・壺底部（20）・甕（21）が出土している。

小型丸底壺の底部（18）は現高が約2.7㎝あり、底部外面を刷毛目調整し、体部は内外面ともユビナデして仕上げる。(19) は内外面ともユビナデ調整かと思われる。現高約3.1㎝を測る。

壺底部（20）は小さな平底であり、底部外面はナデ調整する。体部外面は指頭圧の後ユビナデし、内面はヘラアテを行う。

甕（21）は口縁部が直線的に「く」の字形に外反し、端部は丸くおさまる。口縁部内面は板ナデし、頸部内面はヨコナデと思われる。　（平田博幸）

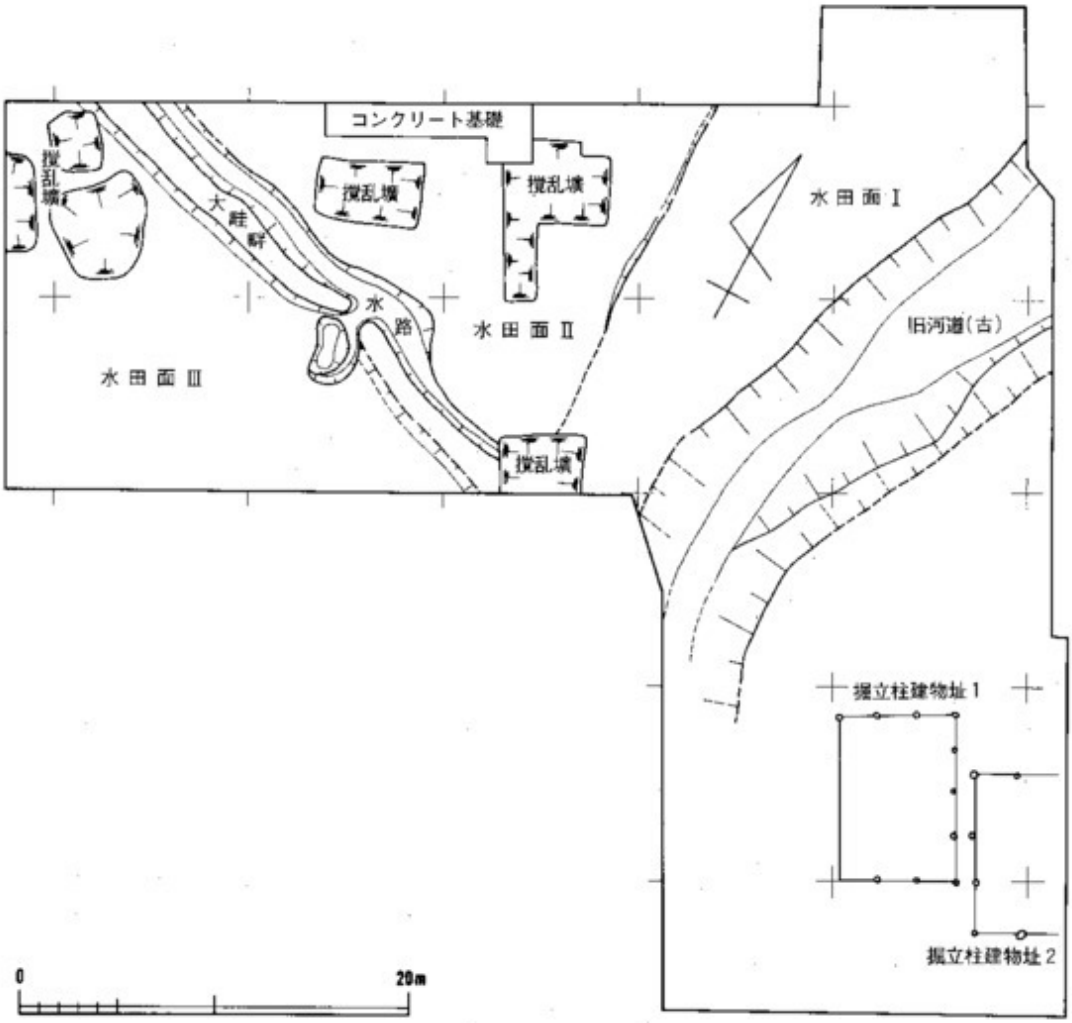
２．古墳時代中期（第14図）

前代には活用が見られなかった旧河道の北西には、新たに水田が展開され生産域として利用されるようになるが、生活域は前代同様南調査区に限られている。

◎南区　　掘立柱建物址・pit 群とその遺物

A．掘立柱建物址１（第15図）

梁間３間、桁行４間の規模があり、桁行柱列をほぼ北西・南東方向に取る南北棟建物址である。梁間の長さは約６ｍで、柱心々間の距離は約２ｍ。桁行は約8.5 ｍ、心々間距離はほぼ２

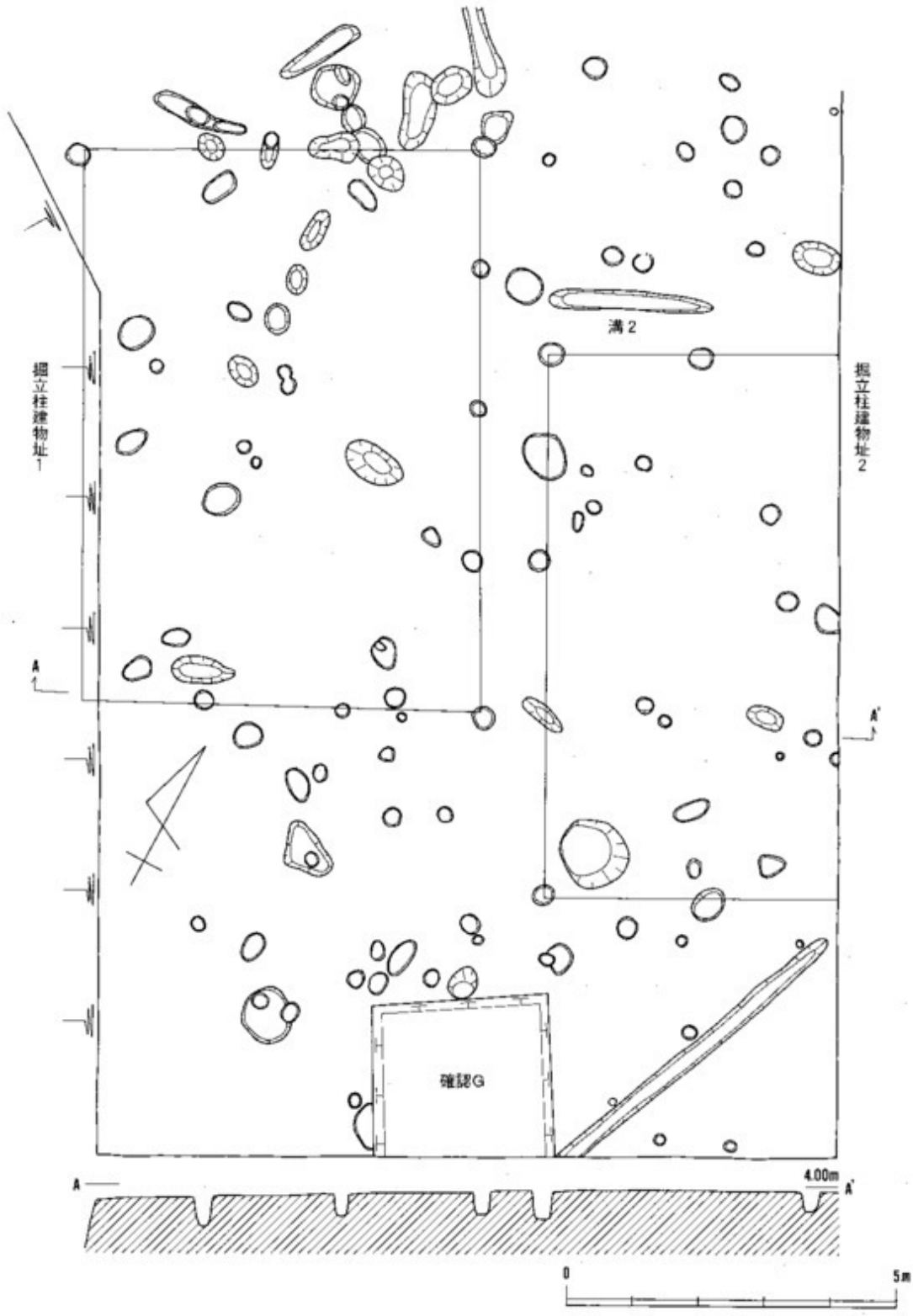


第14図　古墳時代中期遺構配置図

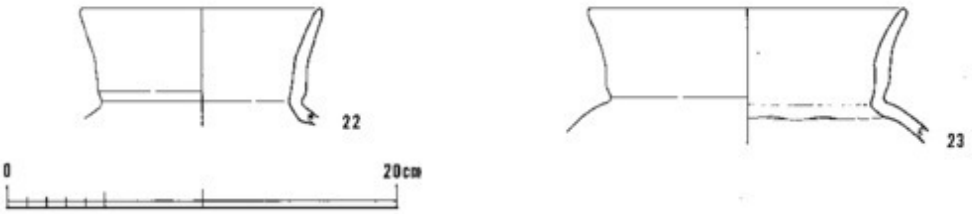
mである。南調査区の中央西寄りに位置する。西桁行柱列は後世の撹乱によって消失する。

B．掘立柱建物址２（第15図）

東西柱列を２間分、南北柱列で３間を確認する。東側の南北柱列が調査区外となるため、建物の方向は不明であるが、南北の柱行の距離が掘立柱建物址１の桁行の長さとほぼ等しいため、同規模の南北棟建物址になるものと思われる。桁行柱列の長さ約8.5m、心々間距離は約３mとなる。桁行が３間のため、梁間は２間になると思われる。１間の心々間距離が約2.5mのため、梁間の長さは約５mと推定する。掘立柱建物址１と桁行柱列の方位をほぼ同じくして東に約１mを隔てて在り、同建物址南梁間柱列の東延長上に桁行柱列の南第２柱穴がきているため、同時共存していた可能性が高い。溝２は北へ回り込んだ雨落溝の一部かとも考えられる。



第15図　南区　掘立柱建物址1・2・pit群



第16図　南区　pit群内出土遺物（２）

C．pit群とその遺物

掘立柱建物址として拾い上げた以外にも、わずかながら同時期のpitがあるものと思われる。前代のpitも含め、掘立柱建物址に関連した以外のpit・溝状・土壙状の遺構についての性格は、まったく不明である。それらの一部からは土師器の壺（22.23）が出土している。

土師器（第16図）

壺（22.23）とも口縁部がわずかに外弯しなら開き、端部は丸くおさまる。頸部の直上で口縁部が外方に小さく肥厚するため、頸部が一層締まった形態となる。（22）は口径約12.2cmと小型であるのに対し、（23）は約16.0cmと大型である。（23）の外面はヨコナデするが、他は剝離が著しく調整は不明である。

◎南区　　遺構に伴わない遺物

A．古墳時代前・中期の包含層出土の土器

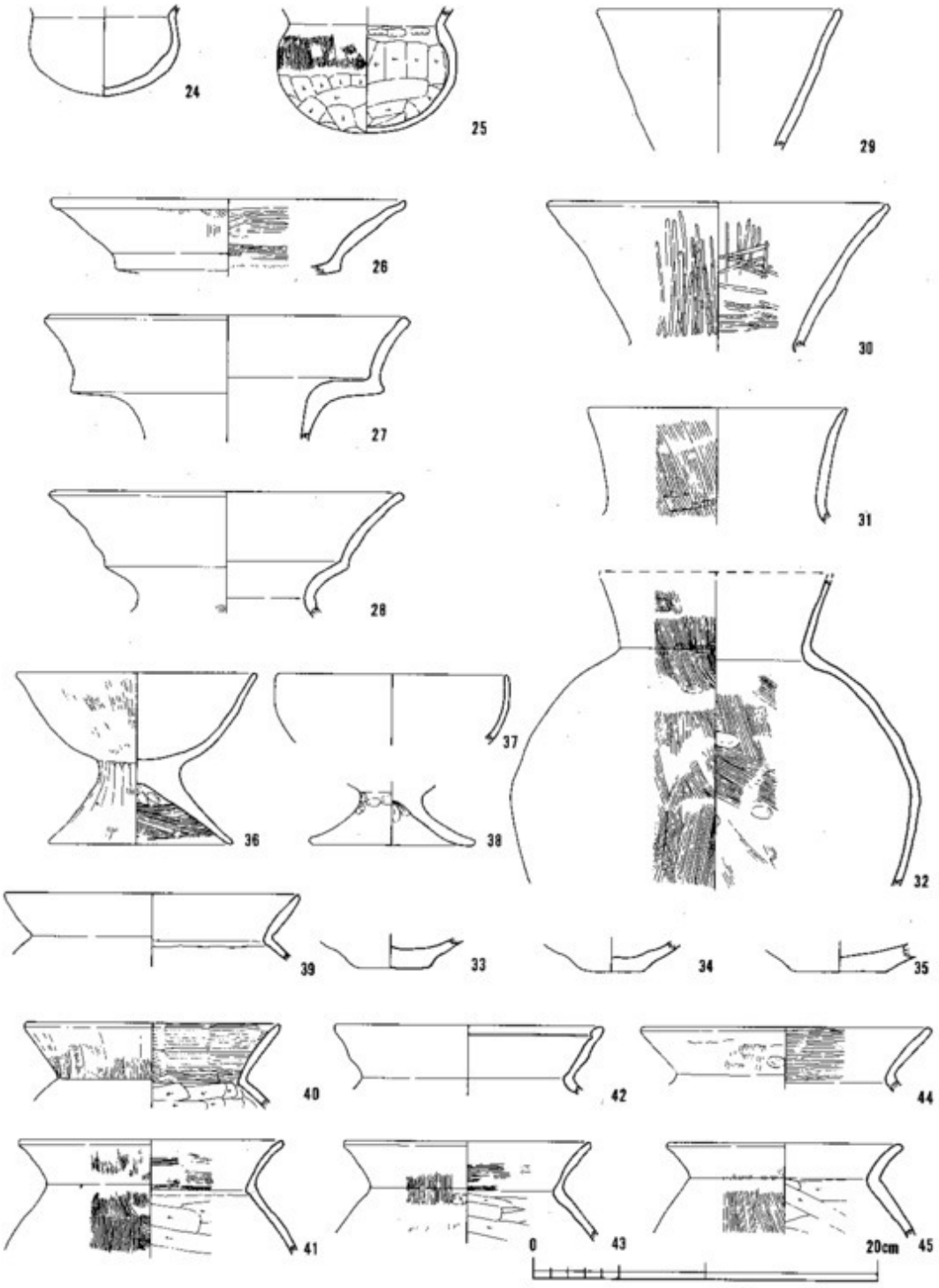
南調査区の包含層内からは、初期段階の須恵器が２点出土しているが、多くはそれ以前（布留並行期まで）の土器である。

土師器（第17図・第18図・図版八中右.下・図版九上.中）

小型丸底壺（24.25）・壺（26～35）・台付き鉢（36～38）・甕（39～45）・高杯（46～53）・鼓形器台（54.55）・製塩土器（56）等が出土している。

小型丸底壺（24.25）の体部は、楕円形に近い球形であり、口縁部は緩やかに外反すると思われるが、端部付近を欠損する。（24）は腹径約8.8cm、現高約5.3cmを測る。内外面ともヨコナデと思われるが、外面は剝離が著しいため調整は不明である。（25）は腹径約10.4cm、現高約7.3cm、（24）より一回り大きい。外面上半を縦方向の刷毛目、下半は不定方向のヘラケズリし、内面は上半を縦長に、下半を横長に横方向のヘラケズリを施す。

壺（26～28）は複合口縁形態である。（26.27）は口縁部下半が水平に開いた後、（26）は口縁部の上半部が斜めに大きく外反し、（27）は大きく外弯しながら開く。（28）は口縁部上・下半部とも外弯気味に斜めに開く。（26）は口径約20.4cm、外面は縦方向の刷毛目の後ヨコナデし、内面は横方向の刷毛目をナデ消す。（27）は口径約10.7cm、内外面とも剝離が著しく調整は不明。（28）は口径約19.8cmを測り、口縁部は内外面ともヨコナデ調整し、体部の外面は縦方向の刷



第17図　南区　古墳時代前期・中期包含層出土遺物（1）

毛目と思われる。(29.30) はラッパ状に開く、長い口縁部である。(29) は口径13.7cm、内面はヨコナデし、外面はナデ調整する。(30) は僅かに外弯しながら開き、口縁端部が小さく内側に肥厚する。口径は約19.2cmを測る。外面は縦方向にヘラミガキし、内面は上半を縦方向に、下半を横方向にヘラミガキする。(31.32) は口縁部が比較的短く、あまり外反しない形態である。(31) は口径が約14.8cmある。わずかに外弯し、外面は縦方向に刷毛目調整するが、内面は剝離のため調整は不明である。(32) は口縁端部を欠損するが、体部は球形になると思われ、現高で約23.6cmを測る。外面は縦方向に、内面は斜め方向に刷毛目調整する。

台付き鉢 (36) のわずかに内弯しながら開く鉢部は、口径約13.7cmを測り、外面は縦方向の刷毛目の後ナデ消し、内面はナデ調整する。台部は「ハ」の字形に開き、外面を縦方向のナデ、内面を横方向に刷毛目調整する。器高約9.7cm。鉢部のみの (37) は、口径約13.2cmを測る。内外面とも剝離が著しく調整は不明である。(38) は台部であり、現高約4.5cmをみる。外面下半から内面下半をヨコナデし、外面上半・内面上半は指頭圧する。

甕 (43～45) は頸部が「く」の字形を呈し、端部は丸くおさまる。口径は (43) が14.3cm、(44) が16.4cm、(45) が13.2cmを測る。(43) は体部外面を縦方向の刷毛目の後ヨコナデし、内面は横方向にヘラケズリする。口縁部は内面を横方向の板ナデの後外面と伴にヨコナデする。(44) は口縁部のみであるが、外面を縦方向の刷毛目の後ヨコナデし、内面は横方向に板ナデ調整する。(45) は口縁部の内外面ともヨコナデし、体部外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向のヘラケズリを行う。(39～42) は口縁端部内側に肥厚の痕跡を残す形態である。(39) は口径約17.0cmと大型であり、(40) は約15.5cm・(41) は約15.1cm・(42) は約15.4cmと小型である。(39) は頸部がわずかに引き締まる。口縁部は内外面ともヨコナデする。(40) は口縁部外面を縦方向の刷毛目の後ヨコナデし、内面は横方向に板ナデする。体部外面はヨコナデし、内面は横方向のヘラケズリを施す。(43) の外面はヨコナデの後縦方向の刷毛目調整を行い、口縁部内面は横方向の板ナデの後ヨコナデを行う。体部内面は横方向のヘラケズリである。

高杯 (46.47) の杯部は、わずかな稜を持って口縁部が開く。(46) は口径が約15.4cmを測り、外面下半を板様ナデ、上半をヨコナデする。内面は横方向にナデ、見込みは不定方向に刷毛目調整する。(47) は外面上半をナデ調整するが、下半は剝離のため調整不明である。内面は横方向に、見込みは放射状にヘラミガキする。口径約16.6cmである。(48.49.53) は内空形態の脚部である。脚柱部は下方広がりの円柱形であり、そこから裾部が大きく開く。(48) の脚柱部外面は縦方向の板ナデ (ヘラミガキか) し、(49.53) は縦方向の刷毛目の後同方向にヘラケズリ (ヘラミガキ) する。(53) は裾部内面を横方向に刷毛目調整する。(50) は脚柱部内部が貫通しない形態であり、外面を縦方向にナデる。(52) は「ハ」の字形に開く脚部であり、円形の透しを3方に穿つ。

鼓形器台 (54) は口径約21.7cmの受部であり、体部はわずかに外弯しながら開き、口縁端部

は水平に短く延びる。外面は縦方向の刷毛目の後ヨコナデする。(55) は脚部であるが、ほぼ受部と同様の形態を持ち、端部は上向け気味に短く反り返る。外面は縦方向に刷毛目調整し、内面の裾端部付近は横方向の刷毛目、それより上方は横方向にヘラミガキする。

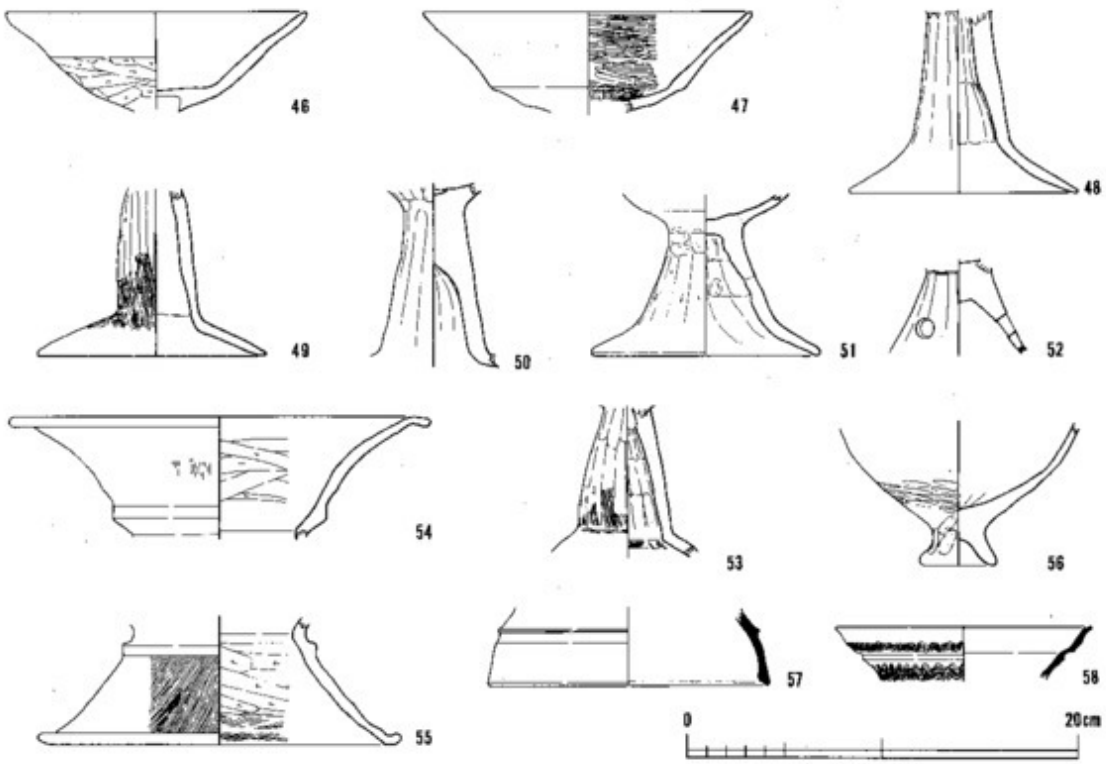
製塩土器 (56) の体部は緩やかに内弯しながら延びていくが、上半部を欠損する。脚部は小さく、外弯気味に「ハ」の字形に開く。体部内面は横方向の粗いタタキ、内面はナデるが見込みはヘラアテする。脚部外面は指頭圧する。現高約7.4cmを測る。

須恵器 (第18図57.58)

杯蓋 (57) と甕 (もしくは壺) の口縁部 (58) が出土している。

杯蓋 (57) は天井部を欠損するが、稜はしっかりと立ち上がり、口縁部は若干内弯しながらわずかに開き、端部は段を持って内側に小さく肥厚する。口径は約14.3cmである。

甕 (58) の口縁部は緩やかに開き、沈線による段を持った後、わずかに内弯する。端部は小さく外方に摘み出され、丸くおさまる。外面には沈線を挟んで上下に各1条の波状文が巡る。口径約12.8cmを測る。 (平田)



第18図　南区　古墳時代前期・中期包含層出土遺物 (2)

◎北西区　　水田址と上層（洪水砂）の遺物

A．水田址（第14図・図版三）

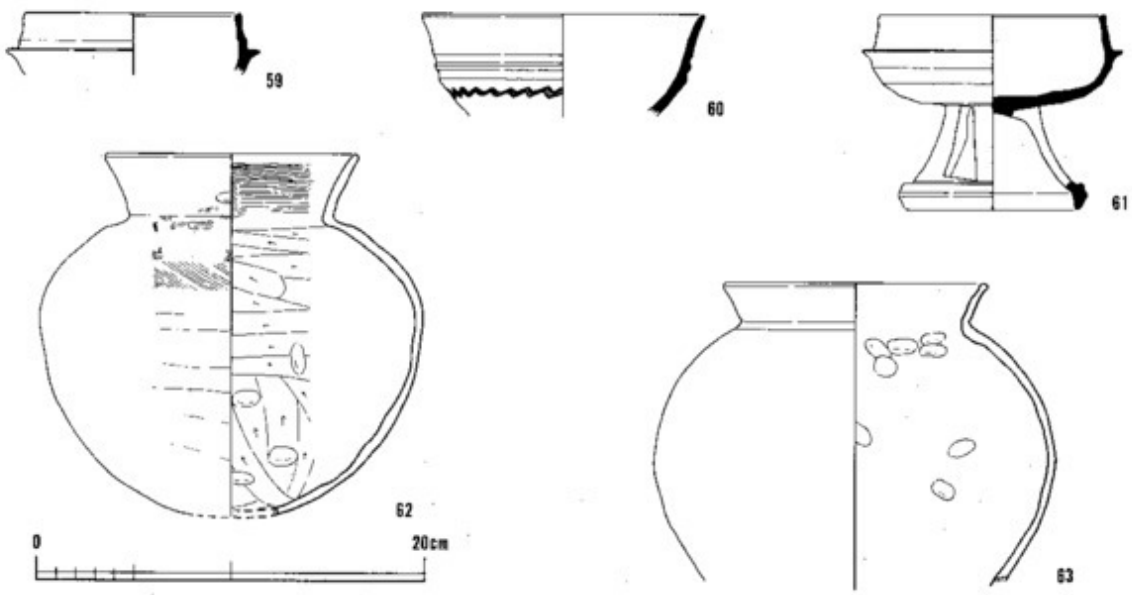
水田址は、調査地の旧河道より北西区で洪水砂の下層から発見したものである。水田面では遺物が認められず、詳細な時期決定は出来ないが、洪水砂内の遺物から古墳時代中期末以前と考え、この項で記すことにする。

まず、畦畔についてみると、北から南方向に流れる河道（古段階）と直交する方向に大畦畔（幅約2.80m・高さ35cm）を検出した。これは一度ほぼ中央部で途切れ、北側には畦と並行し西から東に流れる水路状の溝（幅1.50m・深さ約10cm）が認められるので、水口と考えた。またこの畦畔で、水田は南北の二つに分けることが出来る。しかし、調査区内では他に大畦畔は認められず、その規格は明らかでない。なお、北の水田部には、河道の西約10mに河道とほぼ平行する段状の落ちが見つかっている。これは、小畦畔にあたるものかも知れない。標高は、北の水田段上のものが一番高く3.85m（水田面Ⅰ）、次いで段下3.75m（水田面Ⅱ）、南の水田が3.70m（水田面Ⅲ）である。

水田土壌は、暗灰褐色シルト質土からなり、約12cmの厚みがある。

なお、水田は河道からの洪水を受け、廃絶したと考えられる。

検出しえた遺構は以上のとおりであり、水田区画形態及び水田一筆ごとの面積は明らかにし難い。



第19図　北西区　水田址上層出土遺物

水田址上層（洪水砂）の遺物（第19図・図版九下・図版十上）

洪水砂内から出土した遺物には、須恵器（59～61）と土師器（62.63）がある。

須恵器（第19図59～61）

（59）は杯身で、受部は水平に延び、受部から内傾して立ち上がる口縁部は、上半でほぼ直立する。口縁端部は内傾して凹面となる。底部は欠損しており、ヘラケズリの範囲は不明である。

無蓋高杯（60）は、杯部口縁を外反し、端部は丸くおさめる。口縁部と底部を分ける稜は、鈍く、稜線の下には6条の櫛描波状文を巡らす。杯底部以下は欠損している。

有蓋高杯（61）は、脚端部の稜が鈍くなる。透かしは長方形で3方にあり、面取りはみられない。

土師器（第19図62.63）

甕（62.63）は「く」の字状口縁を持つ。（62）はやや外反しながら開く口縁部を持ち、端部を丸くおさめる。体部は、最大径を上位に持つ肩の張る形態である。口径12.7㎝、腹径19.6㎝、器高18.6㎝を測る。調整は外面を刷毛目、内面をヘラケズリする。（63）は外反する口縁部を持ち、端部を肥厚させる。口径は13.2㎝を測る。体部は球形を呈すが、底部は欠損する。

（大平）

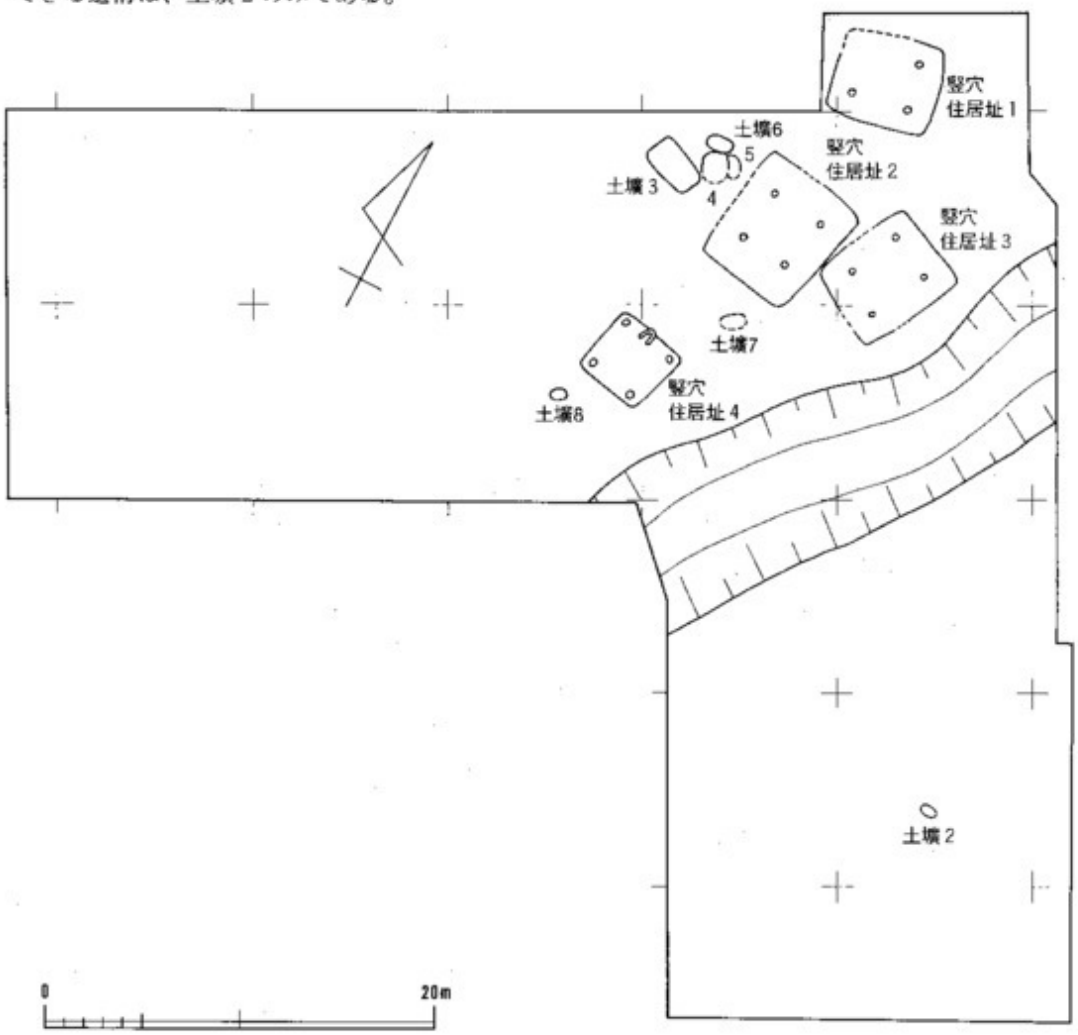
第20図　南区　遺構調査風景

3．古墳時代後期（第21図）

この時期の遺構は、旧河道から北の調査地北東区に多く存在する。北東区では、自然堤防の微高地に竪穴住居址4棟、土壙6基が発見された。なお、居住域は北方に延びるが、西方には拡がらない様相である。また、河道内及び包含層中には同時期の土師器・須恵器・製塩土器・蛸壺が出土した。さらにわずかであるが、南区にも遺構が見つかり、河道をはさんで集落が拡がっていたことも明らかになっている。（大平）

◎南区　土壙とその遺物

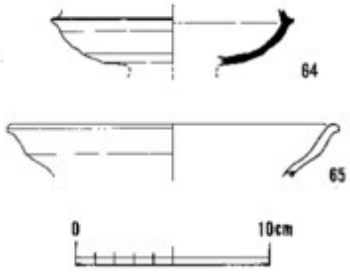
遺構検出面が古墳時代前期からのものと同一面であるため、確実にこの時期に属すると断定できる遺構は、土壙2のみである。



第21図　古墳時代後期遺構配置図

A．土壙２

前時代の土壙１の南西約2.5ｍにあり、長軸が１ｍ弱、短軸50cmの楕円形の平面を呈し、深さ約15cmを測る。暗褐色の土で埋まっており、内部からかろうじて時期を決定できる極わずかの土器が出土している。



第22図　南区　土壙２出土遺物

土壙２出土の土器

古墳時代後半に属する土器片が若干出土しているが、図化できるのは須恵器・土師器とも各１点出土である。

須恵器（第22図64）

高杯（64）は立ち上がりと脚部以下を欠損する。受部は短く、上面は下がり気味である。

土師器（第22図65）

壺（65）は口径が約17.6cmである。口縁部外面には低い稜を持ってわずかに内弯し、端部が小さく外反する。頸部以下は欠損する。（平田）

◎北東区　　竪穴住居址とその遺物（図版四上）

竪穴住居址は４棟を検出した。うち１棟は、造り付けの竈を持っている。

A．竪穴住居址１（第23図・図版四下）

調査区の北東端で検出した住居であり、全容を見るために一部拡張して調査を実施した。南側にある竪穴住居址２・３とは、約4.00ｍの距離を隔てている。

平面形態は、北西部を後世の土壙で壊されているが、東西約5.40ｍ（同床面長約5.10ｍ）、南北約4.70ｍ（同床面長約4.40ｍ）の方形を呈する。壁高は最大値14cmを測り、周壁溝は認められなかった。床面の標高は4.00ｍを測る。

柱穴は３ヶ所（径約30～40cm・深さ約40cm）の掘り込みを確認しているが、本来は４本柱であろう。柱間距離は、東西2.90ｍ・南北2.40ｍである。また、南東壁に浅い楕円形の土壙を検出している。規模は長軸68cm・短軸48cm・深さ４cmを測る。

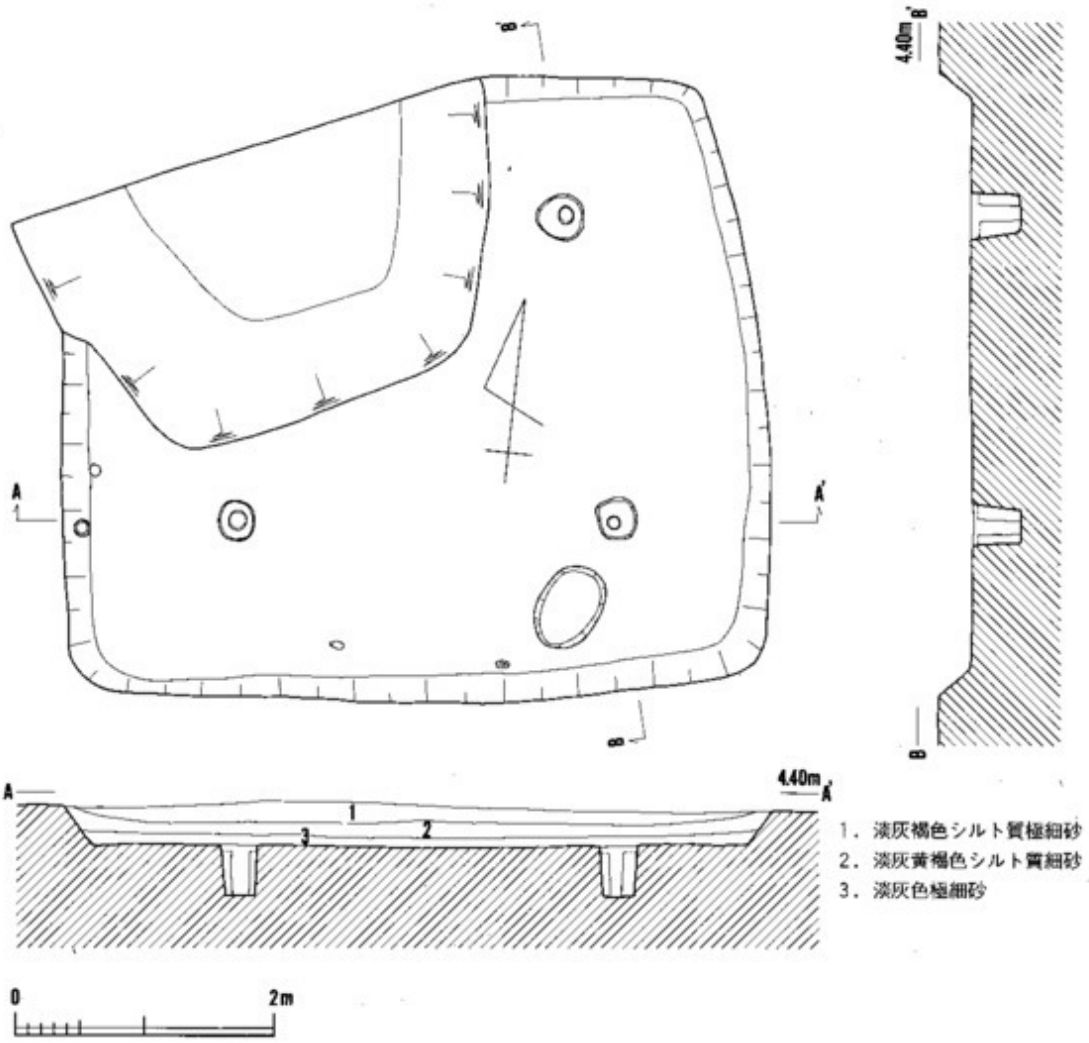
出土遺物には、須恵器・土師器等がある。時期はこれら遺物から６世紀前葉と推定できる。

竪穴住居址１出土の土器

須恵器（第24図66～72・図版十下）

杯蓋（66～68）は、天井部と口縁部との境に短く鈍い稜を持ち、口縁端部が凹面を呈する。（66.67）は天井部が丸味を持ち、器高が口径のわりに高い。（66）の口径11.4cm、器高4.8cm（68）は埋土中の出土で、口径15.1cmと大型化している。器高5.8cm。

杯身（69～71）は受部がほぼ水平に延び、受部から内傾して立ち上がる口縁部は上半で直立する。口縁端部は内傾して凹面となる。（69）は口径10.6cm、器高5.3cmを測る。（71）は著し



第23図　北東区　竪穴住居址1

く内傾し、口径10.9cm、器高5.5cmを測る。

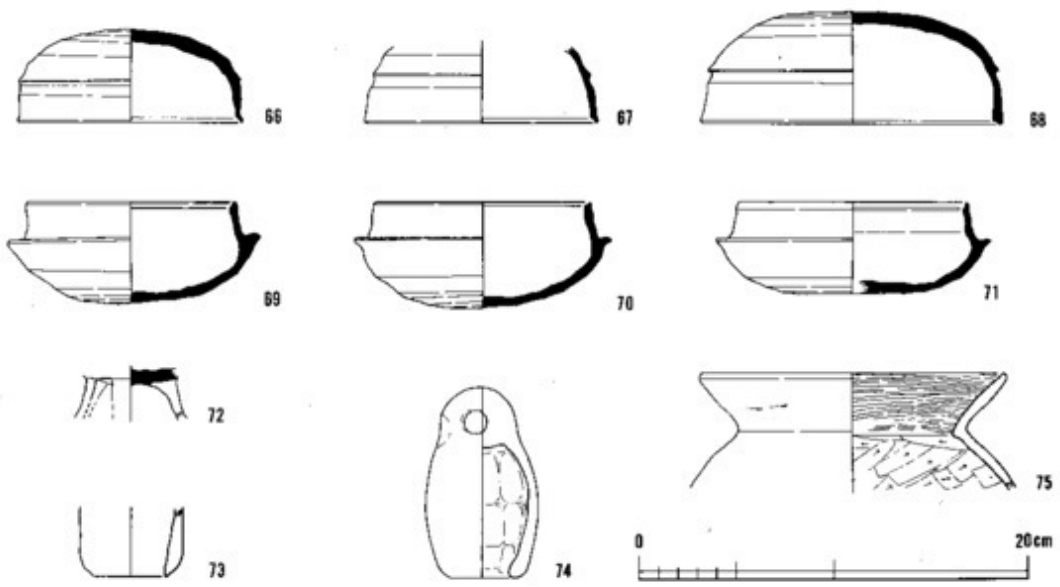
(70) は底部内面に同心円文のタタキを持つ。口径10.9cm、器高5.5cmを測る。

高杯 (72) は脚部上半のみである。長方形の透かしを3方に持つ。

土師器（第24図73～75・図版十下）

甕 (75) は外傾する「く」の字状口縁を持ち、口縁端部は若干上方につまみだす。口縁内面は刷毛目、肩部内面はヘラケズリである。

鉢壺 (73.74) は釣鐘形の飯鉢壺である。(74) は体部が細長い。体部内面はユビオサエが認められる。器高は9.8cm。



第24図　北東区　竪穴住居址１出土遺物

B．竪穴住居址２（第25図・図版五）

竪穴住居址１の南約４ｍに位置し、調査したなかでは最も大きな住居址で、竪穴住居址３の西に隣接している。床面の標高は4.00ｍを測る。

平面形態は、歪な方形を呈し、規模は、東西約6.00ｍ（同床面長約5.60ｍ）、南北約6.40ｍ（同床面長約6.10ｍ）を測る。壁高は最大値20㎝を測り、床面には幅８～20㎝・深さ５～12㎝の断面Ｕ字形の壁溝が全周する。

柱穴は４ヶ所（径約30～40㎝・深さ約40㎝）の掘り込みを確認しており、４本柱の上屋構造が考えられる。柱間距離は、東西約2.70ｍ・南北約2.70ｍと約3.00ｍである。

出土遺物は、南壁付近に集中して須恵器・土師器・鉢壺・台石等があり、鋳型状の土製品が注目される。時期は、これら土器から６世紀前葉～中葉と考える。

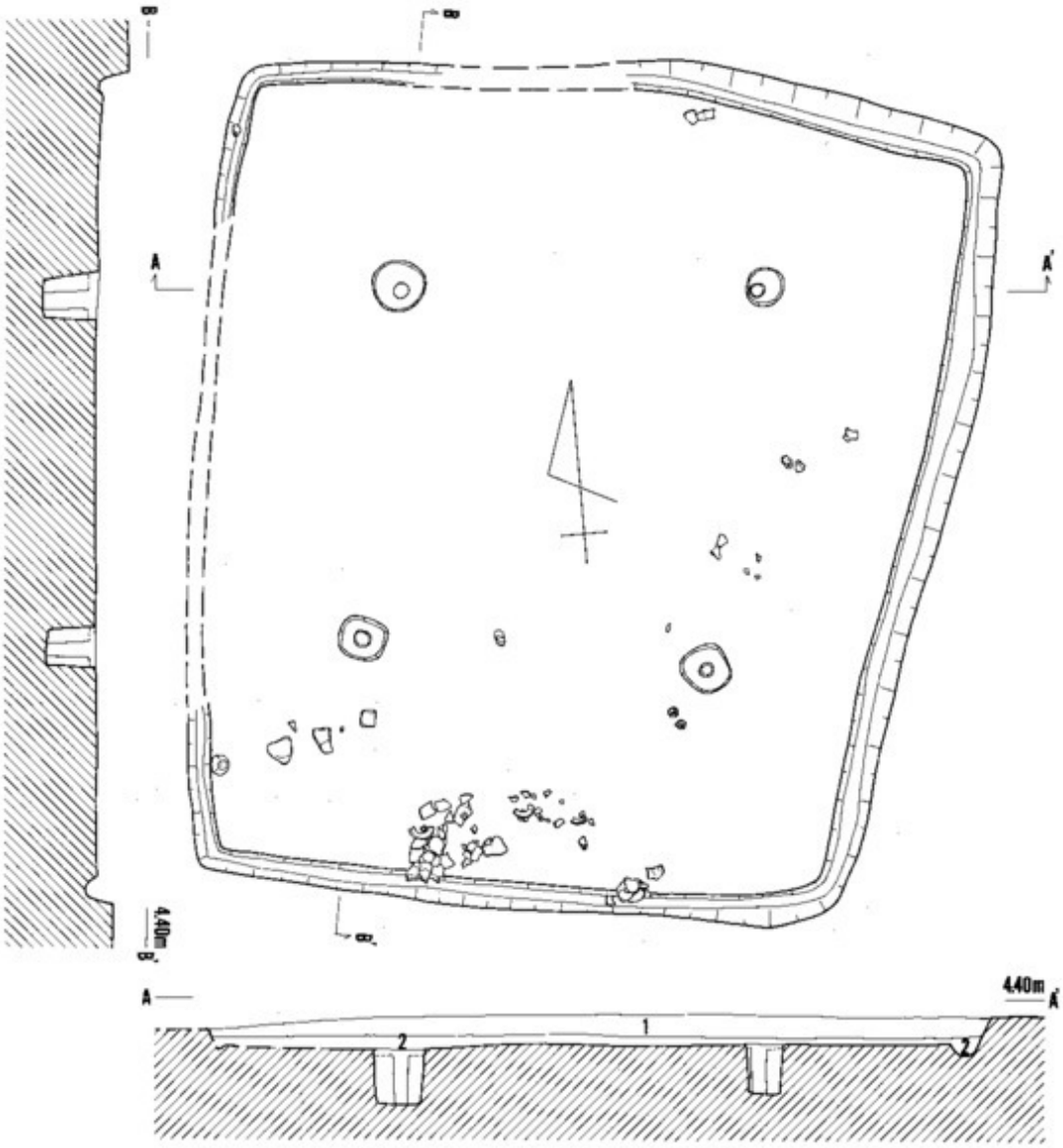
竪穴住居址２出土の遺物

須恵器（第26図76～80・図版十一上）

杯蓋（76.77）、（76）天井部と口縁部の境に凹線を巡らし、口縁端部内面に段を有する。口径約14.0㎝、器高4.5㎝を測る。（77）は天井部と口縁部の境に鈍い稜を持ち、口縁端部が凹面を呈する。口径14.3㎝、器高4.5㎝。

杯身（78）は受部がほぼ水平に延び、受部から内傾して上方に延びる高めの口縁部立ち上がりを持つ。口縁端部は丸くおさめる。底部は欠損。口径（復元）10.4㎝。

甕（79:80）は口頸部から下を欠損する。（80）の口頸部は外反して立ち上がり、端部で外方に屈曲させ、肥厚し直立させる。口径16.3㎝。

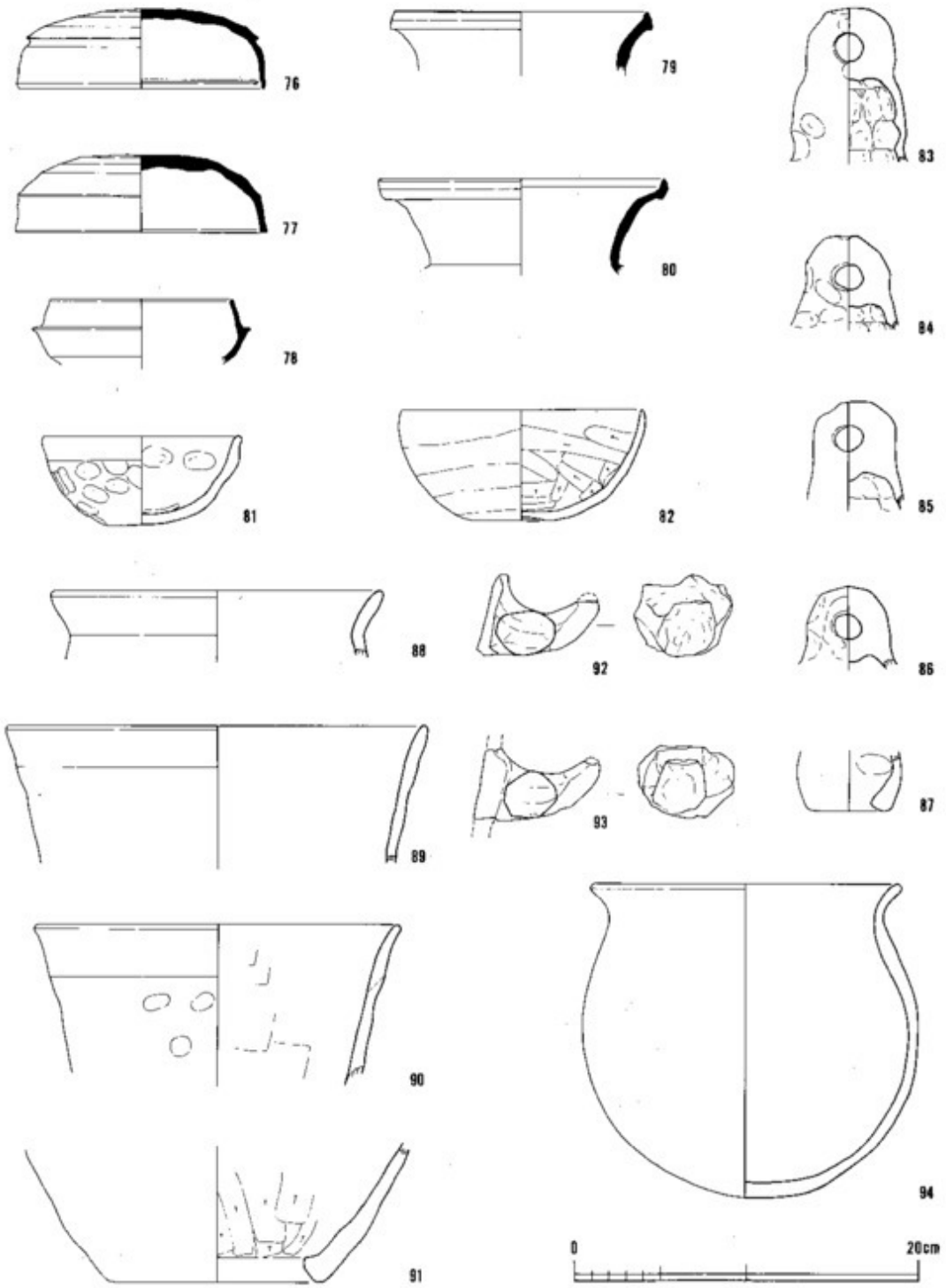


第25図　北東区　竪穴住居址２

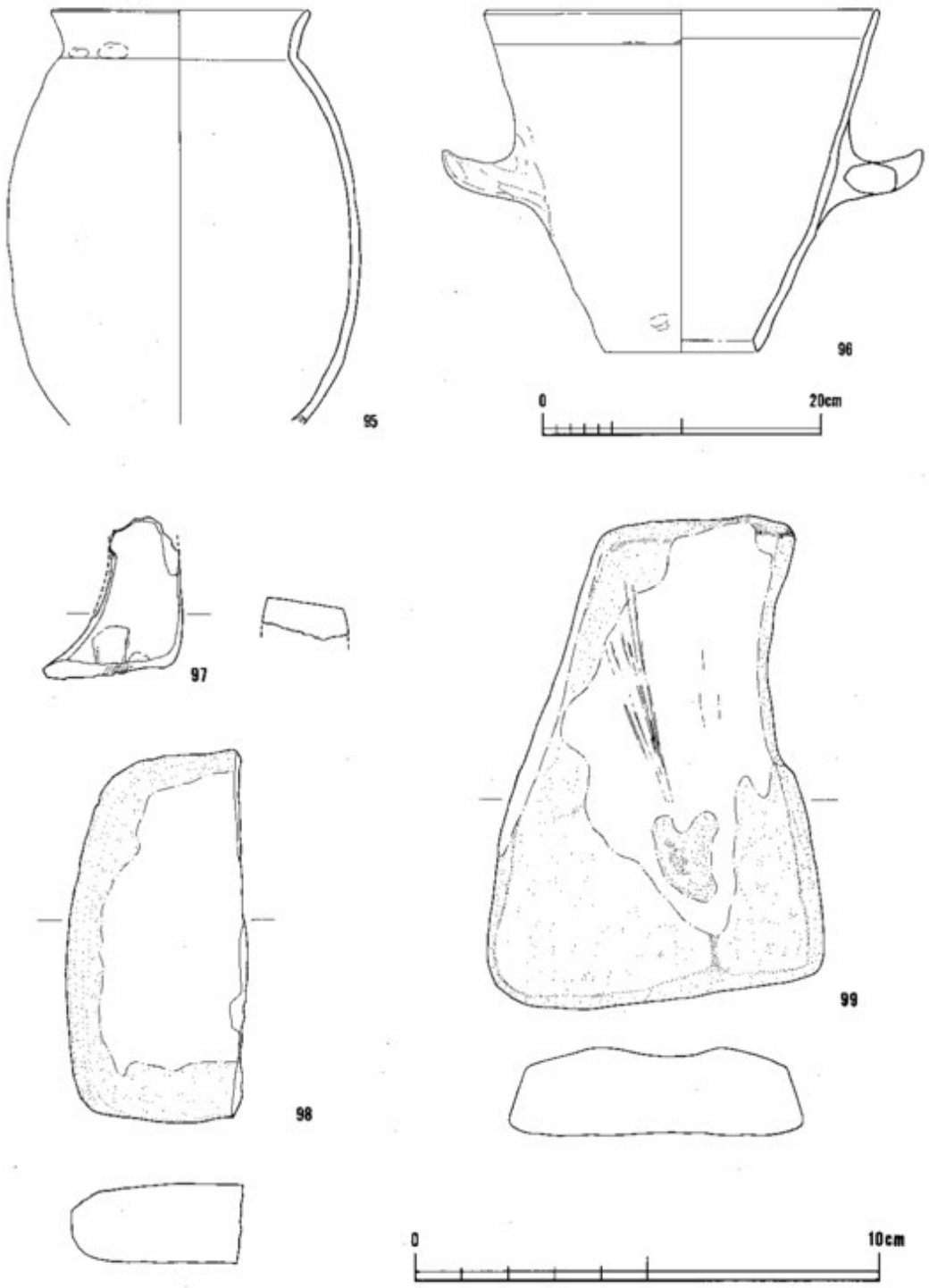
土師器（第26図81～94・第27図95.96・図版十一中・図版十二上）

椀（81.82）は平底風の底部から内弯しながら延びる口縁部を持つ。口縁端部は丸くおさめる。（82）の底部は少し窪む。口径13.9cm、器高6.5cm。

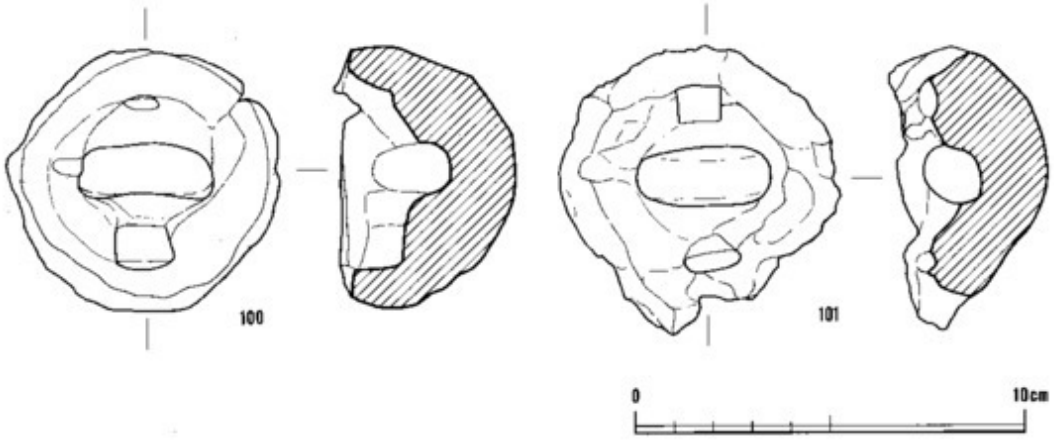
甕（88.94.95）、（94）は体部下半が球形に近く、体部上半から頸部がよく張らずに、外反する口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめる。口径17.2cm、器高18.3cm。（95）は張りの弱い長



第26図　北東区　竪穴住居址２出土遺物（１）



第27図　北東区　竪穴住居址２出土遺物（２）



第28図　北東区　竪穴住居址２出土遺物（３）

胴の体部に外反する口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめる。底部は欠損。内外面ともナデ調整。口径18.2cm。

甕（89～93.96）は体部がそのまま延び口縁部となる。口縁端部は丸くおさめる。体部中程に張り付けの角状把手を持つ。（96）は外面タテ刷毛、内面ヘラケズリ調整をおこなう。口径27.8cm、底径10.8cm、器高24.6cmを測る。

鍑壺（83～87）、釣鐘形の飯鍑壺である。胴部から釣手部にかけて段が付く。胴部内面はユビオサエが目立つ。

石器（第27図97～99）

砥石（97）は破損以外の４面は使用している。特に図上面と左面は内湾するほど利用されている。仕上げ用砥石か。

台石（98.99）は花崗岩製で、（98）は図上面（磨痕）を使用している。（99）は図上面（磨痕・線状痕）と左側面（磨痕）を使用する。

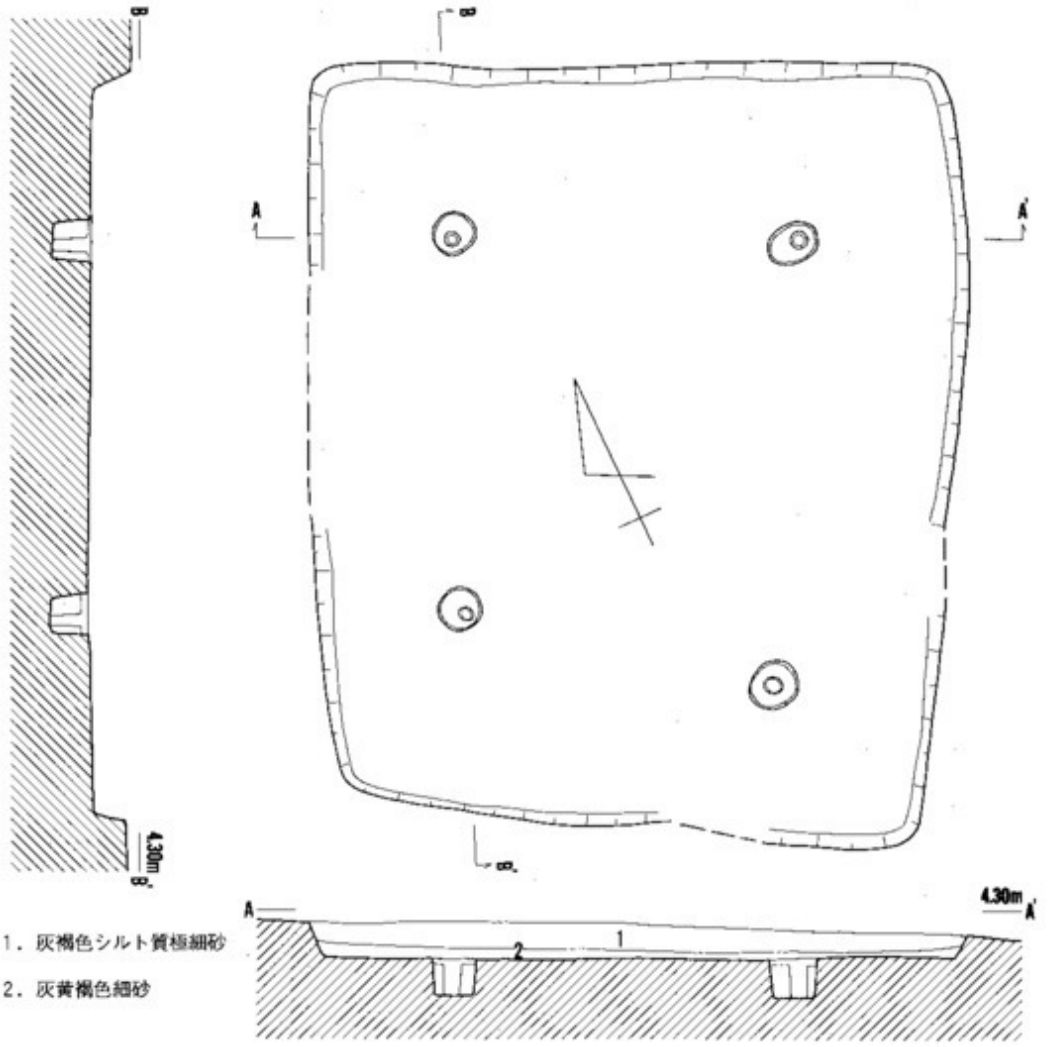
鋳型状土製品（第28図100.101・図版十一下）

球形の土製品である。二片になっているが本来は対で使用するものと考えられる。径約７cmを測る。内面には径約3.5cm、幅約1.3cmの円板状の穴と、それに交差する長さ約4.5cm、径約１cmの棒状の穴がある。この穴の周囲は細かな粘土が使用され、周辺は少し粗い粘土である。

C．竪穴住居址３（第29図）

本住居址は竪穴住居址２の東に隣接し、河道に一番近い位置にある。床面の標高は3.95mを測る。

平面形態は、長方形を呈し、規模は、東西約5.00ｍ（同床面長約4.80ｍ）、南北約6.00ｍ（同床面長約5.75m）を測る。壁高は最大値25cmであり、周壁溝は認められなかった。その他、付属の遺構も認められない。



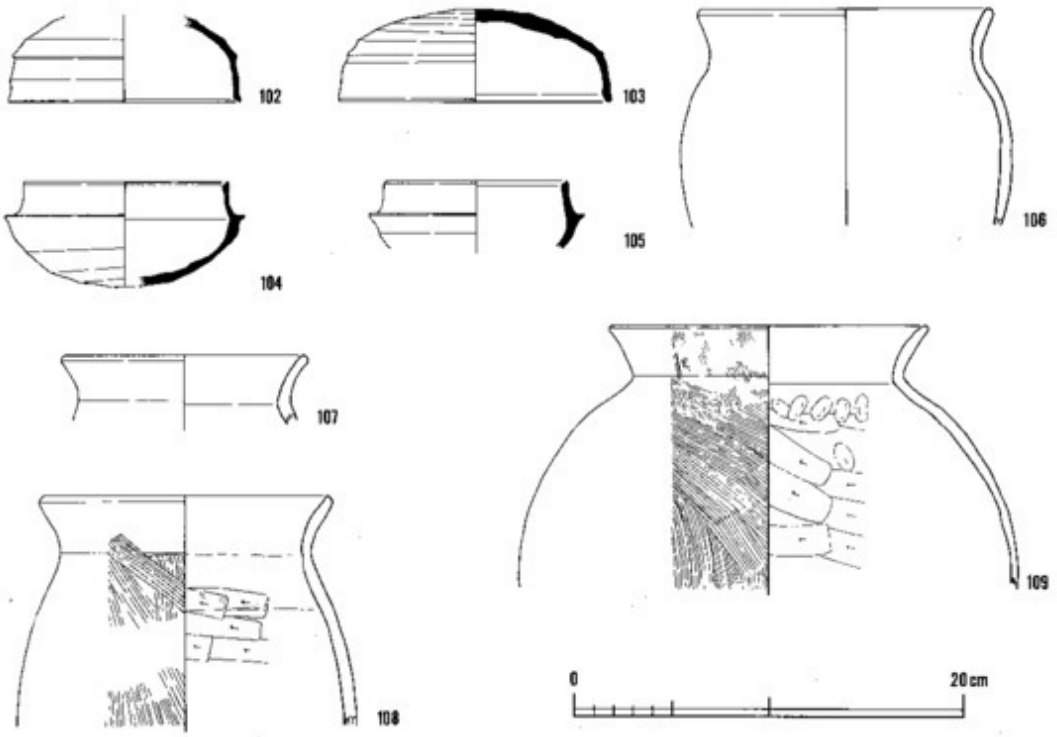
第29図　北東区　竪穴住居址３

柱穴は４ヶ所(径35～40cm・深さ30cm)の掘り込みを確認している。柱間距離は、東西約2.45ｍと約2.70ｍ・南北約2.90ｍと約3.45ｍである。

出土遺物には、須恵器・土師器等がある。時期は、これら遺物から６世紀前葉と考える。

須恵器（第30図102～105・図版十二下）

杯蓋（102.103)、(103）は天井部と口縁部の境に凹線を巡らし、口縁端部内面に段を有する。口径13.9cm、器高4.8cm を測る。(102）は天井部と口縁部の境に鈍い稜を持ち、口縁端部が凹面を呈する。口径（復元）約12.0cm。



第30図　北東区　竪穴住居址３出土遺物

杯身（104.105）、受部がほぼ水平に延び、受部から内傾して立ち上がる口縁部は上半で直立する。口縁端部は内傾して凹面となる。（104）は口径10.5cm、器高5.4cm。（105）は口径（復元）約9.5cm。

土師器（第30図106～109・図版十二下）

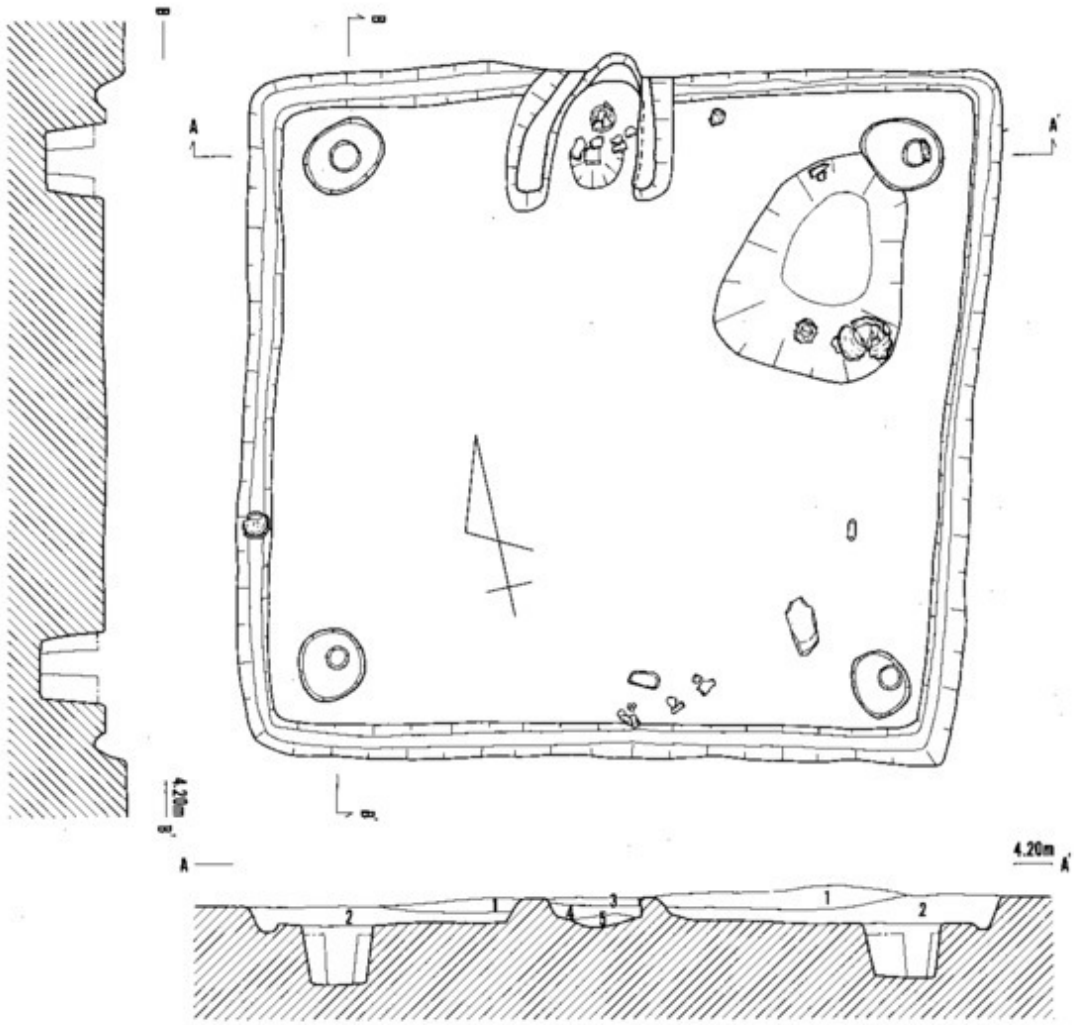
甕（106～108）は張りの弱い体部に外反する口縁部が付く。（108）は外面タテ刷毛、内面ヘラケズリ調整。（109）は張りのある体部に外反する口縁部が付く。調整は外面タテ刷毛、内面ヘラケズリ。

D．竪穴住居址４（第31図・第32図・図版六）

竪穴住居址中、一番南に位置する方形住居址である。床面の標高は3.90ｍを測る。

規模は、東西約3.85ｍ（同床面長約3.50ｍ）、南北約3.50ｍ（同床面長約3.15ｍ）を測る。壁高は最大値15cmであり、床面には幅10～15cm・深さ５～７cmの断面Ｕ字形の周壁溝が巡る。

また、北壁の中央部には造り付けの竈がある。竈の規模は、焚口部幅約40cm・奥行き約60cmを測り、残存高は袖部で約13cmある。火床部分は若干窪み、その奥で須恵器を逆さに置き、上に土師器片を被せ支脚として利用する。焚口奥から屋外に向かっては、緩やかなスロープで煙道部が取り付く。竈内は最下層に灰、中層に焼土・炭化物が堆積していた。さらに、竈東横に



第31図　北東区　竪穴住居址４

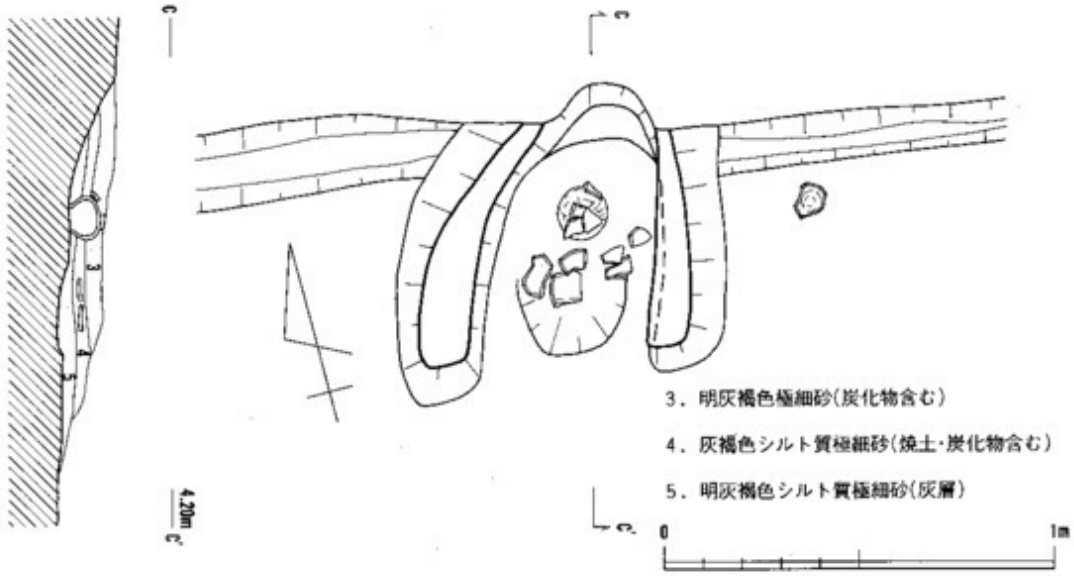
には楕円形の土壙を検出している。規模は長軸約120cm・短軸約80cm・深さ約５cmを測る。

柱穴は４ヶ所（径約30～40cm・深さ約30cm）の掘り込みを検出した。他の住居址と異なり、四隅近くに設けられている。柱間距離は、東西約2.85ｍと約2.90ｍ・南北約2.60ｍと約2.70ｍである。

出土遺物には、須恵器・土師器等がある。時期は、これら遺物から６世紀前葉と考える。

須恵器（第33図110～112・図版十三上）

杯蓋（110）は天井部と口縁部の境に鈍い稜を持ち、口縁端部が凹面を呈する。口径（復元）約11.6cm。

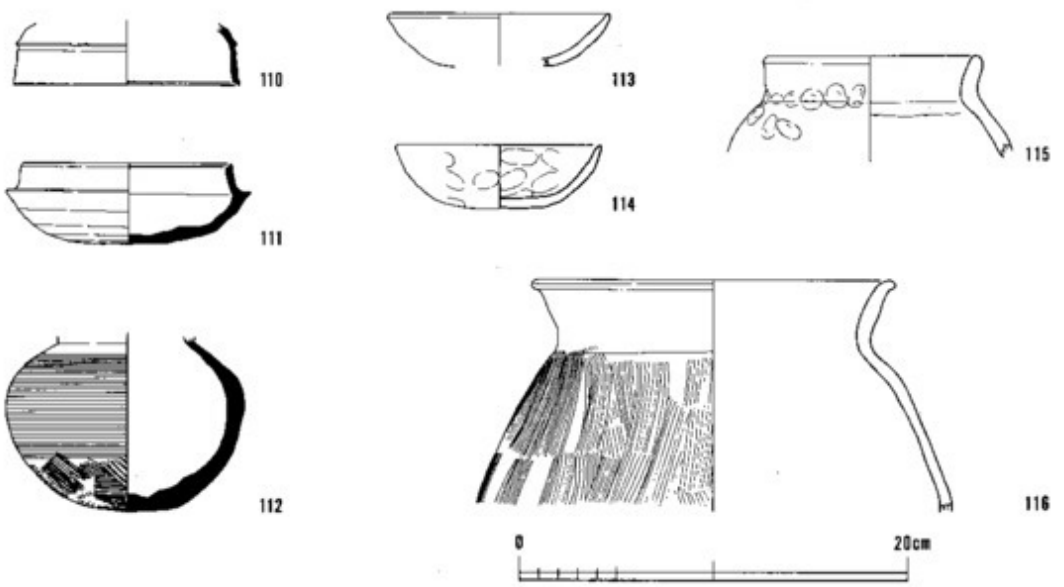


第32図　北東区　竪穴住居址４竈

杯身（111）は受部が外上方に延び、受部から内傾して立ち上がる口縁部は上半で直立する。口縁端部は内傾して凹面となる。口径10.6cm、器高4.2cmを測る。

壺（112）は体部のみ残存、やや肩の張る胴部で底部は丸い。上半はカキメ、下半はタタキ調整をおこなう。竈の支脚として利用したため、熱を受けて一部変色し、ひび割れがはいる。

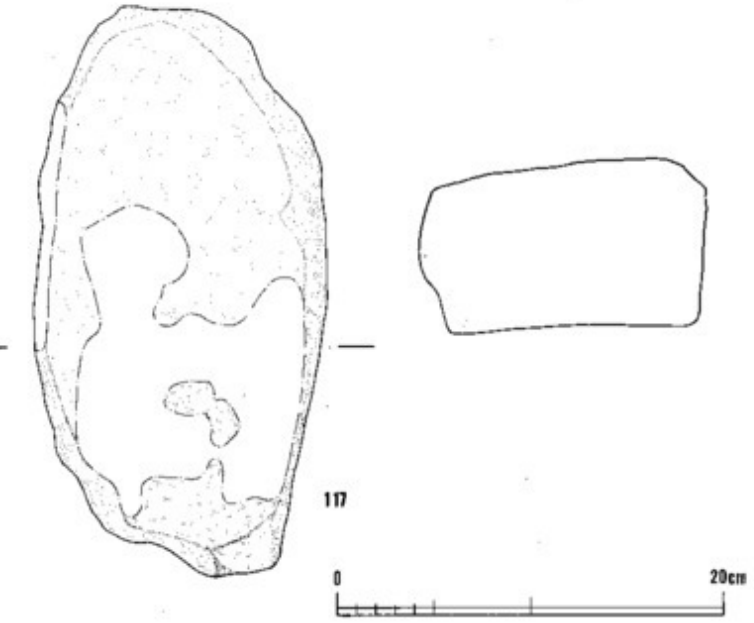
土師器（第33図113～116・図版十三上）



第33図　北東区　竪穴住居址４出土遺物（１）

杯（113.114）は平底風の底部から、体部が大きく開く。口縁端部はつまみあげる。調整は内外面ともナデ、（113）は口径11.2cm、器高2.7cm。（114）は指圧痕が残る。口径（復元）約10.2cm、器高（復元）約3.4cm。

壺（115）は口縁部が直立気味に立ち上がり、体部はふくらむ。口径10.5cm。

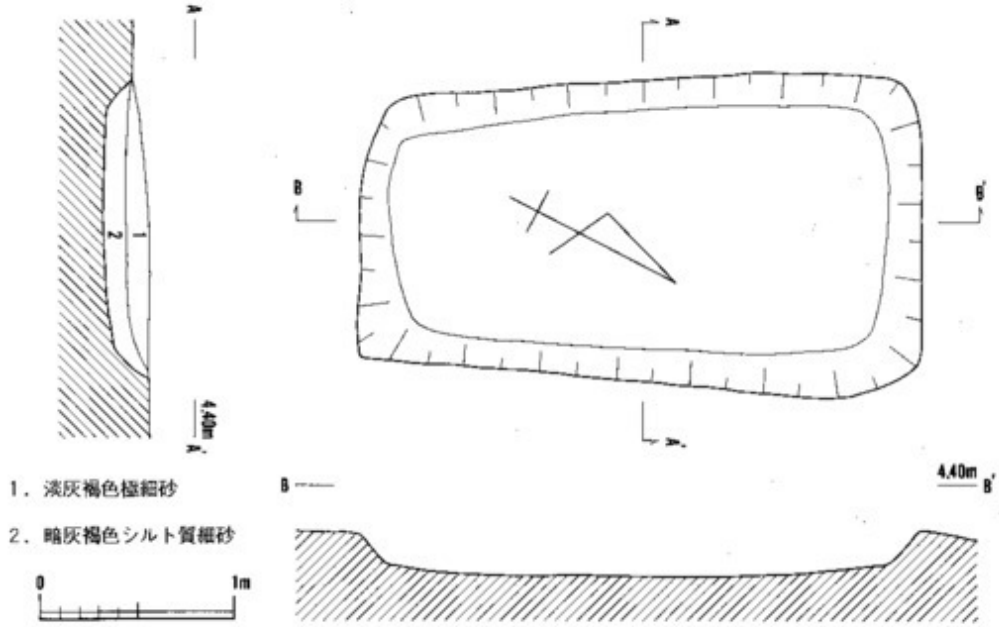


第34図　北東区　竪穴住居址4出土遺物（2）

甕（116）は張りのない体部から「く」の字形にゆるく外反する口縁部を持ち、口縁端部は外方につまみだす。体部外面はタテ刷毛、内面はナデ調整。口径18.0cm。

石器（第34図117）

台石（117）は花崗岩製で、図上面下半（磨痕）と左側面上半の一部（磨痕）を使用する。



第35図　北東区　土壙3

◎北東区　土壙とその遺物

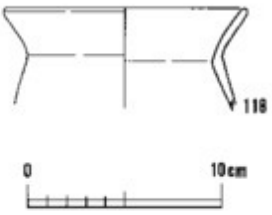
今回の調査では、計6基の土壙を検出した。遺物はほとんどなく、用途も明らかでない。

A．土壙3（第35図）

竪穴住居址2の西で検出した土壙群中、一番西に位置する長方形のものである。長辺約3.00m、短辺約1.50m、深さ約18cmを測る。埋土は灰褐色シルト質細砂。木棺墓かとも考えたが、棺を入れた痕跡がない。遺物は、土師器が一点出土したのみである。

土師器（第36図118・図版十三中右）

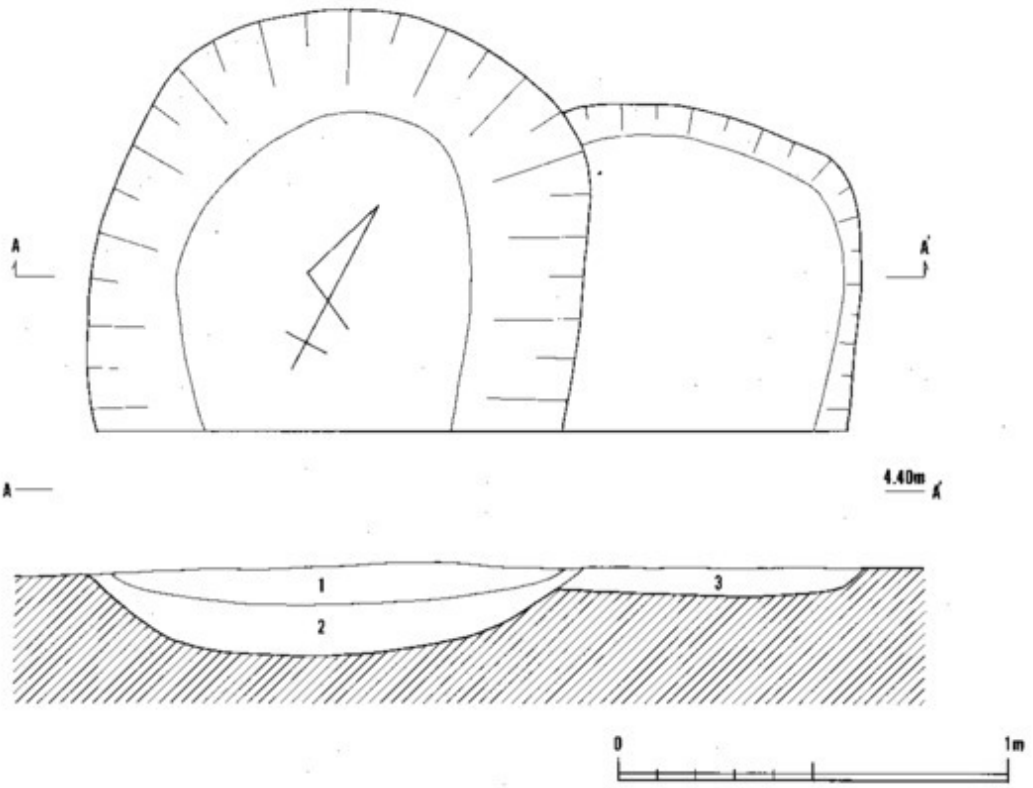
（118）は「く」の字状に外傾する口縁部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。口径（復元）12.2cmを測る。



第36図
北東区　土壙3出土遺物

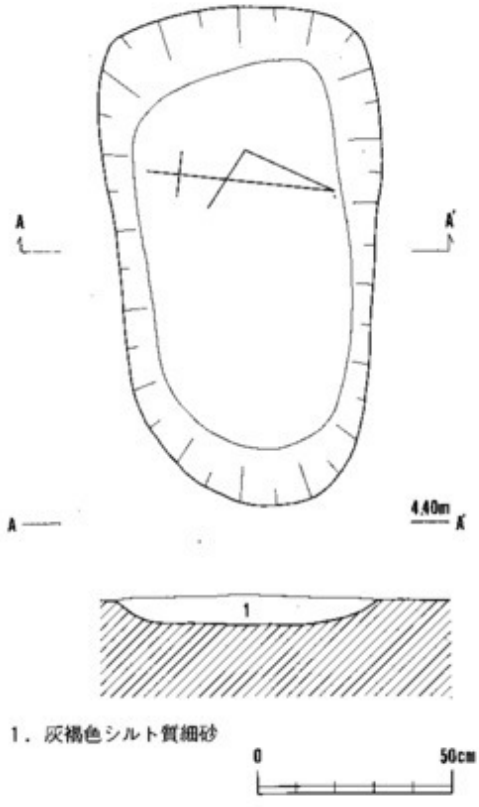
B．土壙4（第37図）

土壙3の東に隣接し、土壙5を切って造られている楕円形のものである。長軸（復元）約1.60m、短軸約1.25m、深さ約20cmを測る。埋土は灰褐色シルト質細砂。遺物は認められない。



1．淡灰褐色極細砂　2．明灰褐色シルト質細砂　3．灰褐色細砂

第37図　北東区　土壙4・5



第38図　北東区　土壙６

C．土壙５（第37図）

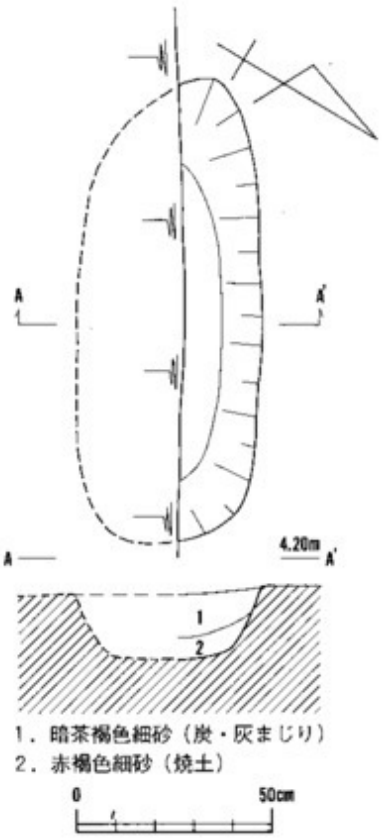
土壙４に切られた楕円形のものである。長軸（復元）約1.20m、短軸（復元）約0.90m、深さ約７cmを測る。埋土は灰褐色細砂。遺物は認められない。

D．土壙６（第38図）

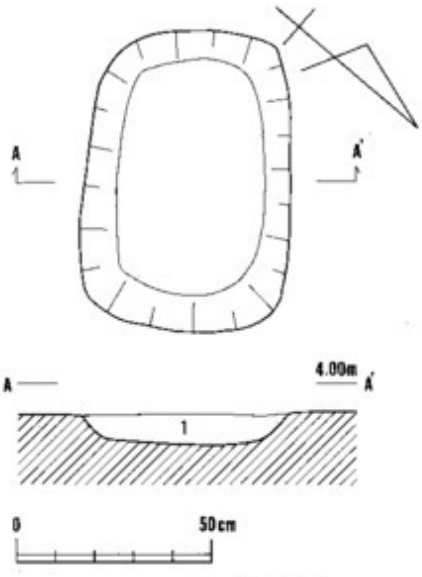
土壙４の北に隣接する長楕円形のものである。長軸約1.30m、短軸約0.65m、深さ約７cmを測る。埋土は灰褐色シルト質細砂。遺物は認められない。

E．土壙７（第39図）

竪穴住居址２の南で検出した長楕円形の焼土壙である。後世の攪乱により南半分は消滅している。長軸約1.20m、短軸（復元）約0.45m、深さ約15cmを測る。遺物は認められない。



第39図　北東区　土壙７



第40図　北東区　土壙８

F．土壙８（第40図）

竪穴住居址４の南に発見した楕円形のものである。長軸約0.80ｍ、短軸約0.50ｍ、深さ約８cmを測る。埋土は灰褐色シルト質細砂。遺物は認められない。

◎旧河道とその遺物

調査区のほぼ中央部で検出した河道の流れは、堆積層からみて大きく古墳時代の中期末と後期以降の二つがある。そして、最終的に中世の時期に埋まったことが明らかとなっているが、一括してこの項で扱う。

遺物は、古墳時代の後期を中心に弥生時代から中世のものがある。

A．河道（古段階）（第14図・図版七上）

北から南に流れるこの河道は、最大幅約9.50ｍ、深さ約1.60ｍを測る。埋土は黄色粗砂層と青灰色細砂層の２層に大きく分層できる。この堆積状況からみると、かなりの大洪水があったと推測できよう。古墳時代中期末以前と考えた水田も、この河道の氾濫により埋没したと思われる。

出土遺物には、弥生時代後期と終末期の土器がある。

弥生土器（第41図119～126・図版十三下）

鉢の可能性もあるが、いわゆる台形土器と考え逆転して載せた。台部径13.3cm、器高8.6cm。

甕底部（120.121）の小片である。（120）の外面は刷毛、内面はナデ調整。（121）の内面は刷毛調整。いずれも反転復元。

甕の口縁部（122～124）と底部（125.126）である。（122.124）はやや内弯気味「く」の字状口縁で、端部を丸くおさめる。（123）は端部をかすかに外反し、丸くおさめる。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。（125.126）とも平底で底部が少し窪む。（125）は外面にタタキが認められる。庄内期のものか。

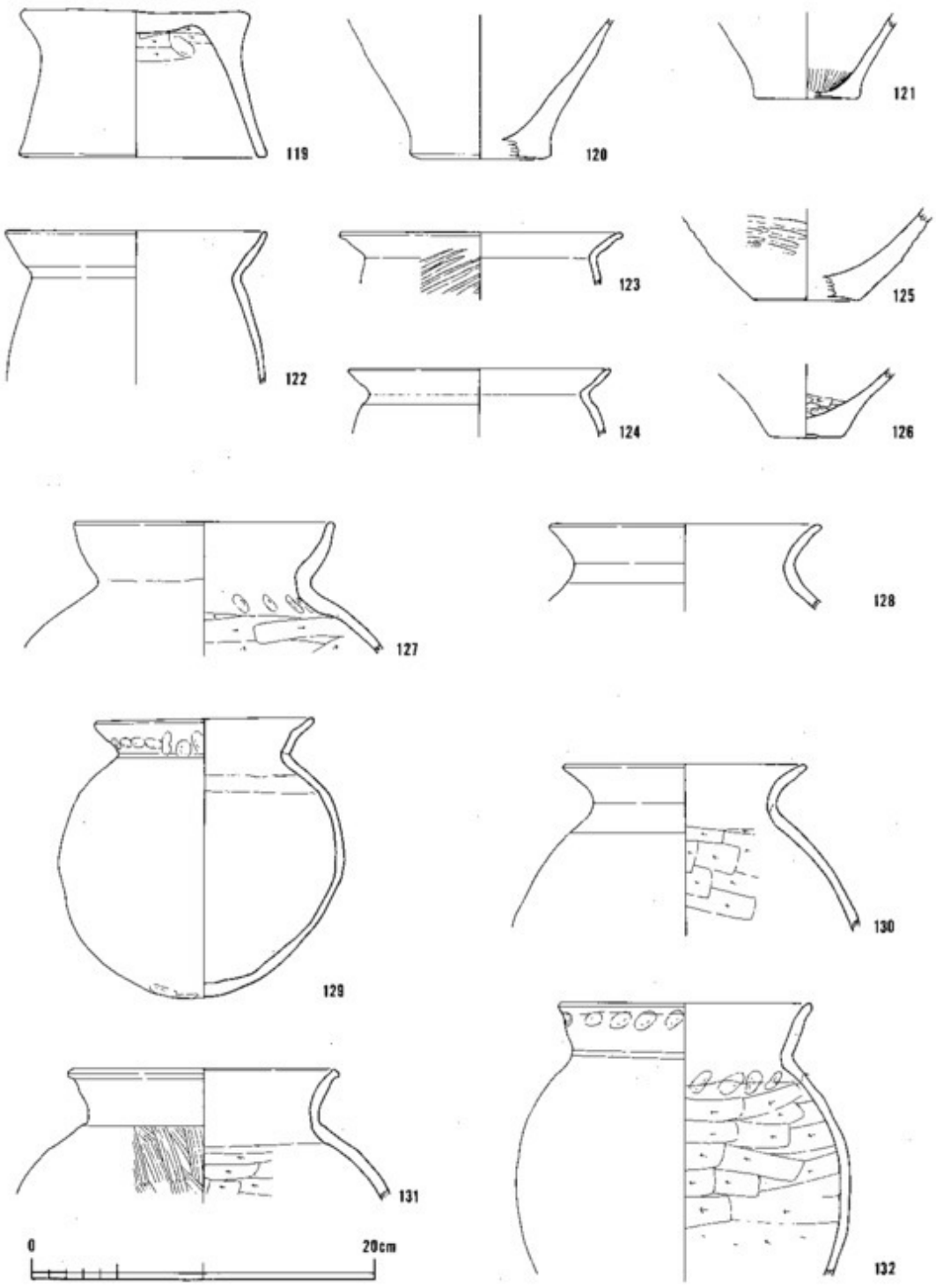
B．河道（新段階）（第21図）

前時期とは若干方向を変え、東北東から西南西に流れる。幅は約9.00ｍ、深さ約2.20ｍを測る。埋土は黄色粗砂層と青灰色細砂層の２層に大きく分層できる。

出土遺物には、古墳時代の土師器・須恵器と中世土器がある。

土師器（第41図127～132・第42図134～135・図版十四・図版十五上）

甕（127～134）、（127）は内弯する「く」の字状口縁部で、端部は丸くおさめる。体部外面はナデ調整、内面はヘラケズリ。（128.130）は外弯気味に外反し、端部を丸くおさめる。（130）の体部外面はナデ調整、内面はヘラケズリである。庄内期のものか。（129）は口縁部を内弯気味に外傾させて、端部は丸くおさめる。体部は球形である。口径12.4cm、器高16.2cmを測る。（131）は直立気味に外反する口縁で、端部はつまみだし、外側に面を持つ。体部外面はタテ



第41図　旧河道（古・新）出土遺物（１）

刷毛、内面はヘラケズリ。(132) は張りの少ない体部に、口縁部を内弯気味に外傾させ、端部は外反し丸くおさめる。体部外面は刷毛、内面はヘラケズリ調整。口径14.5cm。(133) は口縁部を外反させ、端部は丸くおさめる。(134) は張りの少ない長胴形の体部で、外上方に開く口縁部が付き、端部は外反させ丸くおさめる。

高杯 (135) は、「ハ」の字形に開く中空の脚柱上部のみである。

須恵器 (第42図136～149・図版十四右)

杯蓋 (136～142)、天井部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち、口縁端部が凹面を呈するものから、鈍い稜のもの、天井部と口縁部の境に凹線を巡らすものに分かれる。(142) は天井部中央につまみが付く。

杯身 (143～147)、口縁部の立ち上がりが高く内傾してから上方に延び、端部には段を持つものから、立ち上がりの内傾度が大きく端面が内側へ傾斜するもの、立ち上がり端面が丸くおさまるものまである。

高杯 (148.149) は無蓋高杯である。(148) は杯体部に二条の稜線を持ち、その下に櫛描き波状文が巡るが、稜は鈍くなる。口縁部破片のみ。(149) は杯蓋をひっくり返した杯体部に脚が付く。脚には円形の4方透かしを持つが、下半部は欠損する。口径13.2cm。

土師器 (第42図150)

羽釜 (150) はほぼ垂直に立ち上がる口縁部で、口縁端部は面を持つ。鍔はやや上反し、横に延びる。体部内面は刷毛調整。口径23.6cm。

◎北東区　遺構に伴わない遺物

住居址南東の旧河道部肩に位置する堆積層からの出土遺物である。

須恵器 (第43図151～165・図版十五下)

杯蓋 (151～158)、天井部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち、口縁端部が凹面を呈するものから、鈍い稜のもの、天井部と口縁部の境に凹線を巡らすものに分かれる。(156) は口径14.6cm、器高5.1cmを測る。

杯身 (159～163)、受部が外上方に延び、口縁部の端部が段を持つものから、立ち上がりの内傾度は大きく端面が内側に傾斜するもの、立ち上がりの端面が丸くおさまるものまである。(159) は口径13.6cm、器高5.7cmを測る。

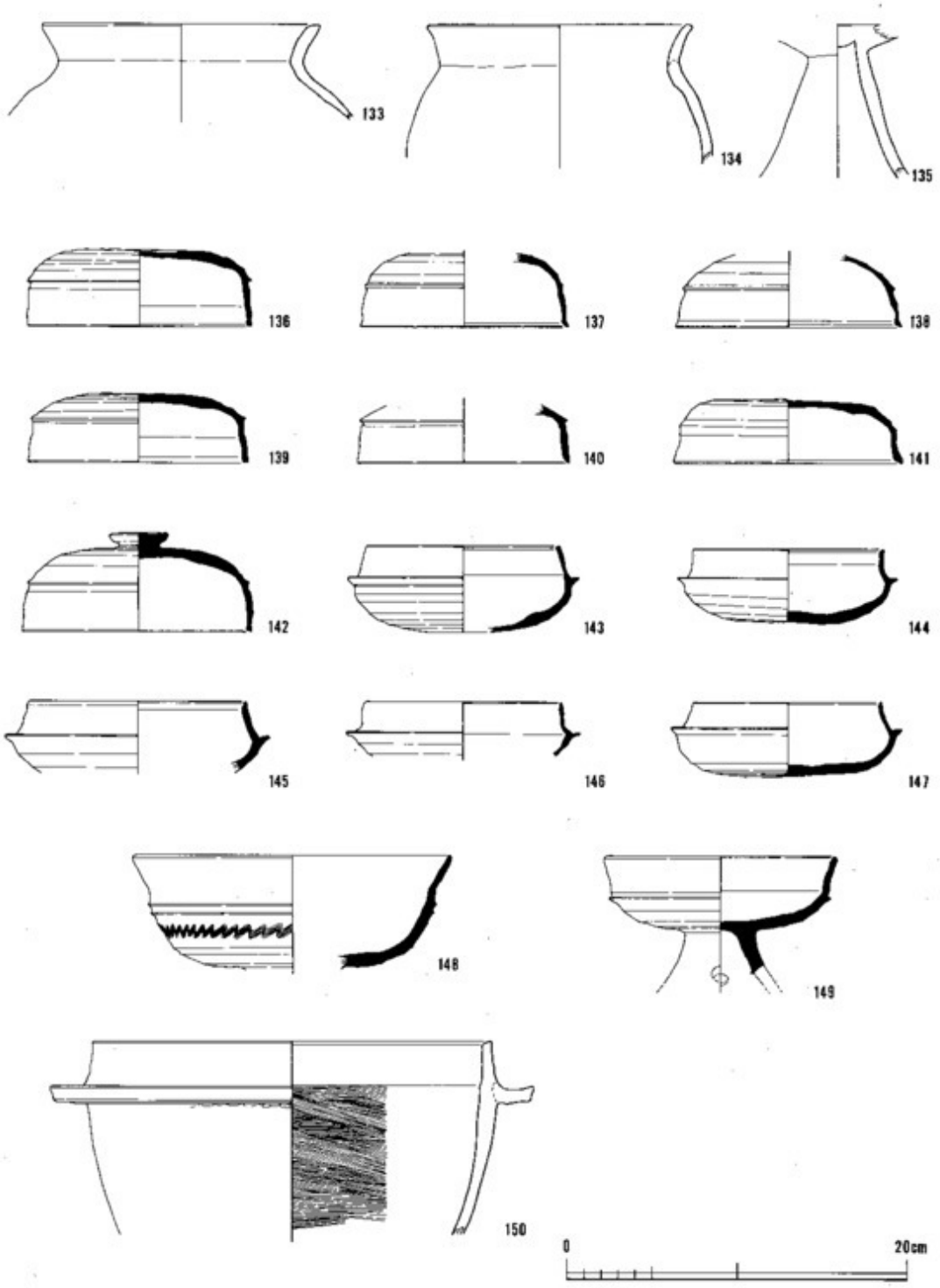
高杯 (164) は脚部のみ残存、長方形の4方透かしを持つ。

壺 (165) は体部のみ。肩の張る胴部で底部は丸い。体部下半にはタタキ調整をおこなう。

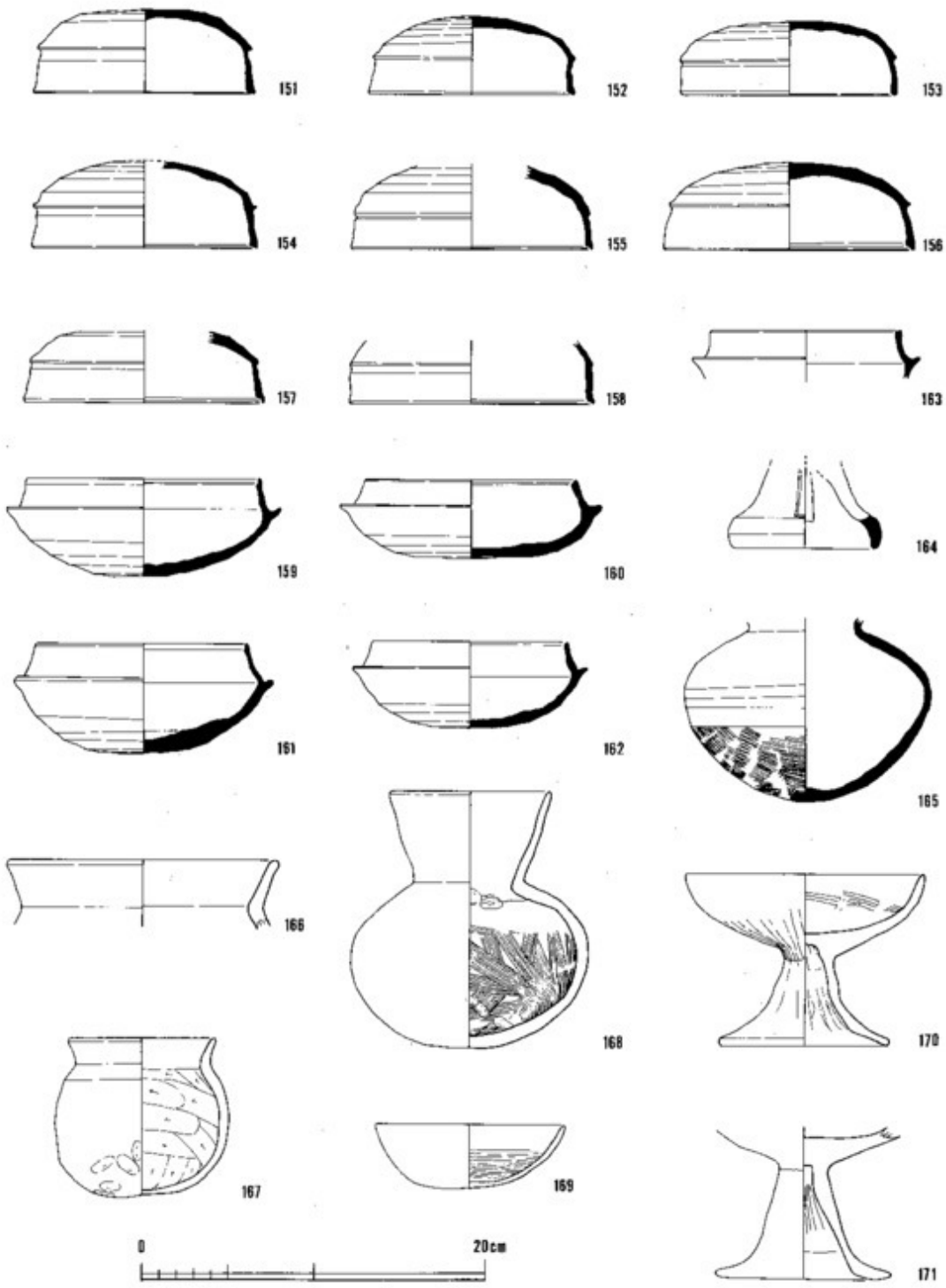
土師器 (第43図166～171・第44図172・図版十六上)

甕 (166) は口縁部のみ、「く」の字形に外傾し、端部は丸い。

壺 (167) は口縁部が短く外傾し、口縁端部はとがり気味に丸くおさめる。体部は球形で



第42図　旧河道（新）出土遺物（２）



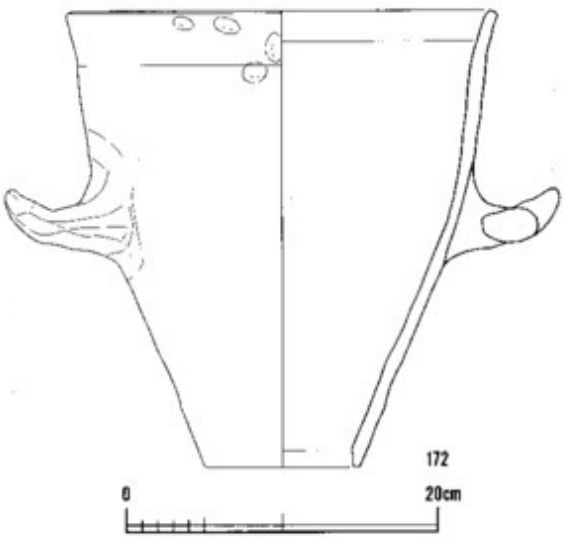
第43図　北東区　古墳時代後期包含層出土遺物（１）

底部は平らに近い。体部内面はヘラケズリ調整。口径8.6cm、器高9.4cm。

壺（168）は口縁部がふくらみをもって直線線的に開き、端部は丸味を持つ。体部は扁形球。体部内面は刷毛目調整。口径9.6cm、器高15.0cm。

杯（169）は丸底から体部が大きく開く。体部内面はナデ調整。口径11.2cm、器高3.8cm。

高杯（170.171）、（170）は口縁部が杯底部から内弯しながらほぼ直立する。口縁端部はとがり気味。脚部は中空の柱状部からゆるやかに開き、内面に稜を持つ。杯部内面はヘラミガキ。口径14.0cm、器高10.1cmを測る。



第44図　北東区　古墳時代後期包含層出土遺物（２）

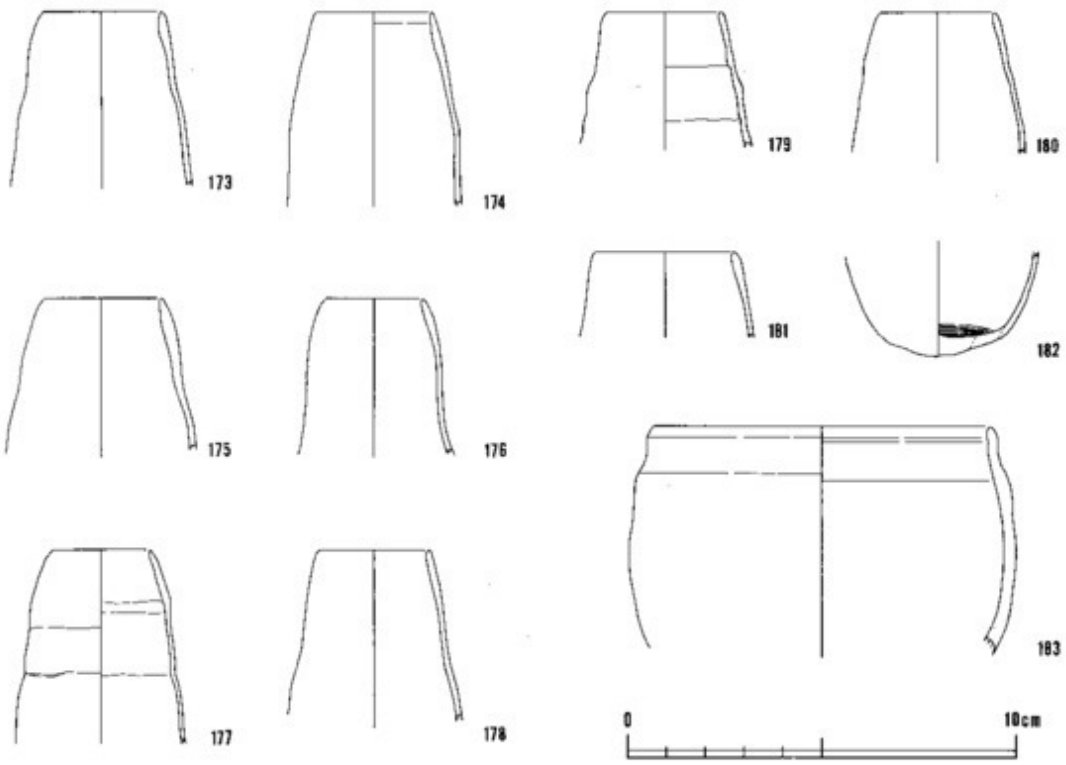
甑（172）は体部中程に張り付けの角状把手を持つ。底部から外傾してきた体部は、把手部からほぼ直立し、口縁部となる。口縁端部は若干外反し、丸くおさめる。体部は外面タテ刷毛、内面はナデ調整をおこなう。口径26.5cm、底径10.0cm、器高29.8cmを測る。（大平）

製塩土器（第45図・図版十六下左）

鷹取町遺跡では旧河道から製塩土器が出土している。１点を除き全て小型・薄手・丸底のものである（１類・173～182）。いずれの個体も細片化がいちじるしいが、口径４～５cm、高さ10cmほどのコップ形になると思われる。器壁の厚さは１～２mmと極めて薄手の作りである。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。調整は非常に丁寧で、外面はナデ、内面は板のような工具によるナデで仕上げている。焼成は堅緻な酸化焔焼成である。

もうひとつのタイプは口径８cm、高さ８cmほどの内弯する口縁部を持つものである（２類・183）。器壁の厚さは３mmほどで、胎土には砂粒が多く含まれる。調整は内面・外面ともにナデで仕上げられており、焼成はやや甘い。１類、２類ともに二次焼成痕は顕著であり、紫ないし桃色の変色が認められる。

さて、まず１類であるが、これは古墳時代中期後半から後期初めの大阪湾周辺地域に普遍的なものである。次に２類であるが、このタイプの製塩土器は類例がなく、また１点しか出土していないので他の用途の土器である可能性も否定できない。使用痕に製塩土器としての特徴が認められるのでここでは製塩土器として取り扱ったが、その用途が本当に製塩であったかどうか確証はない。（多賀茂治）



第45図　北東区　古墳時代後期包含層出土製塩土器

第２表　古墳時代竪穴住居址一覧表　（単位は㎡．m）

No	主軸方位	床面積	たて	よこ	主柱間距離	周溝	竈
1	N 6°30′W	(21.64)	(4.60) 4.70	(4.90) 5.42	—— 2.40 —— 2.90	×	×
2	N 5°E	32.14	6.28 6.42	6.04 5.10	2.75 2.97 2.75 2.66	○	×
3	N25°E	26.64	5.60 6.06	5.02 4.48	2.90 3.45 2.68 2.43	×	×
4	N13°E	11.16	3.50 3.50	3.85 3.62	2.58 2.70 2.92 2.84	○	○

（ ）内は推定値

4．鎌倉時代（第46図）

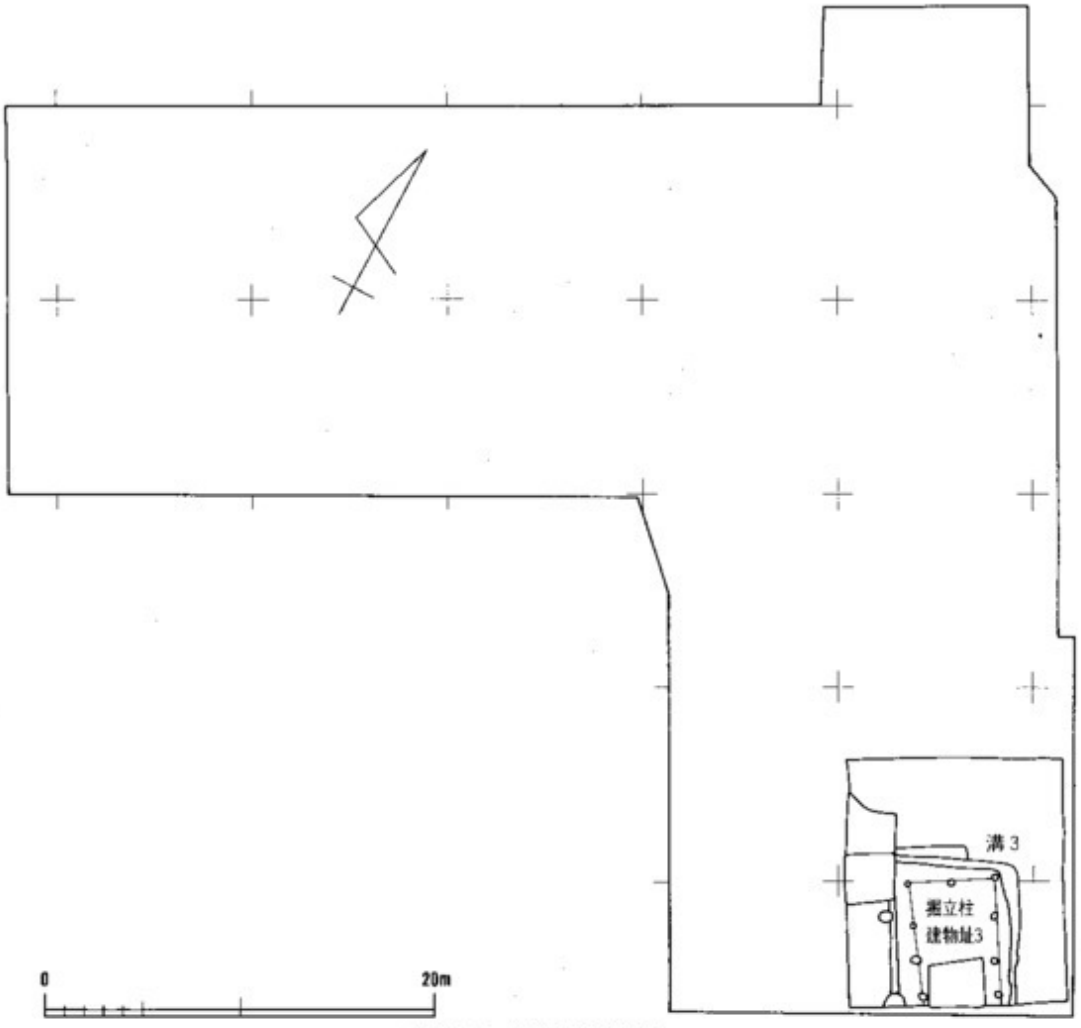
今回の全面調査で中世の遺構が確認できたのは、南調査区の内でも南半のみである。しかし、旧河道より北に遺構がないのではなく、全面調査区の北に設けた確認トレンチ１では住居に伴うと考えられる小溝を発見しており、集落は明らかに北にも拡がっていたと推定できる。

遺構は、側柱南北棟建物址３とそれを取り囲む溝３、及び２ヶ所の土壙である。

◎南区　掘立柱建物址・溝とその遺物

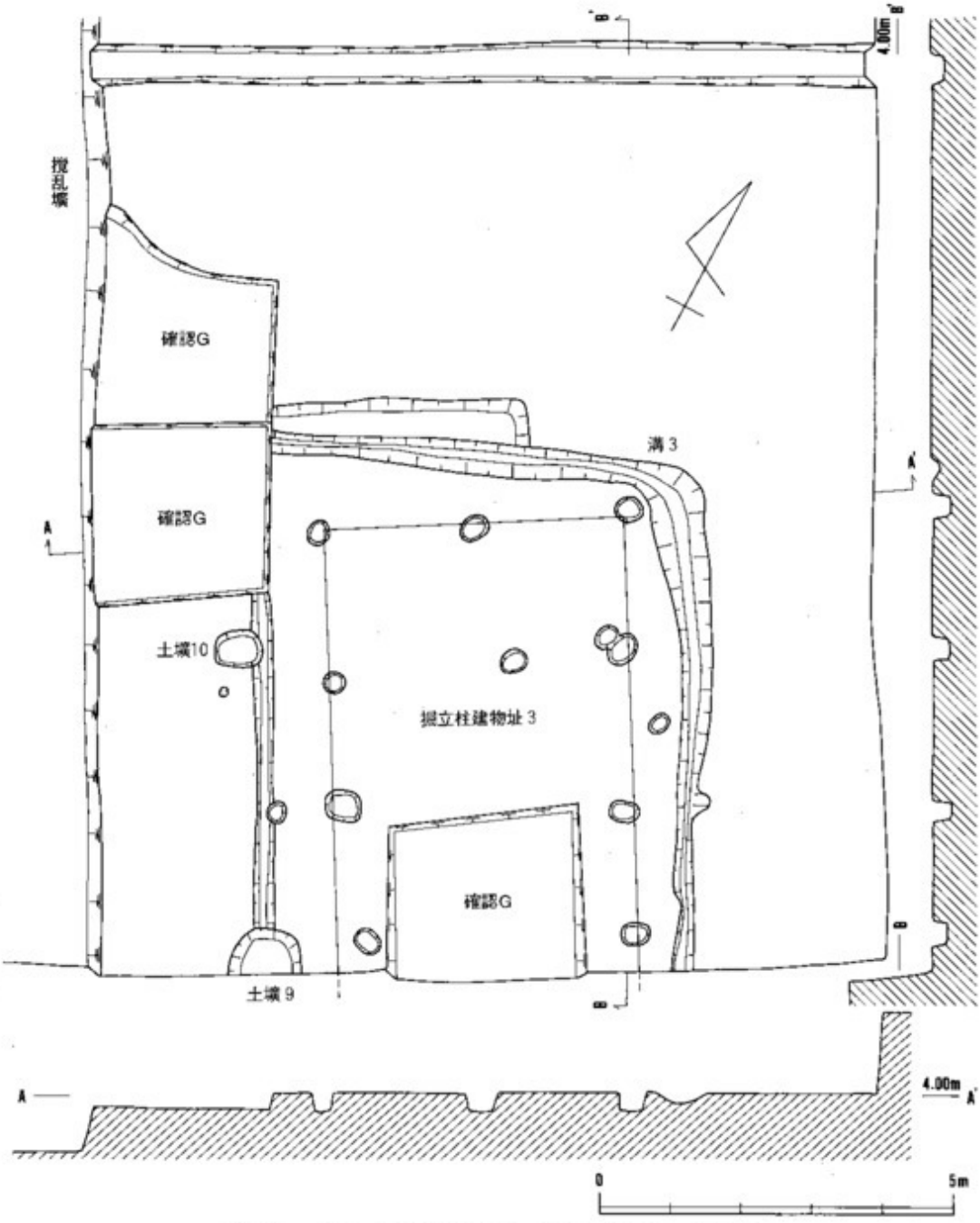
A．掘立柱建物址３（第47図・図版七下）

梁間２間、桁行は現状で３間を確認する南北棟側柱建物址である。南の梁行が調査区外のため、桁行の規模は不明である。北梁間約4.2m（14尺）、柱心々間距離約2.1m（７尺）。桁行

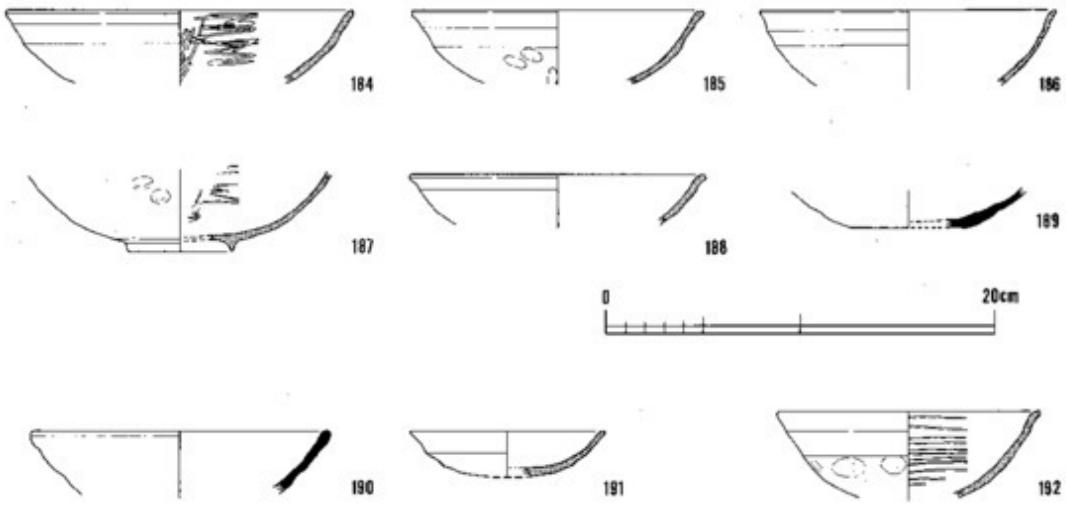


第46図　中世遺構配置図

現長約6.5mで、柱心々間距離約1.8m（6尺）～2.4m（8尺）を測る。掘方の基本平面形態は楕円形である。桁行柱列は北が磁北より約40度西に振れ、現地割りの方向にほぼ沿う。



第47図　南区　掘立柱建物址3・溝3・土壙9・土壙10



第48図　南区　掘立柱建物址３・溝３・土壙９出土遺物

掘立柱建物址西桁行柱列北第２柱穴の掘方内より、瓦器が１点出土している。

瓦器（192）は口径約13.2cmと小型の形態であるが、器高現長が4.4cmと比較的高い。体部は極わずかに内弯しながら開き、口縁部にヨコナデによる低い稜が巡る。体部外面には指頭圧の痕跡がわずかに残り、内面には螺旋暗文を施す。底部・高台は欠損する。

Ｂ．溝３（雨落溝）（第47図）

幅30～70cm、深さ10cm前後で平面的には「コ」の字形に見えるが、本来は掘立柱建物址３の周囲を巡っていた雨落溝と思われる。各柱列から約90cm（３尺）離れる。東桁行側が現長で約７ｍ、西側は北端が立会調査時のグリッドで消滅しているが、推定長はやはり７ｍとなる。ただ、北西側のコーナーが北東側に較べ約１ｍ程北にあるため、北側の溝に向かう両コーナーが直角にはならない。西側の溝は土壙９と10に切られている。溝内からは、13世紀代に属すると思われる極わずかの土器小片が出土している。

須恵器（第48図190.191）

椀（190）は体部が直線的に開き、口径は約13.0cmとなる。体部下半を欠損する。

土師器

小皿（191）は口径9.9cm、器高2.4cmを測る。底部から体部へと内弯しながら緩やかに移行し、口縁部はヨコナデによってわずかに外弯する。表面は剝離のため調整が不明である。

◎南区　土壙とその遺物

Ａ．土壙９（第47図）

調査区の西寄り南辺にあるため南半分は調査区外となる。平面形は東西長約１ｍ、南北現長

約70cmを測り、隅円方形になると思われる。西側の雨落溝の南端を切りこんで掘られている。深さは約30cmあり、灰混じりのブロック状の埋土が充填されている。壙内から出土する少量の土器片から見て、雨落溝内出土の土器とあまり時期差はないようである。

壙内から出土する土器は小片が多く図化できるものは少ないが、概ね13世紀代前半に属するものである。瓦器・須恵器と共に玉縁口縁の白磁椀も出土している。

瓦器（第48図184～188）

椀（184～188）と小皿が出土しているが、図化できたのは椀のみである。

(184～186)は口縁部がヨコナデによって、外面に二段の段をもって外弯しながら開く。(184)は口径約17.7cmで、口縁部がわずかに外弯しながら開く。口縁部内面には縦方向の後横方向の暗文を施す。(185)は口径約14.8cmで、体部外面に指頭圧痕を残す。両者とも底部を欠損する。(187)は口縁部を欠損するが、体部は内弯しながら大きく開く。高台径は小さく、断面逆三角形で高い。体部内面にジグザグ文がみられ、外面には指頭圧痕が残る。いずれも器高はそれほど高くないものと思われる。(184.187)は特に口径が大きくなる。(188)は口縁端部がヨコナデによって大きく外弯する。底部は欠損のため不明である。

須恵器（第48図189）

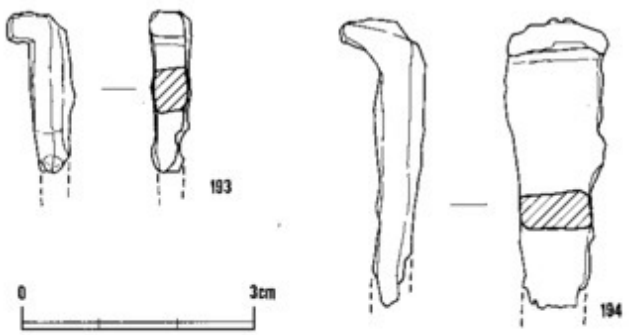
椀（189）は上半を欠損する。底部は糸切りし、大きな平底である。体部は大きく外反しながら開くと思われる。

B．土壙10（第47図）

長軸約70cm、短軸約30cmの楕円形平面を成し、底部は浅い舟形で、深さ約20cmを測る。内部からは土器片が少量出土している。掘立柱建物址３の雨落溝を切る関係にある。

◎北東区　確認調査中世面の遺物

後世の削平により、中世の包含層はほとんど残存していなかったが、わずかに残った包含層中より図化出来ない土器の細片と共に、鉄製の釘が出土している。



第49図　北東区　確認調査中世面出土遺物

鉄製品（第49図193.194・図版十六下右）

釘（193）は断面が約５㎜の正方形に近く、一端を約５㎜程折り曲げて頭部としている。現長約２㎝を測り、先端側が欠損している。（194）は頭部側の幅が約1.2㎝、先端側が約0.8㎝と先端に向かって狭くなっている。断面は長方形であり、厚さは約５㎜である。頭部は６㎜程折り返している。現長3.7㎝を見るが、先端側を欠損している。（平田）

第50図　現地説明会風景

第４章　まとめ

◎鷹取町遺跡の性格とその位置づけ

かって源平合戦の舞台となった須磨、この地（鷹取町）に発掘調査の結果その当時の村落の跡、そしてさらに遡ること600～800年前の古墳時代の村落の跡が発見された訳である。

最後に、古墳時代を中心とする鷹取町遺跡の集落変遷を考えてまとめにかえたい。

弥生時代

この時代の遺構は、検出されなかった。しかし、旧河道内（古段階）の埋土中にわずか数点の土器ではあるが、弥生時代の中期末から後期にかけてのものを発見しており、近辺にその遺跡が存在するのは間違いなかろう。同河道内には、続く庄内期のものも含んでいる。

周辺では、当遺跡北１kmに戎町遺跡があり、弥生時代前期から水稲耕作をおこなう村が形成されている。また北東約1.5kmには神楽遺跡が見つかっており、鷹取町遺跡と同時期の土器も出土している。

古墳時代

前期から、南区に土器棺・pit群が存在し、居住域としての利用が始まってきた。おそらく調査区外の東側に住居が存在するのであろう。河道を挟んだ北西区で検出した水田址は、この時期まで遡る可能性もある。

中期では、南区に掘立柱建物が認められる。北西区の水田址はこの時期には確実に存在したようである。しかし、中期末には水田部が河川の氾濫を受け、洪水砂により廃絶している。

後期になると、居住の中心は河川の北（北東区）の自然堤防上に移動する。なお、調査区の東と北へ遺構が拡がるために確定はできないが、遺構は掘立柱建物が認められず竪穴住居と土壙のみである。

竪穴住居は１・３・４が古く、２は３の建て替えと推定している。このうち一番小さい住居と考えるものにのみ、竈が北壁に設置してあった。当地方では、北東約14kmの生田遺跡で５世紀前半に最も早く竈が出現しているが、６世紀前葉にはまだすべての家屋に普及していなかったのであろうか。また、竈の支脚に土器を転用しているが、須恵器を使用しているのは非常に珍しい事象である。なお、竈付近出土のものに竈祭祀の様相を示すものはなかった。

次に遺物をみると、蛸壺・製塩土器等があり、農村集落以外の様相も呈している。農耕生活の合間に、夏は製塩・冬から春には飯蛸漁を行っていたのであろう。さらに遺物で注目されるのは、竪穴住居址２で検出した鋳型状の土製品である。鋳型と断定できないが、砥石の出土や焼土壙の検出、さらに北東約１kmにこの時期の豪族の居館である松野遺跡が存在することからも注意を要す。しかし、坩堝・鞴羽口等の関連遺物は認められなかった。

そして、6世紀の中葉頃をもってこの村は、廃絶してしまうのである。

奈良・平安時代

この時代には、調査区内に村が存在しなかったようである。しかし、万葉集には須磨の海人が塩焼きしている情景が歌われていることから、近辺にはそういう集落が存在したと考えられる。

鎌倉時代

新たに村が登場してくるが、その性格は明らかにしがたい。やがて南区と北東区を分けていた河道は、完全に埋没してしまい、村も再び廃絶したようである。

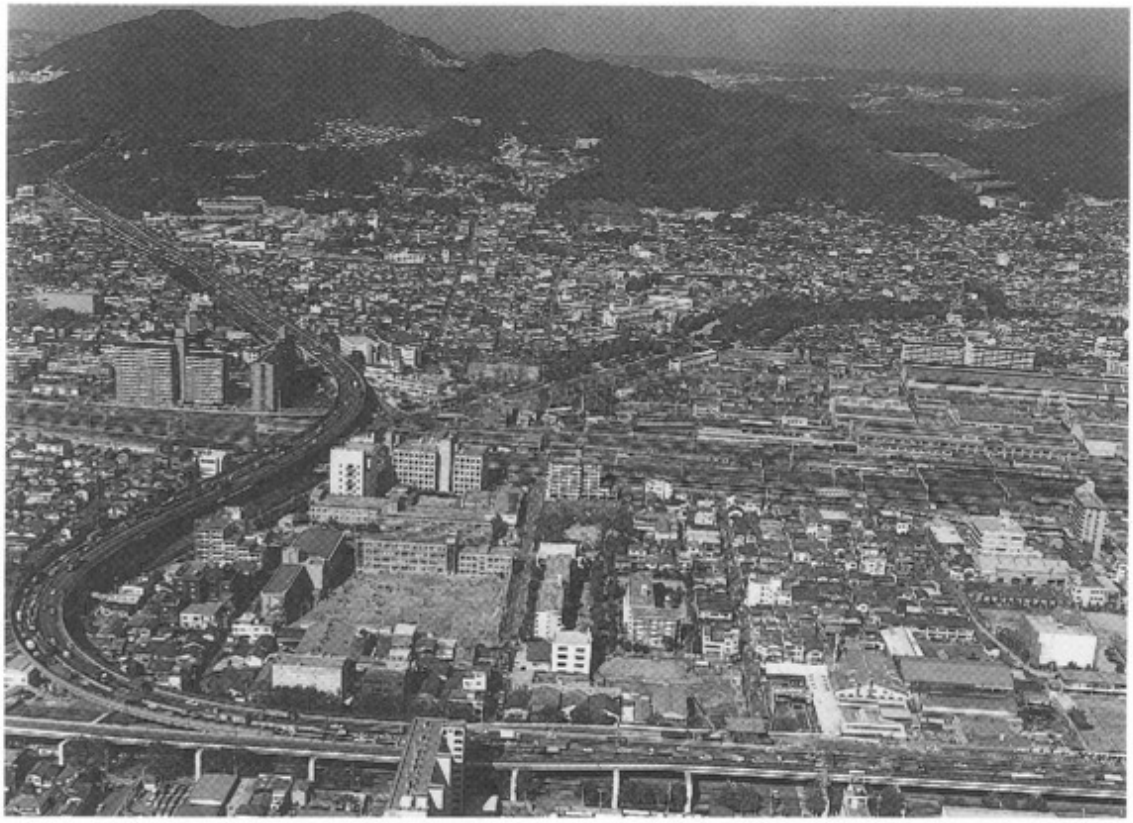
参考文献

1．喜谷美宣他『新修神戸市史』歴史編Ⅰ　自然・考古　神戸市　1989年
2．菅本宏明『神楽遺跡』発掘調査報告書　神戸市教育委員会　1981年
3．千種　浩『松野遺跡』発掘調査概報　神戸市教育委員会　1983年
4．山本雅和『戎町遺跡』第1次発掘調査概報　神戸市教育委員会　1989年
5．神戸市教育委員会『神戸市埋蔵文化財年報』昭和58年度　1986年
6．神戸市教育委員会『遺跡現地説明会資料』　昭和61年度
7．神戸市教育委員会『遺跡現地説明会資料』　昭和62年度

図　　版

北東区　竪穴住居址２出土土器

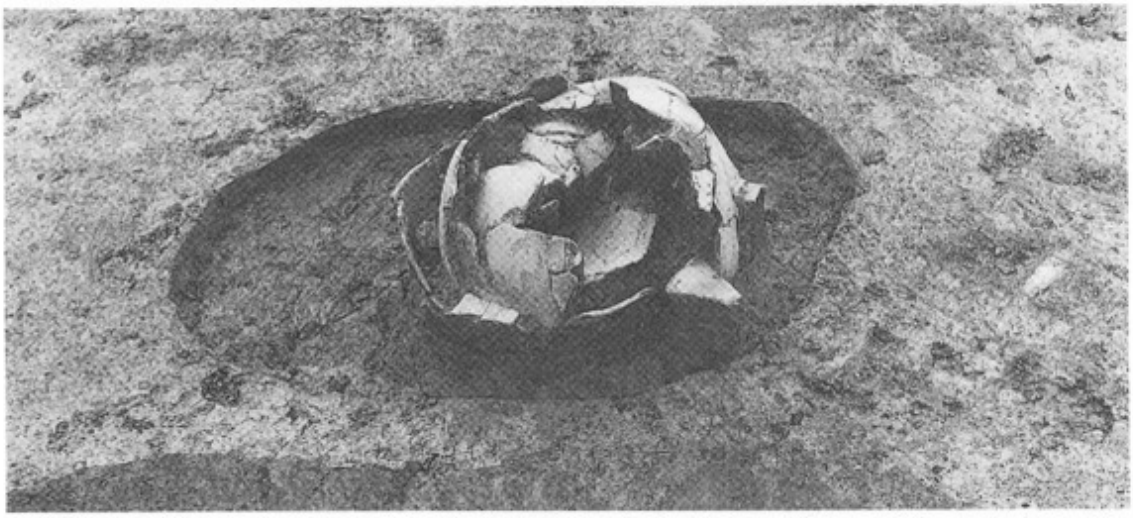
図版一　調査地区



調査地区遠景（南から）

調査地区全景（南から）

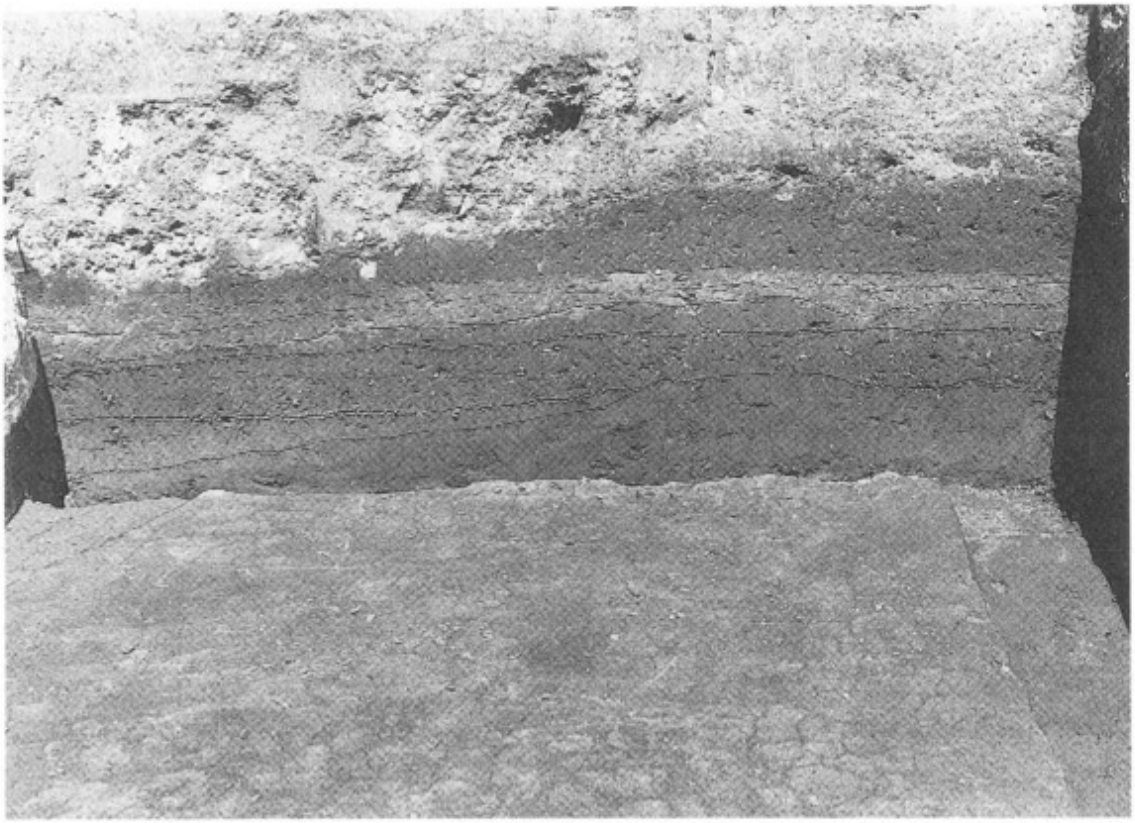
土器棺1（西から）



土器棺2（東から）

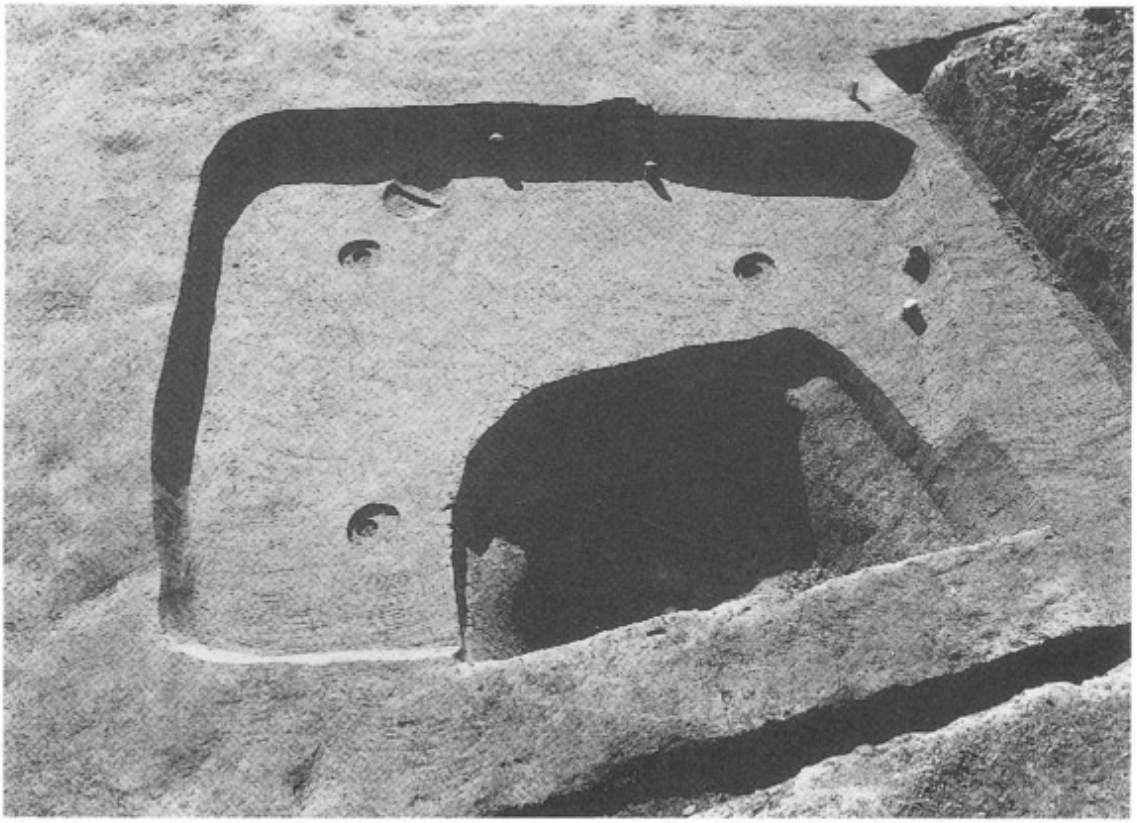
土壙1　土器出土状況（南から）

水田址（西から）

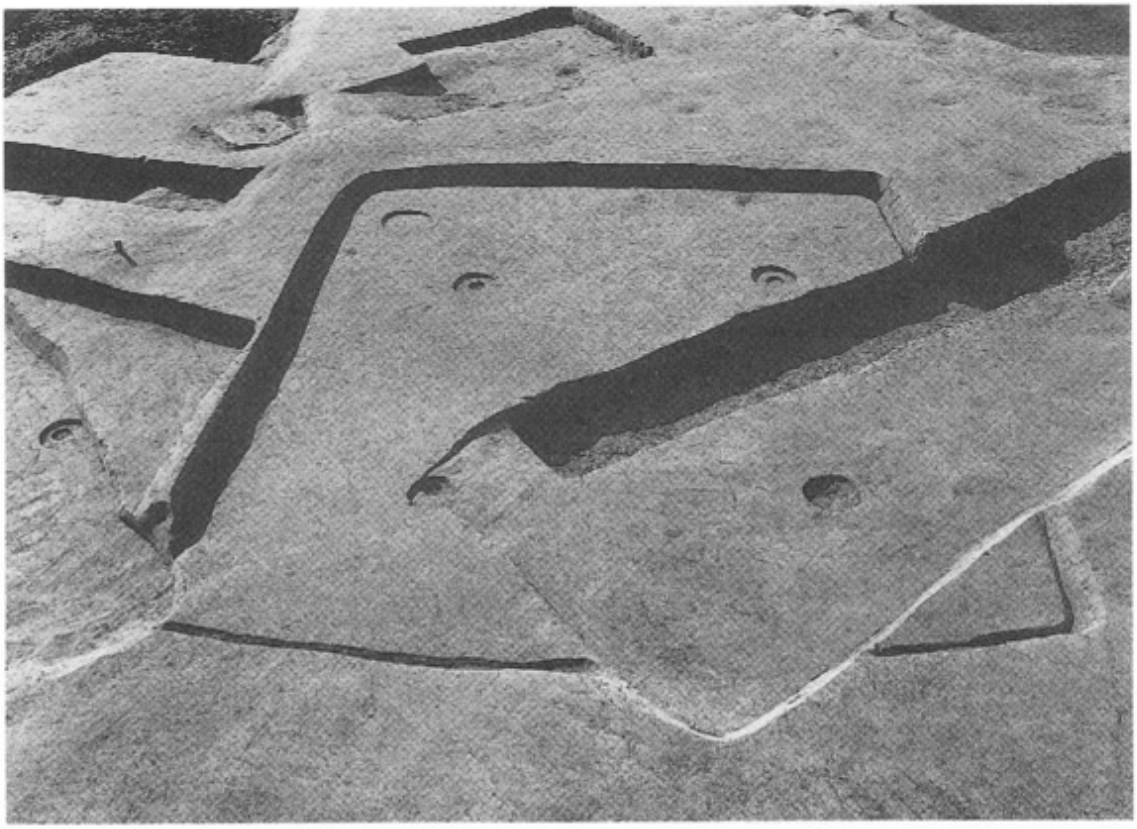


確認トレンチ10 水田大畦畔断面（西から）

竪穴住居址群全景（西から）

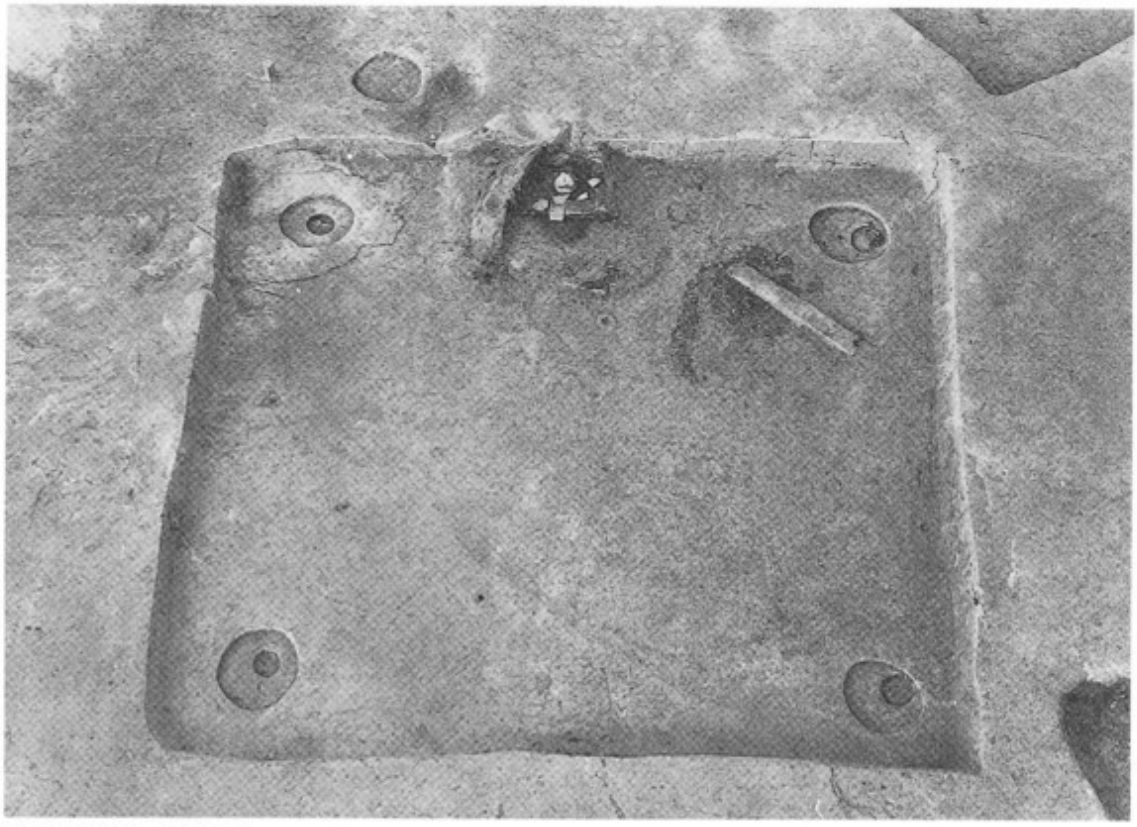


竪穴住居址1（北から）



竪穴住居址２（北から）

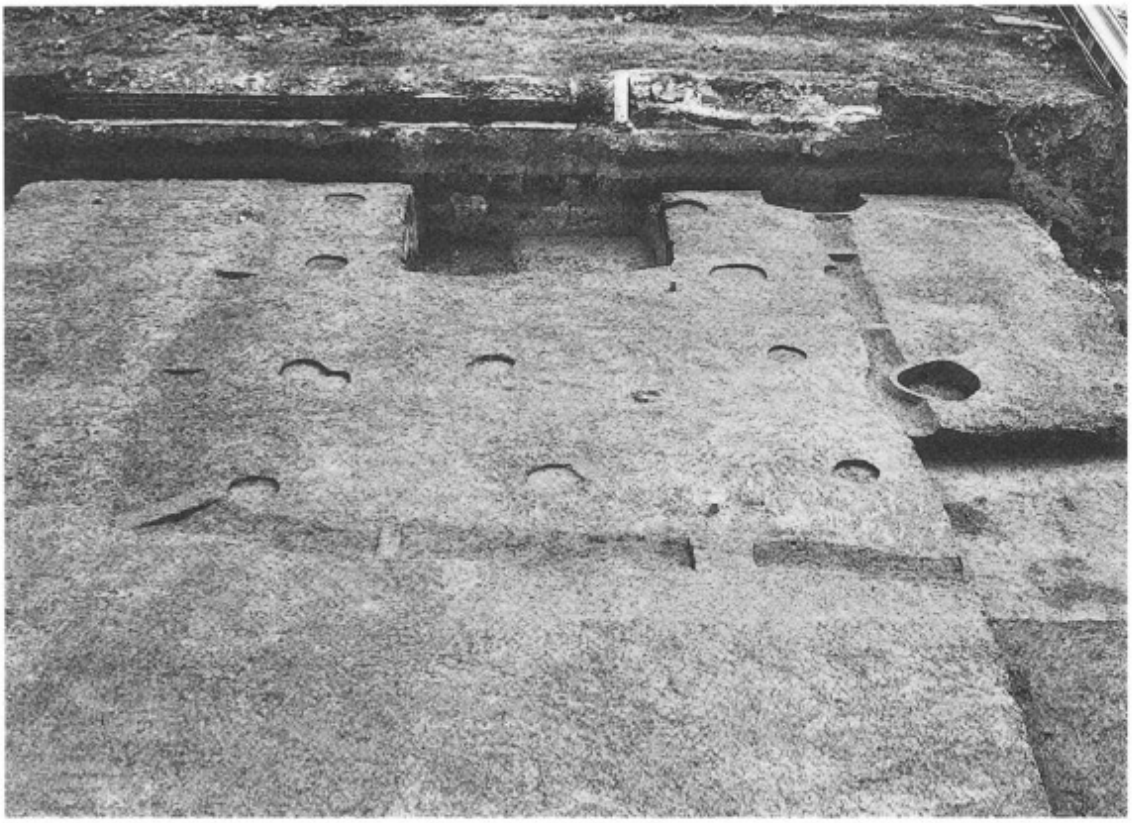
竪穴住居址２　遺物出土状況（東から）



竪穴住居址４（南から）

竪穴住居址４竈（南から）

旧河道断面（西から）



掘立柱建物址３（北から）

図版八　土器棺一・二、土壙一、古墳時代前期・中期包含層出土遺物

1

2

3

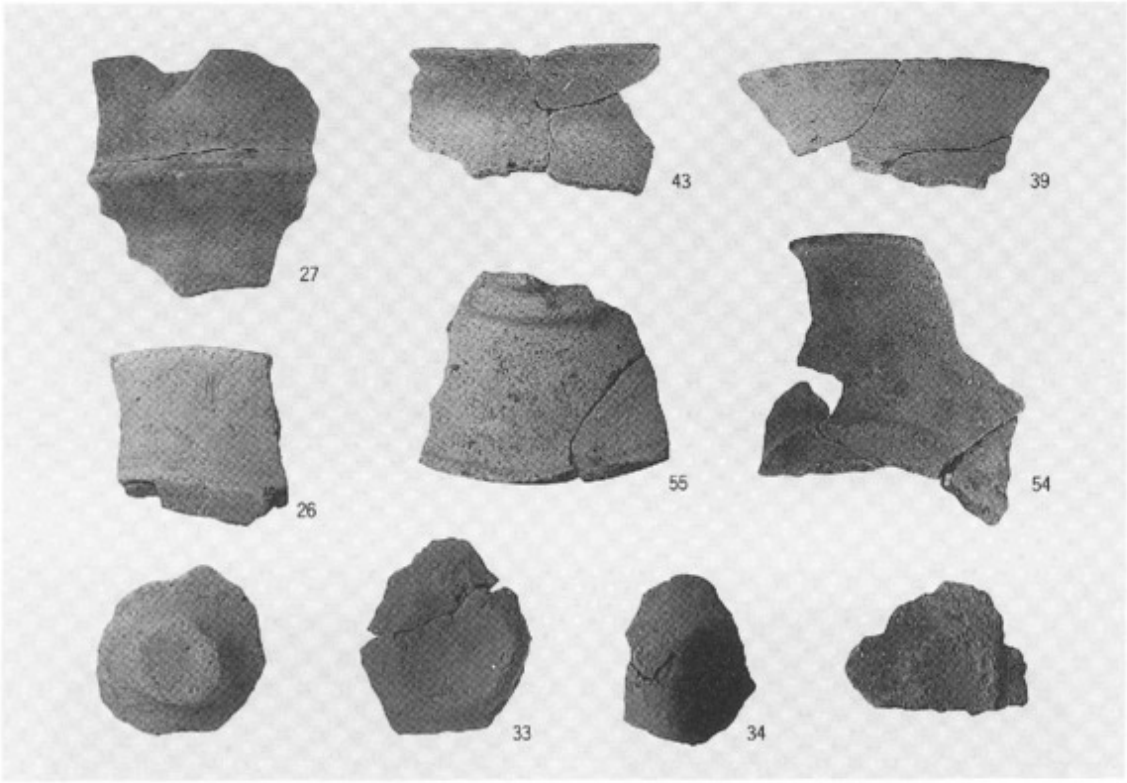
32

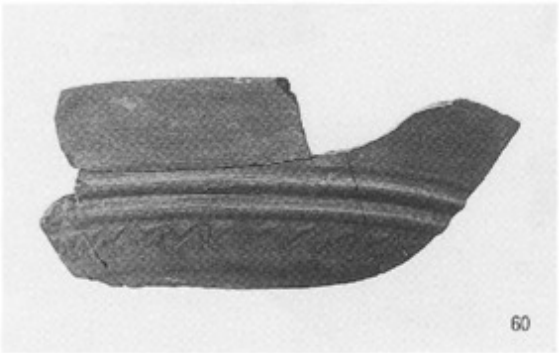
4

36

24

図版九　古墳時代前期・中期包含層、水田址上層出土遺物



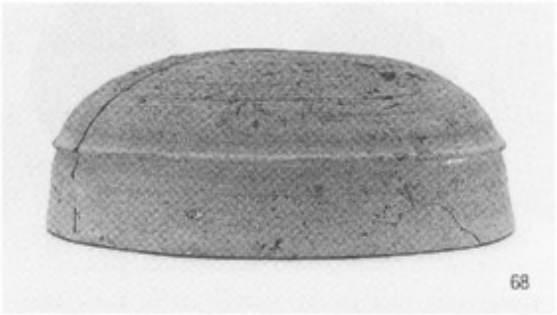


図版十　水田址上層、竪穴住居址一出土遺物

62

63

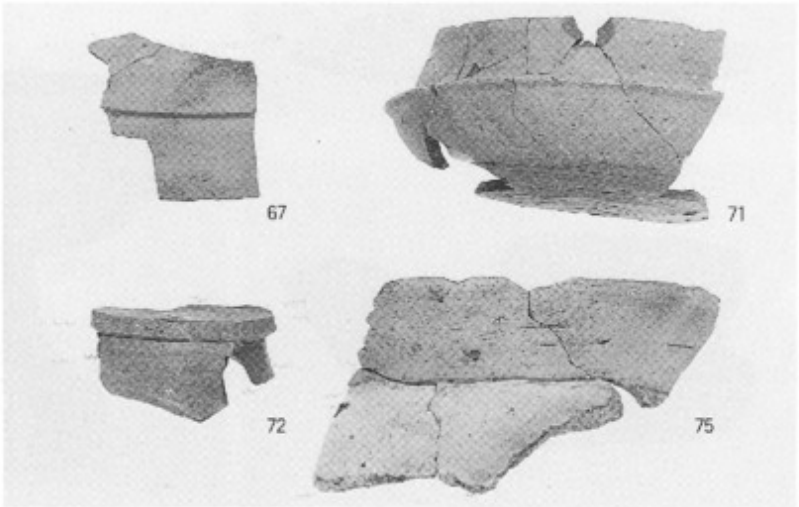
66


68

69

70

74


67
71
72
75

図版十一　竪穴住居址二出土遺物

76

77

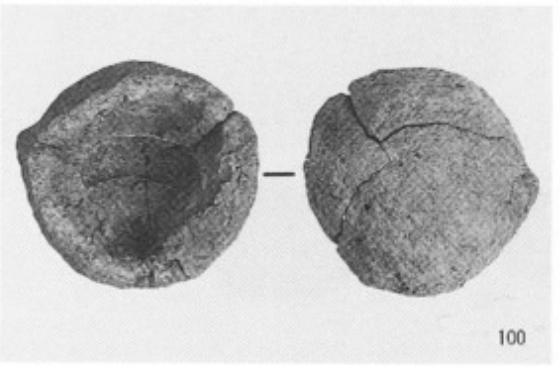
81

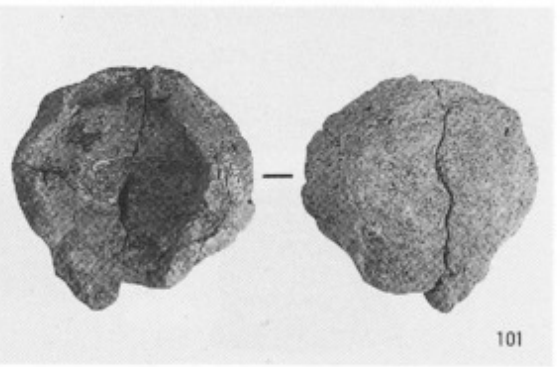
82

95

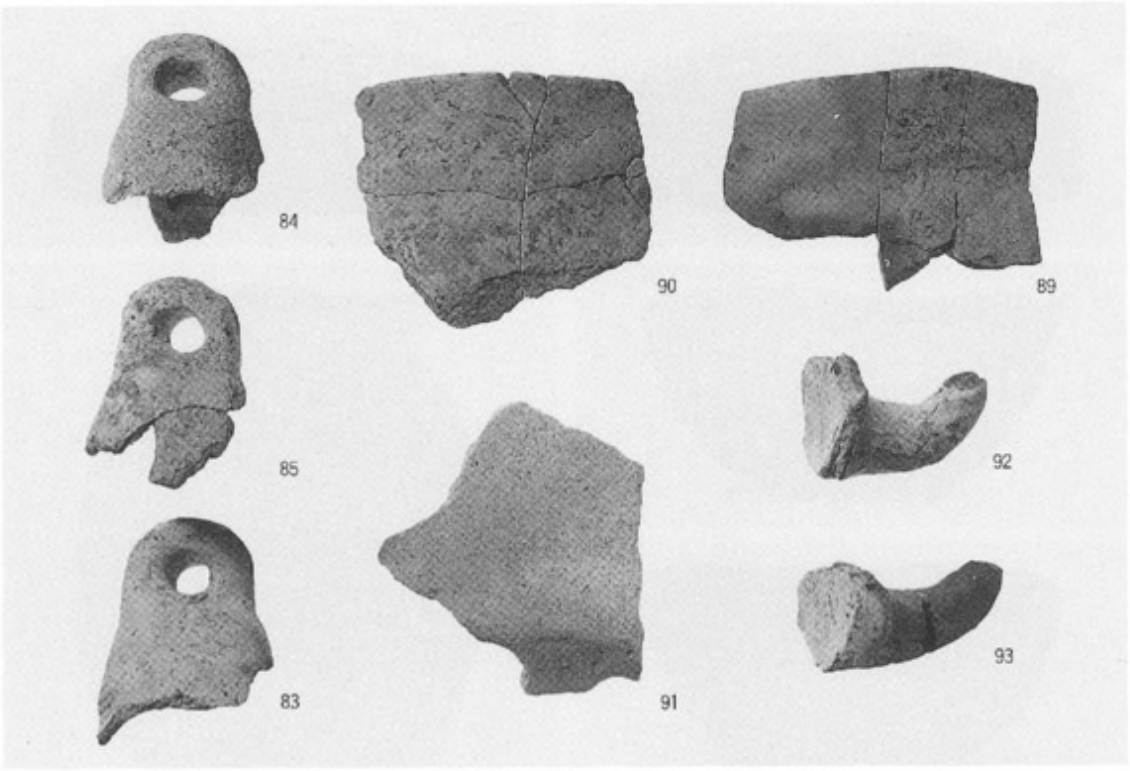
94

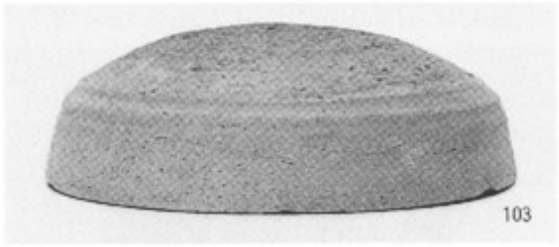
96

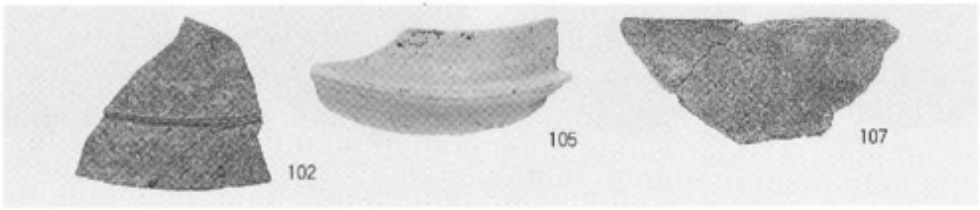

100


101

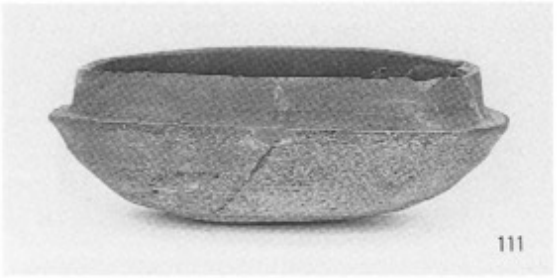
図版十二　竪穴住居址二・三出土遺物





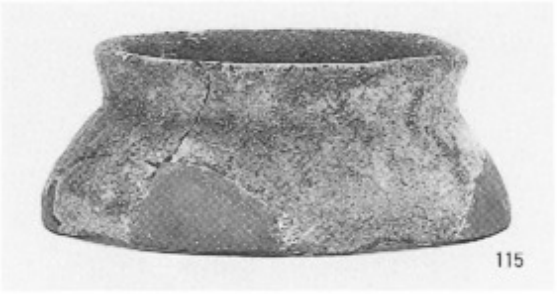


図版十三　竪穴住居址四、土壙三、旧河道(古)出土遺物

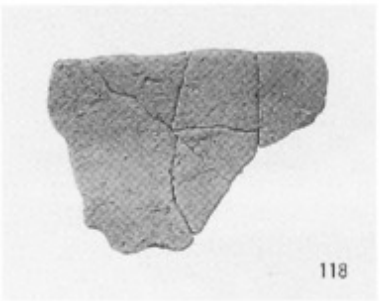

111

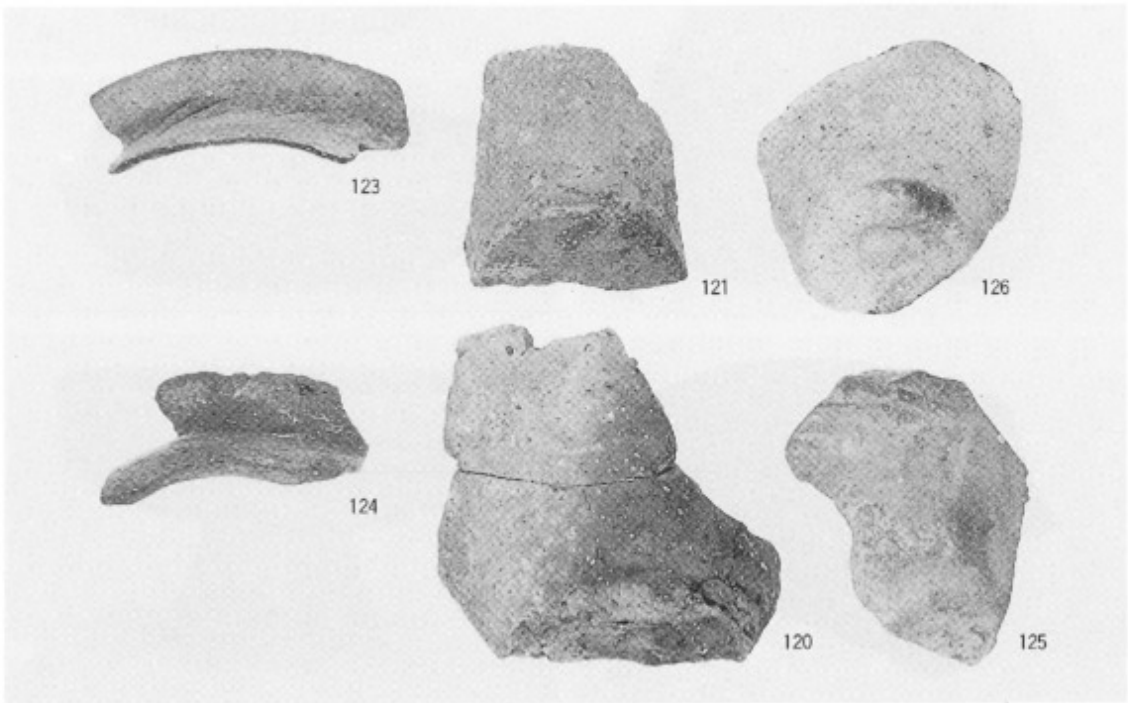
112

114


115

116


118

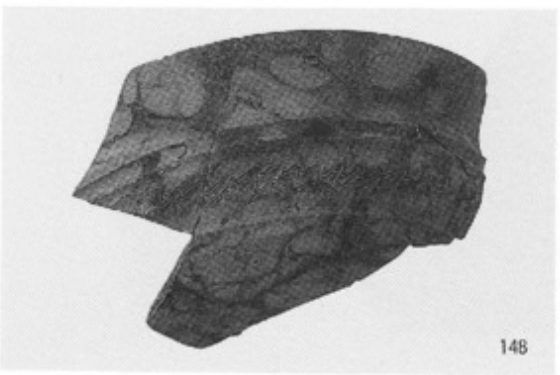

123
121
126
124
120
125

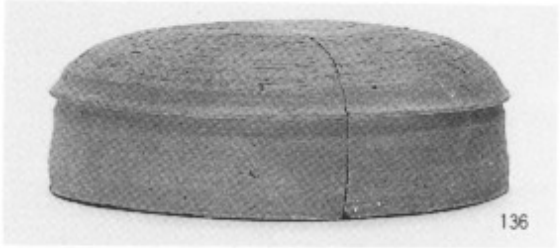
図版十四　旧河道(新)出土遺物

119

129

132


148


136

141

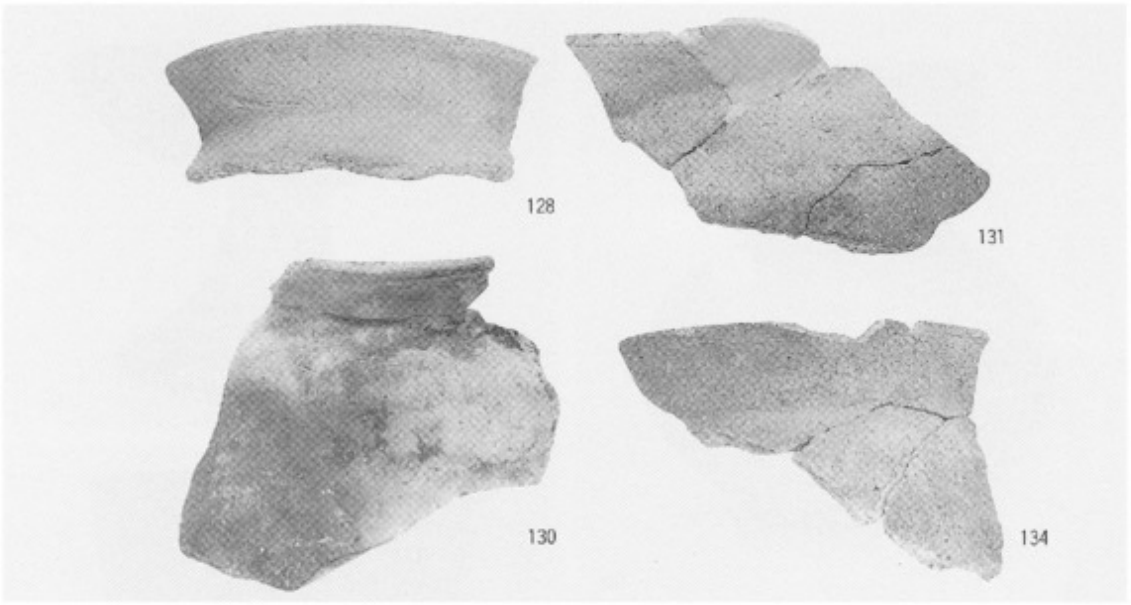
142

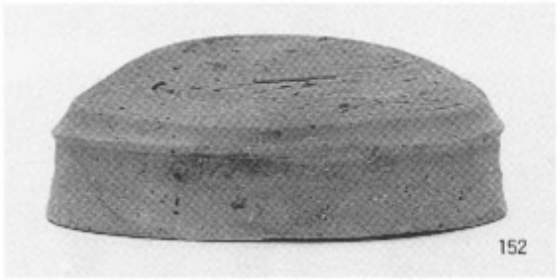
144

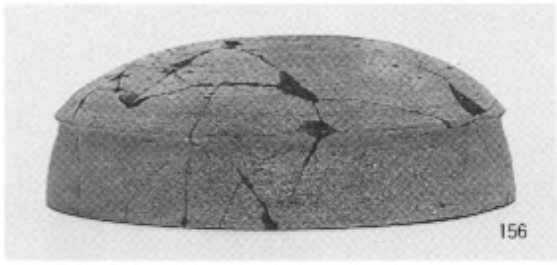
147

149

図版十五　旧河道(新)、古墳時代後期包含層出土遺物







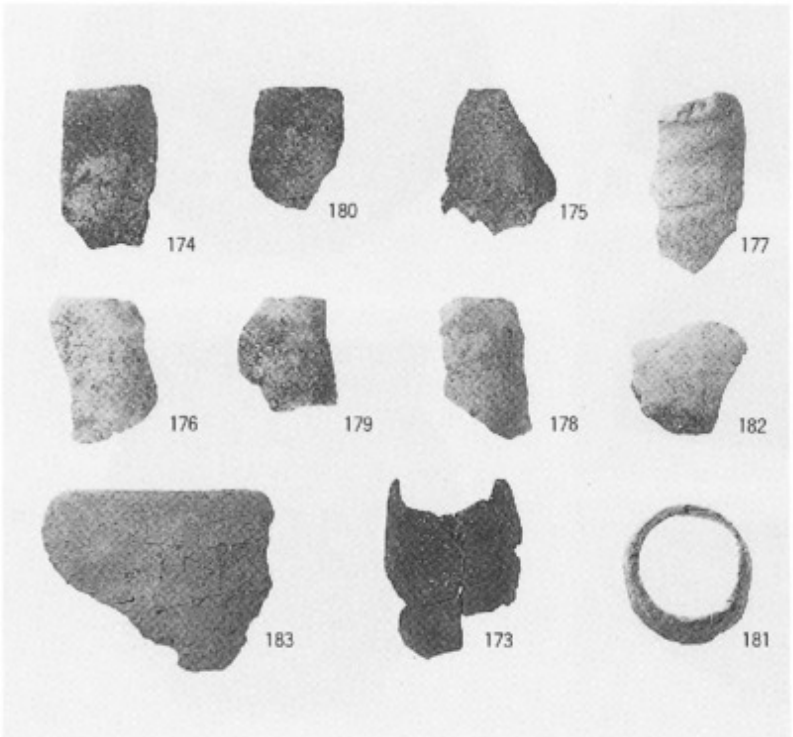
図版十六　古墳時代後期包含層、中世面出土遺物

168

169

170

172



兵庫県文化財調査報告書　第89冊

鷹取町遺跡

－須磨郵便局移転建設に伴う
埋蔵文化財調査報告書－

平成３年３月10日　印刷
平成３年３月15日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５　電話　078-531-7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　水山産業株式会社
〒653 神戸市長田区二番町３丁目４－１　電話　078-577-3757㈹